天正十二年三月二十五日

正三年十二月十一日ノ條ニ、純忠ト和スルコト、同四年六月十六日ノ條ニ、有馬鎮貴ヲ攻メントシテ、兵ヲ肥前高來ニ出スコト、同六年三月二十八日ノ條ニ、島津義久ト好ヲ修スルコト、同年六月十九日ノ條ニ、大友義統、兵ヲ筑後ニ出スヲ以テ、援ヲ毛利輝元ニ請フコト、同七年八月是月ノ條ニ、再ビ純忠ト和スルコト、同八年六月是月ノ條ニ、筑紫廣門ト和スルコト、同年七月十九日ノ條ニ、佐嘉ヲ子政家ニ譲リ、須古ニ退クコト、同年十月是月ノ條ニ、輝元ト好ヲ修スルコト、同年是歳ノ條ニ、筑後、肥後ヲ略スルコト、同九年四月二十一日ノ條ニ、蒲池氏ヲ滅スコト、同年四月二十九日ノ條ニ、田尻鑑種ヲ攻ムルコト、同十年十月四日ノ條ニ、隆信、政家父子、鑑種ト和スルコト、同十一年十一月二十七日ノ條ニ、合志親爲ヲ攻ムルコト、同十二年二月十三日ノ條ニ見ユ、

二十五日、壬寅、羽柴秀吉、山城山崎城ノ天主ヲ壞ツ、

〔兼見卿記〕六　三月、

廿五日、壬寅、〇中略松田勝右（殿行）衞門尉所ヘ遣喜介、今朝山崎之天主ヲ爲壞取、奉行罷越之由申了、四五日可爲滯留之由申了、〇下略

徳川家康、尾張羽黒ノ戰勝ヲ下野皆川ノ皆川廣照ニ報ズ、

〔佐竹文書〕五　乾

先書具申入候處、從中途馳歸之條、重而以中河市介申來候、仍其表之樣子委細彼口上相含候、將又羽柴日來餘不儀（義）相動付而、信雄我等申合、彼等之爲可及存分、去十三日、到尾州清須出馬、同十七日、尾濃之境羽黒と號所、池田紀伊守（勝入）、森武藏守（長可）楯籠在之處、押寄卽時乘崩、千餘人討捕候、彼兩人等敗北、前代未聞之躰候、然者五畿内、紀州、西國、中國悉調略之子細數多候條、萬方按合、上洛不可有程候、於樣子ニ可御心安候、具市助可爲演說候、恐々謹言、

三月廿五日　　家康　御判

皆川山城守（廣照）殿

〔佐竹文書〕五　坤

去比中河市介被差越候處、自中途罷歸候、其表樣子先書申達候間、不及重說候、將又此表被致出馬之儀、羽柴筑前餘ニ恣之振廻、甚以不儀（義）之動共背仁道候間、爲可有有（カ）退治、信雄、家康被申談上洛候、行之樣子諸方被任存分候、去十七日、到于濃州口被動候所ニ、境目羽黒之地ニ、池田紀伊守、森武藏守被持出

天正十二年三月二十五日

根來雜賀四國ト連絡シテ和泉河内ニ行動ス

大久保忠泰

構候間、以先勢卽刻乘破、敵千餘被討捕之候、右之兩將敗北、比興前代未聞候、中々捨(すて)儀不及一防戰逃散之間、兩人不被討留候事無念不過之候、依右之威風、地利三ヶ所自落候、將又上方之調略五畿内、北國、紀州、四國西國被示合候、入洛不可有程候、根來、雜賀、四國相談、到泉州河州表及行候間、筑前守到途中雖罷出候、失治術無一行徒在滯候、今少如何樣ニも引出、無二被遂合戰可被討果候間、一途候、何樣本意案之内候、於首尾者、可御心安候、猶追々可申入候間、令省略候、恐々謹言、

三月廿五日　　大久保新(忠泰)十郎

皆川山城守殿御宿所

○家康ノ先鋒酒井忠次、奥平信昌等、森長可ヲ羽黒ニ破ルコト、本月十七日ノ條ニ見ユ、

二十六日、癸卯、羽柴秀吉、佐竹義重ニ上國ノ形勢ヲ告グ、〔佐竹文書〕五乾

近日者不申承候、仍今度家康搆表裏、信雄若輩仁を申掠、普(譜)代之家老者兩三人無謂去六日於長嶋被爲切腹候條、不相屆儀与存、則至伊賀伊勢差遣

伊勢一國ヲ平定スト言フ

犬山ヲ攻陷ス

根來雜賀等ノ一揆ヲ破ル

明日木曾川ヲ越エ清洲ヲ攻ムベシ

木曾義昌　上杉景勝　ハ秀吉ト

人數候處、佐久間甚(正勝)九郎、中川勘右衞門、林與五郎、池尻平左衞門、深井以下取出候處、先手者及一戰、卽時ニ切崩悉討捕、峯、神戸、楠其外城々或責果、或令赦免、一國平均ニ申付候事、

一伊賀國之事、是又平均ニ申付候事、

一尾州表儀、池田紀伊守、森武藏守相働、去十三日犬山城其外數ヶ所責崩、悉刎首、過半任存分候事、

一去廿二日、至泉州面、根來寺、雜賀、玉木、湯川其外一揆三万計ニ而取出候所、岸和田先(在カ)番者切懸、首五千餘討捕候、以其競敵城不殘乘取、紀州面迄存分申付隙明候事、

一家康清須令居陳條、卽出人數可押詰處、大河數ヶ所有之而、多數依難相越、舟を寄幷舟橋を懸申付而遲々候、明日廿七日、秀吉越河、清須近邊迄可押寄候、自然家康於執出者、遂一戰可討果事案内候事、

一家康表裏無是非候、然上者向後如何樣之儀候共、重而許容不可申候、定貴邊へも、每邊可爲右之分候、此時東州各被相談、御計策尤候事、

一信州木曾(義昌)、越後景勝對此方無二入魂候間、是又被仰合、可被及御行事肝要

天正十二年三月二十六日

天正十二年三月二十六日

候、委細此使者口上申含候、恐惶謹言、

三月廿六日　　秀吉 花押

佐竹殿(義重)参人々御中

美濃兼山ノ森長可、遺書ヲ尾藤甚右衛門ニ送リテ、後事ヲ託ス、

〔下村誠氏所藏文書〕○尾張

覺

一さゐひめのつゐ、秀吉様へ進上、但いまゐ宇治にゐり、

一たいてんもく、秀吉様へ進上、ふざにあり、

一もしうちゑに候ハヽ、此分に候、母ニ候人ハ、りんまんふん秀吉様へ御も

らい、京ニ御いり候へく候、せんハ(忠政)今のごとく御そだに奉公之事、

一我々あとめくをゝ〳〵いやまて候、此城ハりゐめまて候間、たしりゐるも

のを秀吉様よりおりせられ候へと御申之事、

一おんな共ハいそき大うき(坂)へ御越候へく候、

一あしきちやのゆとうく、りさゐ、ゐきさし、せんニ御とらせ候へく候、いつ

をもゝ〳〵ふざのごとく御とゝけ候へく候、ふざのやうハゐをせんにとら

せ申候、但成次第此由御申候へく候、

天正十二三月廿六日(あさ)　むさし

尾藤甚右衛門さゐ(本阿彌)申給へ

又申候、京のやんかをゝところに、ひそうのゐきさし二ツ御いり候、せん

ことらせ申候、尾甚ニ御申候へく候、おこう事京ハまち人に御とらせ

候へく候、くすしのやうゐる人ゟ御ゑけ候へく候、ゝに候人ハ、りゐ

ゐいて〳〵京ニ御いり候へく候、せんこゝもとゐきさし候事いやゟ

て候、十まんニ一ツ百万ニ一ツさうまけニゐり候ハヽ、ミゐ〳〵ひを

りけ候て御ゑに候へく候、おひさゟも申候、以上、

〔當代記〕二　此以後相互動躰を見ニ(依之可)武藏備不堅固、素武篇ヲ嗜主也、是ヲ無念ニ存、可討死之由思定歟、遺跡ノコヲ(トヒカ)書置ヲシテ、硯箱ニ置ケルヲ、四月九日、於岩崎表討死之貽見之、誠ニ士の本意哀ナリシ哀共也、○(上略、羽黒ヲ秀吉、小牧ニ出張ノコトニカ、ル、本月十七日及ビ二十八日ノ條ニ收ム、)

〔森氏軍記〕○(譽)岐　森三左衛門殿、同武藏守殿様子書上申事

一○(中略、長可、羽黒ニ戰ヒテ、敗ルヽコトニカ、ル、本月十七日ノ條ニ收ム、)此義を殊外無念ニ思召、兎角重而ハ

長可死ヲ決ス

おこうハ京都ノ町人ニ嫁セシムベシ

萬一總敗軍トナラバ放火シテ皆死スベシ

遺産ヲ忠政ニ讓ル

兼山城ニハ秀吉ヨリ人ヲ選ビテ置クベシ

長可戰死セバ母ハ京都ニ居住セヨ

さゐひめノ壺

入魂

天正十二年三月二十六日

天正十二年三月二十六日

討死可被成と御究候て御書置被成候、其後長久手御合戦之時、右を思し
めし被詰候に付、白出立に被成、御討死被成候、右之御書置を私親林新右
衛門尉、各務兵庫、(林道忠)拙者と三人、太閤様御前へ持參仕候へハ、御涙を御あふ
し御惜被成候、則跡目之儀ハお千殿へ被仰出候、新右衛門ハ金山に罷在
候、各務兵庫ハ岩村に罷在候、私ハお千殿に付候て上方に罷在、御千殿ヲ
傅立候へと被仰出候事、

白ノ裝束
秀吉長可ヲ惜ム

佐保姫ノ壺

〔森家系譜〕 森武藏守長可
一尾州春日(井堀)郡長久手御陣四五日前、武藏様御家中侍不殘御廣間へ出仕御
目見仕候時に、諸役等被仰付、何も退出之砌、奥へ被爲入候而、又御立歸
被成、先各相待候へ、今度秀吉之御意に而、佐保姫之茶壺求置候間、一覽仕
候得と被仰、則御自身裸壺に而御抱被成、廣間に被爲置御入被成、何も
致拜見候、御討死之後承候へハ、秀吉公へ上ルと御書置に被遊候由、及承
候事、(森家先代實錄ニハ、コノ次ニ、此壺求メ給ふ節、代金不足に付、京都八文字屋休徳齋御用立しと也トアリ、)

〔森家先代實錄〕 (四)長可君 一長可君去ル羽黒の合戰に勝利ヲ失ひ給ふ事、
無念ゝ思食、御心安キ御側の者へハ、此度ハ討死乃覺悟也と被仰しと也、

尤長曾(東カ)、增田兩人宛所ゝて、母の事賴上らはゝゝと御書置被成候て、實相坊
と云茶道に預置給ひ々る由、林新右衛門、各務兵庫、林長兵衛、右の御書置
と佐保姫の葉茶壺ヲ添て、秀吉公へ差上々れゝ、御落涙あされ、則右家老
三人を召さ給ふ、金山の領知御舍弟千丸君へ被仰付候間、林新右衛門ハ
金山に居て諸事相勉へし、林長兵衛ハ於千に相添上方に可相詰、各務兵
庫ハ濃州岩村ヲ相守、隨分於千ヲ守置候様被仰渡也、

秀吉兼山ヲ長可ノ弟忠政ニ與フ

奥平信昌ノ部下長可ノ遺書ヲ拾フトノ說

〔參考〕

〔大雲山誌稿〕 (三十六源姓藤原姓御系圖) 奥平信昌(九八郎、) 四月、(天正十二年)森武藏守、池田勝
入、家康公諸勢ト相戰フ、時ニ武藏守以前羽黒ニ於テ、信昌ノ小勢ニカケ立
ラレ、敗軍セシ妛ヲ憤リ、此度討死セント、一通ノ書ニ認メ置キ、長久手ニテ
終ニ討死ヲトクル、此書武藏守硯箱ニ入レ、陣小屋ニ置ケルヲ、信昌ノ士ヒ
ロフ、

二十七日、(甲辰、)本願寺光佐、(顯如、)長宗我部元親ノ使ヲ見ル、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕 (廿七日)○(山城)土佐國長宗我部(宮内少輔)より、年頭之使僧參著、則御對面、太刀馬代三百疋、御返禮

秀吉渡ノ兩岸ニ塞ヲ構フ

秀吉十萬餘ニテ美濃ニ入ル

太刀馬代　五百疋、

美濃竹鼻ノ不破廣綱、羽柴秀吉ノ動靜ヲ徳川家康ニ報ズ、是日、家康、之ニ答フ、

〔不破文書〕

節々羽柴樣躰被示越、眞被入御精儀、無申計候、然者渡之兩方ニ構拵之由候、彼等憶意敗北之覺悟無疑候、次朶柿一折是又爲悦候、尚西尾（吉次）可申進候、恐々謹言、

三月廿七日　家康（花押）

不破源六（廣綱）殿

二十八日、乙巳、羽柴秀吉、尾張ニ出デ、樂田ニ陣ス、徳川家康、清洲ヨリ小牧ニ入リテ之ニ對ス、尋デ、織田信雄モ亦伊勢川内長島ヨリ之ニ赴ク、

〔野坂文書〕　○十一安藝

家康尾劒堺陳取候之條、可被討果之由候て、筑州御人數十万餘にて、至濃州御陣替候、一兩日中家康城清須（ニ脱カ）申へ被成御取寄候、○上下略、三月二十二日附、野坂元行宛、渡邊清忠書狀、全文ハ本月二十三日ノ條ニ收ム、

二十一日、美濃ニ著陣ス

明二十七日ヲ期シテ清洲ニ進擊セントス

二十八日、木曾川ヲ越ユ、家康小牧ニ陣取ル、秀吉ノ先鋒諸軍ノ配備

徳川事三介殿後見之仕候付而、可被討果之由候て、尾劒表へ陣替候、廿一日ニ至濃劒著陣候、一兩日中陳替之由候、○上下略、三月二十三日附、堺守左近大夫宛、桂廣繁書狀、全文ハ本月二十三日ノ條ニ收ム、

〔佐竹文書〕　五乾

一家康清須令居陣條、卽出人數可押詰處、大河數ヶ所有之而多勢依難相越、舟を寄幷舟橋を懸申付而遲々候、明日廿七日秀吉越河清須近邊迄可押寄候、自然家康於執出者、遂一戰可討果事案内候事、○上下略、三月二十六日附、佐竹義重宛、秀吉書狀、全文ハ本月二十六日ノ條ニ收ム、

〔生駒家寶簡集〕　坤

去廿七日御狀、今日十九（廿カ）辰刻、尾州和田（樂カ）ニをいて令拜見候、抑家康種々雖相催、連々申談筋目依御相違（無カ）、敵至其谷雖相動候、無指儀由先以尤候、彌無御越度候樣御計策肝要候、隨而當表儀昨日越河（ヘ許リ）候處ニ、家康小牧山被居陣、其節爲先手森武岩（嶋カ）溪（内カ）山窪、稻葉伊豫、靑塚其外諸勢拾町拾五町ニ陣持せ申候、我等儀ハ樂田城著申候、大略今明內ニ可爲敗軍候哉、於相踏者、悉可討果事案

天正十二年三月二十八日

内候、爰許陣摸様此飛脚見及候間、不能巨細候、恐々謹言、

三月廿九日　秀吉（花押）

木曾殿（義昌）　参御報

二十七日　家康松平家忠ニ小牧ヘ陣替ヲ命ズ

二十八日　徳川軍小牧ニ陣替ス

家忠外山ノ番ニ入ル

〔家忠日記〕三　三月廿六日、癸卯、羽柴濃州へ差出候由候、

廿七日、甲辰、雨降、明日小牧へ陣替候へ之由申來候、小笠權兵尉、酒左家中出候て、我等當座あゝへ候、

廿八日、乙巳、小牧へ陣替候、羽柴小牧原へ押出候、

廿九日、丙午、信雄川内より小牧へ被移候、

四月一日、丁未、敵引まとしこて陣取候、

三日、己酉、外山へ番こうつり候、明手形原下、

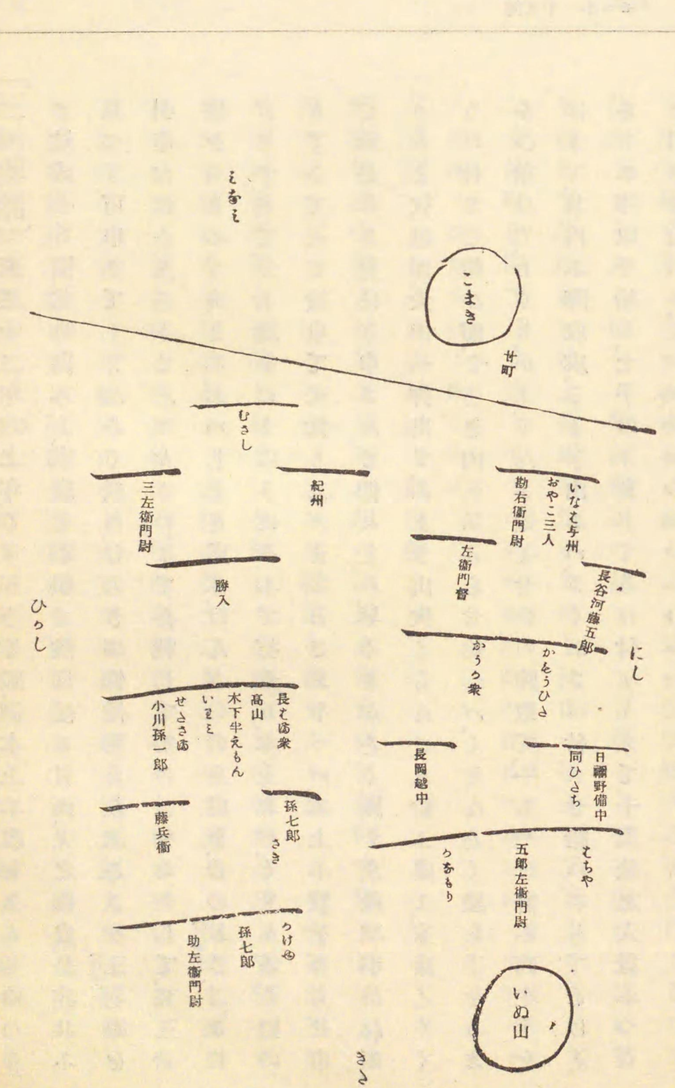
四日、庚戌、野田、西郷こゝのへり候、

五日、辛亥、又外山へ番こ越候、

〔當代記〕二　（三月）同廿八日、秀吉公小牧表江出張給、家康公對陣也、

秀吉陣之面柵ヲ付、被相備、其勢十万、家康信雄勢一万六七千可有之歟ノ由云々、

〔豊臣秀吉小牧役陣備書〕○伯爵前田利同氏所藏



秀吉ノ陣ニハ一丈土手　許ノ築クヲ康ノ小牧ノ陣ニモ柵ヲ構ヘズ

〔三河物語〕天正十二年甲申之年、くゑんなく殿、御本上（信雄）ゟ腹をきらせ給ハん と被成々々る間、其時御本上、家康を奉頼と被仰候ゟ付而、尤之儀成、是非共ゟ 見つぎ可申、さてくゑんなく殿ハ、むおき事仰候物ゟお、ゑなさゞ三七殿（信孝）を 引申たれな、ゑなさゝとゑばゞさゝけて合戦して、ゑなさをたやして、又三七 殿をぬまのうへをゟおわしまも處ゟ、げんざいの主成を、昔のおさゞ（小田忠政）ゟた ゞすゑて、三七殿をぬまのうへみゟて打奉り、本上おゞくゑんなく殿の もゑさてんと被申て、又世もゑばまるのとおやへゞ、本上ゟ腹をきらせ申 と承、是非ゟ見ぬぎ申さんと仰々をゞ、早くゑんなく殿十萬餘騎引ゐれ而、 うるま汰越而、犬山へ押出て、おまき山汰とらんと云給ふ處ゟ、家康とやく うけ付させ給ひ而、こまき山へなゞらせ給へゞ、くゑんなく殿を手をう云 ゐひ給ひて、おぐち、がくでんゟ云よせいの陣取て、一ぢやう計ゟ高土手を ほきて、其内ゟ陣取成、こまき山ゟわ、さくおさへ付させ給わをして、のけそ きをまてゐけ付〳〵云て、十萬餘之人數ゟつら

〔豊鑑〕二　袖露

秀吉犬山ヨリ樂田ニ移ル　三月二十一日大坂ヲ發スト　二十七日犬山城ニ入ル

秀吉兵を大勢具してゐせ下ゑ、犬山ゐ城ゟ至て、此城を得さらましのわ、輙く川を越て軍さてせん事ゟあさゐるゑし、偏に池田勝入心をもけましゝる 故ゟりとゐんし給へり、頓而樂田の城ようつゑ、楚をよゑ次第に先掛の勢 を出して、陣所定め給ふ、信雄、家康わおほきゐ山へ取上りて軍さても、互よ 二十餘町を隔て日汰送りゝる。（スルコトニカハル、本月十七日ノ條及ビ四月九日ノ條ニ收ム、上下略、信雄、家康、羽黒ニ森長可ヲ破ルコトト及ビ池田勝入、森長可等、三河ニ出デンコトヲ略ノ戰ノ九日ノ條ニ收ム、）

〔太閤記〕九　秀吉卿尾州表御出勢之事

羽柴筑前守秀吉尾州表出勢之起ゎ、津川玄蕃允、岡田長門守、淺井田宮丸、爲 秀吉誅せらをし事を不便ゟ思ひ、其鬱憤を散せんの故とのや、先勢濃州垂 井、赤坂、巢俣邊ゟ著陣しけをゐは、後陣わ未醍醐、山科、宇治、勢多邊ゟ充滿して、 大坂の御一左右を待居さゝり、前後其勢十二萬五千の著到とそ聞えし、秀吉 卿三月廿一日、大坂を打立給へゎ、先勢犬山の下大豆戸の渡を越犬山、五郎丸邊ゟ陣取し り、廿三日四日ゟわ、先勢犬山の下大豆戸の渡を越犬山、五郎丸邊ゟ陣取し ろ、逐日後陣之勢あまさ打ゐとひ、尺地も更ゟおゐりゝり、 かゝゐ處ゟ、秀吉卿も、廿七日午刻ゟ川を越給ふて、犬山之城ゟ入給ひしの、

天正十二年三月二十八日

小牧ニ對シテ向城ヲ構フ

信雄夜中ニ諸色ヲ小牧ニ入ル

秀吉敵ノ小牧ニ陣取ルヲ意

天正十二年三月二十八日

未之刻ホ、樂田、羽黒邊まて、諸大名衆計被召連打て出、對小牧山向城を多く
拵へ給ハんとの評定有、二重堀の要害一の先手あれハとて、日根野備中守(弘就)、
舍弟彌次右衛門尉(弘正)、子共五人、其勢二千餘騎入置る、岩崎山之城ホハ、稻葉伊
豫守(一鉄)、子息右京亮(貞通)彦六(典通)、同名右近(方通)、掃部(重通)右衛門、其勢四千餘、小松寺山の城ホハ、丹
羽五郎左衛門尉長秀(丞)、其勢八千、青塚の城ホハ、森武藏守、其勢二千餘、內窪山
之城ホハ、蜂屋出羽守(頼隆)、金森五郎八(長近)、其勢三千、其外里より里、嶺より峰筏はゝ
きホ陣取けゐハ、夜ホ入て篝火夥しき事云ゑもなし、

〔小牧陣所之者之咄傳之覺〕

○尾張小牧陣所之者之咄傳之覺

□□拾八年以前申之三月廿七日、申之刻、兼而□□□□□□□□□□
物見より清須へ注進御座候ハ、明廿八日吉日ニ而、日之出ニハ小牧山へ
御出陣可有と御評諚候而、卽今夜犬山迄御出馬之由申來候付、清須(本書ハ信雄ガ清洲ニ在城セル如ク記セリ、)ニ而ハ被爲驚、其旨趣家康公ハ被仰遣候、從清須ハ、無
油斷小牧へ人數を被遣、夜中ニ諸色を被遣、矢倉を揚、北表ニ據簇を立御
陣取、從三刕ハ、家康公不移時日小牧ハ御見次ニ御出馬被成候、
一大閤ハ、廿八日未明ニ犬山を御立、外坪原迄日之出ニ御出馬、小牧山之御

秀吉岩崎ノ南ニ土居ヲ築ク

家康モ亦小牧ニ土居ヲ築ク

陣取之躰、案之外ニ思召、其儘御馬を被立、岩崎村、小松寺村、久保一色村、羽
黒村、外坪村、小口村近鄕ニ御陣を被爲取、本陣ハ樂田村之內首塚と申所
之由、
一翌四月二日、大閤方より三百騎ニ而、小牧山北表より責寄申候、家康公ハ
山より御上覽有而、御人數山之南東より、姥ハ懷と申窪をへ御くり出し、
伏勢ニ被成、殘候御人數敵面ニ御向を、うゑハ懷より御人數御出し、敵を
中ニ御取籠、不殘御討取被成候、
一同四日之晚、大閤方より、岩崎より南五六町ほと隔、東西へ高サ壹丈ゑう
りよ土手を御築候、是ハ家康公より夜討之用心ニ、西之畔(巾)沼際より、東へ
爲築候由、于今土居之形地、岩崎山之南西茶屋前と申所ニ在之候、
一翌五日之晚、家康公より、山之北際ゟ東、丑寅むきよ、高壹丈計ニ田中村未
申、元之八幡塚迄土居を被爲築、同六日ニ、兩方之築地之間ニ而、〻まやう
軍在之、双方ニ手負死人ハ無之、鑓ニ而責合候而相引ニ仕由、(下略、長久手ノ戰ノコトニカヽル、四月九日ノ條ニ收ム、)

〔小牧御陳長湫御合戰記〕

一秀吉卿ハ、三月十九日、攝州表御出馬可有處ニ、

天正十二年三月二十八日

秀吉根來一揆ノコトニ依リ出陣ヲ延期ストノ說

二十七日犬山ニ入ルル

秀吉方諸軍ノ配備

二十一日出陣ストノ說

廣瀨景房三科形幸

前日十八日ニ、紀州根來ノ一揆二萬餘(ニ脫カ)テ、中村式部(一氏)在城岸和田ヲ踏越、堺表迄働申ニ付、樣子御覽可被成トテ、廿一日迄、御發馬延申候、

一紀州一揆、其以後出不申ニ付、同廿一日ニ、秀吉卿大坂表御進發候、大坂御留主ニハ、蜂須賀彥右衞門(正勝)御置、十二萬五千ニテ御出張也、

一三月廿七日午ノ刻ニ、秀吉卿大豆戸川ヲ御越有テ、犬山ノ城江御入、同日八ツ時ニ諸大將計被召連、大物見ニ御出候テ、取手ノ地御見立被成、堀二重柵振リタル取手ヲ被仰付、日根野備中守、同織部、其勢二千、岩崎山ノ城ニハ稻葉父子四千、小松寺ニハ丹羽五郎左衞門尉長秀(重)八千、靑塚ニハ森武藏守三千、內窪山ニハ蜂屋出羽守賴隆、金森五郎八三千、犬山ニハ秀吉卿御本陣、都合十五萬八千、

一小牧山ニテ、家康公ハ上方勢ヲ御遠見被成候テ、井伊兵部少輔直政與力甲州浪人廣瀨美濃(景房)、三科肥前(彩幸)兩人ヲ召、上方ノ大軍ヲ見候得トノ御意也、兩人參、如何ニモ小勢ニテ御座候ト申上ル、家康公、何トテ左樣ニ申ヲト(ウカ)御尋也、三科、廣瀨申上ルハ、只今秀吉卿軍勢ニ、合戰之道爲知者無之候、百萬ニテモ氣遣無之候、惣テ軍ハ勢ノ不依多少ニ候、越後上杉謙信卿八千

家康淸洲ヨリ小牧ニ移ル

秀吉ノ本陣ハ岩崎山ノ高ミ土手ノ內側ニ二重堀ヲ造ル

淺野長吉

ニテ、甲州二萬三萬、小田原ノ五萬六萬ト節々合戰有之候得共、少モ勝劣無之候ト申上ル、酒井忠次被申候者、長篠ニテ勝賴卿ノ一萬五千成シカ、今ノ上方勢ヨリ少見カサミ候ト申上ル、其以後日々夜々二重堀ノ邊迄、家康公ノ兵十騎廿騎ニテ相働、分取高名仕候、秀吉卿勢從柵外江出事不罷成候ニ付、廣瀨、三科儀社我等如申タルニテ無(ハアルカ)之候、〇(下略、岩崎表合戰四月九日ノ條ニ收ム、小牧戰話、小牧御陣聞書殆ド同ジ、)

〔尾州表一戰記〕

一淸須より三日四日と覺申候、其より小牧山へ御陳なされて御座候、惣人數ハ山之下より悉陣之かこめ候、がくでん口へ之道筋二重堀兩方へそりそん罷出候、小牧山と上方之陳取之間原より御座候、犬閣樣より犬山之城池田勝入かせきを以とる、うら川(ま脫カ)被爲越、犬山、おぐち、がくでん、御取續、岩崎山へ御人數御押せ、小牧と御相陳より御座候、大閣樣御本陣ハ岩崎山之をかより御座候、

一二重堀村より羽黑の方へ、上方より土手をうせ、土手のうちより二重堀まて取つゝけ、如何よも人數厚陳取より御座候、

淺野長政(長吉)初名ハ彌兵衞、

〔寬永諸家系圖傳〕

天正十二年三月二十八日

二十　淺野長政(長吉)初名ハ彌兵衞、天正十二年、秀吉尾州進發の

天正十二年三月二十八日

時、軍中の諸事を司どらる、〇上下略、寛政重修諸家譜、淺野長政譜殆ド同ジ、

〔淺野考譜〕一 一同年(天正十二年)、織田信雄と秀吉再ひ及合戦、此時自信雄方、東照宮之奉御(脱カ)加勢、不被捨信長以來之筋目、速ゟ御出馬ありて、尾州表におゐて、秀吉の先陣と御迫合之處、秀吉勝利あり、東照宮も、信雄と小牧山ゟ被御陣居候處、秀吉猶亦人數を差向、附城を構ふ、其一ゟ長吉攻籠守らしむ、

〔寛永諸家系圖傳〕四十七 金森長近 五郎八、 同(天正)十二年、秀吉、織田信雄と尾州ゟて對陣の時、長近内窪山の取出ゟあり、〇上下略、寛政重修諸家譜、金森長近譜殆ド同ジ、

〔細川家記〕七 忠興一 一天正十二年甲申春、織田信雄、秀吉公と矛楯、信雄か家康公を賴まゝ、御同心ゟて、三月十四日、一ニ三日、ニ十清須ゟ御著陣也、信雄悦て、與ゟ小牧山ゟ打出らる、秀吉も、十二萬五千餘の兵を卒し(筆下同ジ)、三月廿一日、一ニ三日、ニ十大坂を發し、行列御先九段也、堀左衞門督(秀政)と忠興君四陣ニ而、大垣口ゟ御押被成候、

一書、二月十三日、近日秀吉尾州發向ニ付而、所々守衞手遣等手配の内ニ、江州瀨田ゟ長岡越中守忠興と有、同出陳已前列を定るの内ゟ、五陳の右堀秀政、左細川忠興と有、又一書ニハ、備を七段ニ分、忠興君と秀政

金森長近内窪山ニ陣ス

長岡忠興

忠興等秀次ヲ援ケテンコトシテ三月十六日松島ヨリ樂田ニ向フトノ說

向城ノ營作

ゟ三番の内ゟ在、又三河後風土記之内ニハ、信雄方の大將松嶋の城を守るを、上方の諸將大勢ニ而、三月十五日ゟ稠敷攻ともよく防て不陷、其頃家康公の御人數樂田表ニ出張有之ニより、三好秀次多兵を卒し、彼地ゟ馳向挑戰利ならも及難儀由、松嶋ゟ訴々る故、秀次を救の爲、細川忠興、蒲生氏郷(秀秀)、其外諸大名引分ヶ、同十六日、松嶋を打立、樂田表に向と云々、考ニいふ如し、

三月廿七日、一ニ五日、ニ十秀吉公犬山城ゟ入、樂田、羽黒邊まて、諸大將衆とかり被召連、仕寄の下知等被仰付候、先ッ小牧山ニ對し、向城を高く搆へ、堀を二重ゟ深くほり、柵を稠く結ひ、井樓を上させらる、是を二重堀の要害と云、此外岩崎山、小松寺山、青塚、内窪山等の付城勢を分チ守らせらる、然ともこゝかしこ矢軍のまゝて、そう〳〵しき戰も無之候、〇下略、落穗集ニ據リテ、秀吉忠興ヲシテ、書ヲ家康ノ陣ニ遣ラシメ、戰ヲ挑ムコトヲ揭グ、下ニ揭グル武邊咄聞書ニ殆ド同ジ、

〔松井家譜〕一 春光君御譜一 一天正十二年春、織田信雄公、秀吉公ゟ被及矛楯、信雄公と東照宮ゟ御助勢を被奉願候處、則一萬八千餘之御人數ニ而、三月十三日、一ニ四日、ニ十尾州清須信雄公之居城へ御著陣、信雄公御一同ニ小牧山へ

天正十二年三月二十八日

天正十二年三月二十八日

御出張被成、秀吉公之御人數七十二萬五千餘之由、同月廿一日、大坂御出馬、尾州表ゟ御發向ニ付、御先備九段之内三齋（細川忠興）樣、堀左衞門督殿（秀政、与四

松井康之

陣ニ而、大垣口ゟ御押、松井康之御供仕候、同廿七日、秀吉公犬山之城ゟ御入、樂田、羽黑邊迄諸將を被召連、仕寄之御下知被成、先小牧山ニ對し向城

丹羽長重小松寺山ニ陣ス

を搆へ、堀を御掘を柵を附、（井）柵樓を被上、其外所々附城被仰付、被成御對陣

加藤光泰犬山ニ在番ス

候、〇下略

〔丹羽系譜并年譜〕長秀君年譜 天正十二年 三月、織田信雄卿將有事於尾州、秀吉公帥師屯樂田、羽黑、犬山、而請援於長秀、長秀（甚）以兵八千、備于尾州小松寺山城、麾下之諸城主相屬焉、

〔加藤光泰同貞泰軍功記〕天正十二年甲申、秀吉公尾張内大臣織田信雄公と中惡くなり給ひ、秀吉公尾張を責て、犬山の城を落し給ふ、此時信雄公ゟ小牧山ゟ在陳なり、秀吉公犬山御進發ゟより（ル）コトニ牧ム、て、犬山の城在番を光泰仰付られ、此時軍功有（ル）、〇中略、光泰、伊勢ニ入ルカ、本月十五日ノ條ニ牧ム、又長久手合戰の時、二重堀ゟ砦を搆へ、人數を差置（後細川と改む）、其人々ゟ、長岡越中守忠興、并日根野兄弟、木村常陸介、長谷川藤五郎と光泰、其外ゟ略も、右の輩在陳も、〇下略、秀吉、美濃ニ、退クコトニカ、ル、

五月一日ノ條ニ牧ム、

郡宗保

岸和田ニ使ス

明石左近

酒井忠次

〔郡主馬宗保傳記〕天正十二年ノ春、秀吉公尾州小牧山ニ出張ノ時、三月廿七日、同國宇留馬（川）ニ秀吉公御馬ヲ寄セラル、敵山中ニ籠ルト聞エシカハ、宗保物見ノ爲メ、夜半ヨリ打立、木曾川ヲ未明ニ渡シ、向カヒ地ニカヽリ行キシニ、敵二人左右ヨリ來リシニ、馳セ向ヒテ一人ヲ打取シカハ、一人ハ逃去リヌ、ソレヨリ引返シテ、道ニテ秀吉公ニ行合ヒ、敵陣ノヤウヲ委ク申上ル、夜中ニ一騎川ヲ乘渡シ、早ク敵陣ヲ見テ歸リ、其上敵ヲ打取リシ事、秀吉御直ニ甚御感アリ、其後泉州岸ノ和田ニ有シ身方中村孫平次ニ、御使トシテ遣ハサレシ故、長久手合戰ニハアラズ、（重保傳書云、岸ノ和田城主中村孫平次、後式部、）

〔土佐諸家系圖〕六〇土佐 明石左近太夫 天正十二年三月十三日、大閤ニ屬シ、小牧合戰ニ出ル、

〔寛永諸家系圖傳〕九 酒井忠次小衞門尉、左衞門督、 秀吉十萬の兵を引ゐて、小口、樂田、二重堀ゟ出張し、青塚ゟ陣を、其有さは小牧山をせめんとするいきやひなり、味方こゝを見て、軍をいざして戰いんとも、忠次あふひて日を見て、我士卒ゟにげていそく、清洲ゟゆきて、兵粮ぬうゐらを運送をべし、又大權現ゟ申々るゝハ、今日御合戰ある處のらす、左ハらく人馬をやをめん、

天正十二年三月二十八日

秀吉ノ野外ニ陣ヲ張ルハ塞ヲ構ヘンガ爲メナリ

其故いかんとなれば、日もすでに未の刻をもく、大軍を引ゐて敵國へいり、暮までおよびてたゝかふ事ハ、明將のせさるところなり、其上秀吉武勇を長せり、あに去らすして是をおそべけんや、いま陣を野外にもる事ハ、取出をかまへ堀をほらんがためなり、忠次の申むまにまかすべからずとて感じたまふ、（上下略、寛政重修諸家譜酒井忠次譜殆ド同ジ、）

高木清秀内藤正成ト共ニ目付トナル

〔寛政重修諸家譜〕（三百十六）高木清秀（善次郎、主水助、）（天正）十二年尾張國小牧御陣のとき、内藤四郎左衛門正成と共に御目付をかり、諸卒を下知し、日々に敵地の形勢を窺ふに、ねる日清秀斥候をむつかはされしに、乃ち敵乃矢にあたりて足をいこかふ、東照宮御覽ありて、御料れ黒鹿毛乃馬を鞍をきてまふ、清秀すかもちひの御馬をうちけり、所々の軍監をせむ、（上下略、寛政重修諸家系圖傳異事ナシ、）

渥美友重かまり

〔寛政重修諸家譜〕（九百十一）（六）渥見友重（又次郎、又久兵衛、）（天正）十二年、織田信雄を助させまひて、尾張國を御發向あり、このとき服部半三正成を副て、かまりをへきところ按見て來れむね仰をかうぶり、ひきりの戰場をおもむく、敵より輕卒を出し、おれを追といへども、ねへてたゝかひを挑ますして、事

菅沼定政

敵ノ使者ヲ生捕ル

ゆへ那く人數をなく、正成かへりて、友重若年なるら、其ぬるまひよ祝しかりしよし按言上す、（上略）

〔寛永諸家系圖傳〕（二十三）土岐定政（童名ハ愛菊、菅沼藤藏、山城守、後鈞命ありより、土岐と稱ま、）（天正）同十二年、秀吉、織田信雄をうさんがため、尾州へ發向も、信雄もくひを大權現よおふよより、三月、大權現尾州より御出馬ありて、小牧山よ陣をもたまふ、秀吉ハ樂田、小口よねむろして對陣あり、定政敵れありをはをうゝもんねめ、郎從井上九左衛門（寛政重修諸家譜ニハ、正祇ト、アリ、）をつかはされしものもせ來る、むしもを出て、鎧れ草（葦）て是をうゝへい、葦毛の馬よれりさるものもせ來る、むしもを出て、鎧れ草摺をはゞんて引おとさんと去々れい、馬をとろきて、乘者たちまちよおりて、井上すかもちををはれて、是を大權現へ獻しけをい、大よ御感あり、井上又敵一人を生捕て來る、定政これをそれを、頸よ廻文をあけさもて、定政その廻文を大權現へ獻も、いよ〳〵御感ありて、すかいお其因をころし、廻文をやりて敵のもゝりをおこ〳〵をあらもる、定政ゝ功をして、敵れ躰をうゝへいしむ、二人れもの敵陳を見さめて歸る時、又敵一大なるもと毒、其後又井上と小笠原内藏助といふものを、秀吉の陣よつうと

天正十二年三月二十八日

天正十二年三月二十八日

人を生捕、もへていけどる三ケ度あり、〇下略上

〔寛永諸家系圖傳〕一八十 内藤信成三左衛門尉、後豐前守と號す、同(天正)十二年、長久手合戰

内藤信成清洲城本丸ヲ守ル

けるとき、大權現、織田信雄をすくひさはむんさめ御出陣あり、このとき信成をして、清須の城本丸をまもらしめ、三宅惣右衛門尉(康貞)、中安彦次郎、大澤兵部(基宿)大輔等をして、二の曲輪をはをらしむ、おゝをひて大權現、信成をひろさはむく、今度豐臣秀吉十二三萬(數)兵を卒してきさるとなり、もし我軍やぶるゝもへし、かるゆへに汝をこれ城をきるまふ、もしば、この城を入て合戰もへし、かるゆへに汝をこれ城をきるまふ、もし敵兵を追て瀨田ふいさらは、敵又還て此城を圍へし、かならに城をいてゝ相さゝふ事なられ、此ゆへふ信成ゝせゝまりて清須の城をまもる、〇上下略

三宅康貞惣右衛門尉ヲ守ルトナス、

〔寛永諸家系圖傳〕十一 三宅康貞惣右衛門尉、同(天正)十二年、尾州長久手合戰のとき、内藤三左衛門尉、大澤左衛門佐、中安兵部少輔あらひよ康貞、大權現の尊命をうけさはゝり、尾州清須乃城番をはとむ、〇上下略、寛政重修諸家譜ニハ、信成ハ本丸ヲ、康貞、基宿等ハ二曲輪ヲ守ルトナホ譜牒餘錄三宅土佐守書上異事ナシ、

〔寛政重修諸家譜〕七百三十二 大澤基宿民部、(天正)十二年三月、織田信雄を援ゝ

三遠甲ノ兵一人ハ上方勢ノ

神尾元次

たゝむもをめ、尾張國よ御發向乃とき、從ひたてまつる、二十八日、小牧山に御陣を移したまふ、おれとき内藤三左衛門信成をして、清洲乃城にとゝめて、本丸を守らしめられ、基宿及ひ三宅惣右衛門康貞、中安兵衛(部カ)少輔某等、鉤命をうけたまもりて二丸を守る、〇上略

〔寛永諸家系圖傳〕百二十五 神尾元次岡田竹右衛門尉、後大和守と號す、同(天正)十二年、大權現と豐臣秀吉、尾州長久手よをひて對陣れとき、元次駿州沼津の城よゐり、もおのれ從ひたてまつりらむため、首途し、〇譜牒餘錄松平周防守康重書上ニハ、三枚橋周防守康重爲使者、岡田竹右衛門を差上候トアリ、小牧山れ陣ふいさゐ、大權現のさはもく、汝をめもをきとれほしさるゝよれぼ、敵陣の人數をよひ我軍兵の多少を見はゐらふべしとなり、元次則阿部善右衛門、西尾藤兵衛とにおじく矢倉ふのぼり、敵陣をうかゞひ見るゝ、うれ兵十万とおもへり、云かれとも御前りいさり、敵兵五万七八千とけげさてまつれ、大權現、我兵ゐ如何とのさまふ、五万ばゐしと元次こさへたてまつり、今度の合戰かならす敵敗をへしと言上も、大權現其ゆへををひたまふ、元次うゐさまいりて、參州、遠州、甲州の兵をはよし、一人をもり

天正十二年三月二十八日

三人ニ當ル

て上方の三人よあつ𠮟し、か㆑ある諸國の假武者なり、御方ゟ譜代忠功の勇士なり、それ勝こと𠮟うゟかひなしとこゝへたてまつる處ゟ、大權現こ㆑をを稱美したまふ、ゑゝしてゐれこと𠮟れとし、御歸陣けゝき、元次ゑちのほとりまて拜謁を、大權現馬上よれいしはして、なんぢらいふ所相違せをゐれうへ先年大堰川の事をたばしめしあいせらるゝとて、こ㆑を感したまふ、

秀吉伊勢ニ入リ諸城ヲ占領ス

長島城ノミ殘ル

〇上下略、岡田竹右衞門叡書異事ナシ、

〔日本耶蘇會年報〕（歐文材料第四號譯文）

耶蘇會のバードレ及びイルマンの日本通信　第二編

我がバードレ等一五八四年の通信に係る、都方面の戰爭中に起りたる事に就きて、

羽柴は三人の領主（津川立藥、岡田重孝、淺井田宮丸）斬殺の報に接し、陰謀の經過は知らざるも、容易にその樣子を想像し、急遽都に向ひて出發し、進んで彼を擊たんと決したり、軍兵は各所より來集し、信長の子の主要なる領國（領地）伊勢に著きたる時、彼に隨ふ者七萬に達したり、而してその國に入りて、敵の城を圍み、武力に依りて之を占領し、遂に國内を服從せしめ、敵の手に殘るは、長島と稱する城のみとなりたり、第二の國伊賀に於いては、何等の困難なく、直に引渡を受け、同所より急ぎて尾張の國に入り、犬山の城を襲ひたり、此城を得ざれば、前進することを能はざりしが、之を占領して、軍隊は流急にして、美濃尾張の國を區劃せる大河を渡りたり、三河（家康）の王は、三レグワを隔てたる小牧と稱する地に一城を築き、二萬を超ゆる兵を屯營し、信長の子はその兵を率ゐて、同じく尾張の國の一端に在りし他の城に入りたり、羽柴はその軍隊を率ゐて進行し、城及び村數ケ所を征服し、三河の王の營所より半レグワを隔てたる地に到りたり、

伊賀ヲ收ム

犬山城ヲ占領ス

家康小牧ニ陣ス

〇上下略、信雄、其老臣津川義冬等ヲ斬リテ、秀吉ト絶ツコト及ビ長久手ノ戰ノコトニカヽル、本月六日及ビ四月九日ノ條ニ收ム、

〇森長可、家康ノ先鋒酒井忠次、奥平信昌等ト羽黑ニ戰ヒテ敗ルヽコト、三月十七日ノ條ニ、羽柴長秀、筒井順慶等、松嶋ヲ陷ルヽコト、四月七日ノ條ニ、池田勝入、長可等、長久手ニ戰死スルコト、同月九日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔新撰豐臣實錄〕十一　秀吉發向尾州（附）森長一（可下同ジ）、池田勝入父子殞命部

日根野弘就
稲葉一鐵
丹羽長重
森長可
蜂屋頼隆
秀吉十九日大坂出馬ノ豫定ヲ延引スルトノ説

（天正十二年）同年三月二十一日、秀吉出二大坂一發二兵於尾州一、其本蓋起二于信雄今般欺二誅其臣津川玄蕃等一、近來秀吉之於二信雄一、迭爲二眶贅之思一、至若兼聞信雄隱謀之企一之次、依二今般之非常一、秀吉不レ得レ已、欲レ往二匡其過一、令二諸侯一發二大軍一、其兵凡十二萬五千餘、先陣已著二濃州巢俣邊一、則後陣尚充二宇治勢田濱一、三月二十七日、午時秀吉到二犬山一、倡二諸將一出二張于樂田、羽黒邊一、對二小牧多營子城一、而不日遂二其功一、（今按下所謂二重堀等也、乃俾日根野備中守弘就、舍弟彌次右衞門及其子五人兵二千、守二彼二重堀砦一、稲葉伊豫守、其子右京亮貞通、同彦六、一族右近、勘右衞門等其兵四千、移二岩崎山疊一、丹羽五郎左衞門長秀（重）其兵八千、入二小松寺山疊一、森武藏守長一其兵三千、陣二青塚疊一、蜂屋出羽守頼隆、金森五郎八其兵三千、護二内窪山疊一、其外村里嶺谷、悉列陣不餘尺地、所々夜々篝（篶）火、恰似レ聚二數點之星螢一、（上下略、池田氏家譜集成所收池水記殆ド同ジ、）

〔池田氏家譜集成〕二十一　池田記六　小牧長久手陣始終　附勝入元助討死之事

さる程に、秀吉卿尾州表出張に付、先手のそや濃州垂井、赤坂ゑ著、後陣の宇治、勢田、醍醐、山科邊に充滿して、大坂御出馬れ一左右次待居さり、秀吉卿三月十九日、攝州大坂御出馬可有之所、前の日十八日、紀家（カ）根來れ一揆二萬餘まて、中村式部の居城岸和田を踏越、堺まて働ある故樣子聞届給ハんとて

蜂須賀正勝ヲシテ大坂ニ留守セシム
二重堀
岩崎山
小松寺
青塚
内窪山
信雄ノ麾下
蒲生賦秀
柵ノ内ニ堀ヲ掘ル

御延引あり、紀州一揆其後出さるに依て、大坂留守ゑゐ、蜂須賀彦右橋門を殘し置れ、同廿一日、大坂御出馬なさ、先手の次第に押て、廿三日四日ゑゐ、犬山、五郎丸邊に陣を取さり、廿七日午刻、秀吉卿犬山へ御著陣、同日未刻諸將計召連られ、犬物見ゑ出給ひ、取出〳〵れ作形を見立らる、二重堀取出日根野備中守弘就、同織部、厥勢二千、岩崎山ゑ稲葉父子、其勢四千、小松寺ゑ丹羽五郎左衞門八千、青塚ゑ森武藏守三千、内窪山ゑ蜂屋出羽守頼隆、金森五郎八、田（恐脱カ）表ゑ土手次つき城を構、所々ゑ柵を附て備給ふ、織田信雄卿ゑゐ千草三郎左衞門、濱田與右衞門、小泉甚六、楠十郎、林與五郎、同十藏、同新右衞門、小板（坂）孫九郎、加賀江（井）彌八郎等、都合二萬五千を率して小牧御在陣あり、家康卿御分國堺目北條押ゑ人數を殘し置、三萬五千次率して同御在陣あり、（下略、家康、廣瀬景房等ヲシテ、敵狀ヲ偵察セシムルコト、前掲小牧御陣長次御合戰記ニ殆ド同ジ、）

〔蒲生記〕二　然る處ろ、こはきの事大事ゐれと、松賀嶋をゐ打もて、氏郷（蒲生）も尾劣へ發加々り、去程ろ、秀吉公こはき乃城より廿町を隔て柵を布り、柵の内ろ堀をほり、堤をつゝ、堤の内ろ取出乃城を五ケ所拵、稲葉與州、長藤（マヽ）五左衞門、（生駒カ）長岡越中守、蒲氏郷、丹羽左

天正十二年三月二十八日

天正十二年三月二十八日

兵衛承て、人々勢を出し、取出の城を守らせ々る、蒲生請取る取出城の大將
ゐや田丸中務（直息）、三瀬左京、町野左近助也、其より一里隔青塚ゐ、右五人ハ本陣
を取て備へ々る、

田丸直息
秀吉ノ陣備
筒井定次
伊藤掃部

一番	長勝	二番	丹羽	三番	

天正十二年三月二十八日

田へ著陣しぬ、七十六隊より備へより、大神君も清洲を御立よりて、小牧の御陣へのぼらせ給ひ、德河、北畠兩家の軍勢合て一萬八千餘（一說より一萬五千、又二萬とも）り、よて備へより、敵と味方の先手の間僅七八丁ほど隔りぬ、北畠の手より早鐵炮を打懸て戰ひを始めしかば、（大神脫カ）君村越茂助吉直を御使よりて、筑前守の旗本を見合せて、戰ひをも始むべき樣に、とやまりて鐵炮あまた打せらるゝまゝと制し給ふ、さて其後は敵も懸らで對陳とこそ成りさりなれ、

〔家忠日記增補〕九　三月廿八日、大神君御陣ヲ小牧山ニ移シ給フ、榊原小平太康政（後式部太輔ト號ス、）兼テ小牧山ヲ以テ、御本陣タラン事ヲ請フ、大神君是ヲ許シ給ヒテ、酒井忠次ニ命ノ、其陣ノ地利ヲ巡視ナサシメ、御陣ヲ小牧山ニ移シ給フ、內藤三左衞門尉信成ヲ清洲ノ城ニ留テ、本丸ヲ守ラシメ給フ、三宅惣右衞門尉康貞及ビ大澤兵部太輔基宿、中安彥四郎二ノ丸ヲ守ル、星崎ノ城ハ本多作左衞門尉重次是ヲ警衞ス、是日、秀吉小牧原ニ陣ヲ張ル、御味方ノ兵、夜ニ入敵ノ柵ヲ破リ、火炮ヲ發ノ是ヲ劫ス、

廿九日、信雄兵ヲ川內ヨリ發ノ小牧山ニ陣ス、

〔武德編年集成〕二十　三月廿六日、秀吉美濃路ニ入ノ告有、

兩陣ノ間僅ニ七八丁

內藤信成等ヲシテ清洲ヲ守ラシムル

本多重次ヲ星崎ヲ守ル

廿七日、秀吉鵜沼川ノ船橋、大豆戶ノ渡ヲ越テ、午ノ刻犬山城ニ至リ、池田ニ對顏シ、汝早ク當城ヲ得ルヲ以テ、其功速ニ成ル由大ニ稱美シ、卽犬山ヨリ軍ヲ小牧山ニ發ス、未ノ刻秀吉諸大將ヲ携ヘ、地ノ利ヲ監臨シ、小牧山ヲ取敷ントス、小牧欲スト雖、車ノ旌旗彼山ニ翩翻タルヲ見テ、大ニ悔怒リ、小牧山ニ向數箇所ニ砦ヲ築カシメントス、先兩陣ノ間ニ二重ニ隍ヲ設、土居ヲ築キ柵ヲ振テ、其砦ハ日根野一族五人二千餘兵、岩崎山ノ向城ニハ稻葉一鐵父子、小松寺山ニハ丹羽五郎左衞門長秀（重）八千餘兵、青塚ニ森武藏守長可、內窪山ニ蜂屋出羽守、金森五郎八長近、三千餘兵ヲ以テ籠置ヘキ旨敎令ヲ下シ、犬山ニ歸テ宿陣有、

廿八日、神君清洲ノ本城ニ內藤三左衞門信成、二丸ニ三宅惣右衞門康貞、大澤兵部大輔基宿、中安彥四郎定安ヲノ〳〵守ラセラレ、神君御本陣ヲ小牧山ニ移サル、時ニ秀吉海東郡小口、樂田ニ出張、諸軍ハ小牧山原ニ押出シ、春日井郡二重堀ヲ後ニ當テ、備間遠ニ見ヘケル、然ルニ進テ戰フヘシトモ、又陣取ヘシトモ見サリケレハ、味方ハ小牧山ノ麓ニ下リ、槍ヲ揮テ其蒐ルヲ待居タリ、神君、酒井左衞門尉ヲ召テ、敵鬪ヲ持ケルヤト問玉フ、忠次曰、既未ノ刻ニ及

秀吉犬山ニ入ル

小牧山ヲ先取セントシテ能ハズ

秀吉犬山ニ歸リテ宿陣ス

家康本陣ヲ小牧ニ移ス

酒井忠次ノ明察

天正十二年三月二十八日

天正十二年三月二十八日

テ敵深々ト進メリ、是陣所ヲ設ルト見タリ、且秀吉弓矢功者ナレハ、卒爾ニ軍ヲ成ヘカラストテ、陳夫等ヲ清洲ニ遣ハシ、雑具ヲ運シメントス、果メ秀吉ノ十二萬、陣所ヲ設ケ、夜ニ入テ、其篝火ヲヒタヽシキ事晴夜ノ星ニ似タリ、神君甲陽馬場美濃氏勝カ舊臣、當時井伊兵部少輔ニ附屬セラレシ廣瀬美濃景房、三科肥前形幸兩人ヲ召テ、上方ノ大軍ヲ見ヨト命有シニ、兩人是ハ小勢也ト述ル故、其實ヲ尋玉ヘハ、當時秀吉方ニ軍旅ニ精キ者ナケレハ、百萬ト云ヒ恐ルヘカラス、上杉謙信ハ八千ヲ以テ武田ノ二三萬、北條ノ四五萬ニ對シ遂敗ラレス、實ニ軍ハ勢ノ多少ニ因ラスト言上ス、時ニ酒井忠次曰、長篠ニテ勝頼カ一萬五千ハ、結句秀吉ノ此大軍ヨリモ勢ニカサ有テ見ヘシト云ヘリ、神君、本多重次ヲメ水野忠重ニ代リ、星崎ノ城ヲ守シメラル、今夜小牧山ヨリ、二重堀ヘ夜蒐ノ聊火砲ヲ發セシニ、秀吉ノ猛卒大ニ騒動ス、時ニ秀吉稻葉一鐵ヲメ何ノ周章スルヤト大音ニ詈リケレハ、諸陣漸ク靜マリヌ、誠ニ廣瀬、三科カ述ル所ノ如シト、味方大ニ競フト云、

廣瀬景房
三科形幸

本多重次ヲシテ水野忠重ニ代リテ星崎ヲ守ラシム

廿九日、信雄勢州大河内（ヲカ）ノ城ヨリ、小牧山ニウツリ陣ス、

家康ノ兵二重堀ヲ夜襲ス

小牧ハ信長ノ舊城

羽柴長秀等松島ヲ攻ム

秀吉青塚ニ出ヅ

〔武家事紀〕十集譜傳五　秀信

家康公帥師、次于小牧山、

酒井左衞門尉忠次巡見ノ、小牧山ノ要害ヲ見立、コノ地ヘ兵ヲウツサレテ、國中ヲミヲロシ玉ハヽ、戰ノ配流（マヽ）ニタヨリアルヘキ由ヲ申アク故、十七日、家康公乃信雄ヲスヽメテ、小牧山ニウツリ、陣城ヲカマヘ、屏ヲカケ堀ヲサラユ（ラカ）、小牧山ハ古ヘ信長トリ立テ居城トシ玉フ、後ニ小牧山ヨリ清洲ヘウツリ玉フ古城也、

羽柴秀吉至于犬山、

秀吉ノ先勢既ニ美濃尾張ニツク、秀吉初メ尾藤甚左（右）衞門ヲツカハシヲイテ、池田父子、森、稻葉等ニ軍事ヲ談セシム、而メ勢州松島ニハ美濃守秀（脱カ）長、次丸秀勝、筒井順慶等ヲ堅ク云付、廿一日ニ大坂ヲ立テ、大垣ニ著テ、乃鵜沼ニ船橋ヲカケサセ、廿七日ニ犬山城ニ入リ、廿八日ニ青塚ヘ出ツ、先手ノ大軍ハ、小牧山ノ東二重堀ノ前ヘ人數ヲ出シ、間遠ニミヘケレハ、家康公、本多忠勝ニ命シテ、コレヲ可討コトヲ仰ス、酒井左衞門尉忠次コレヲ留メ、清洲ヘ申ツカハシ、宿陣ノ用意セシム、ソノコトク秀吉ノ先勢皆

天正十二年三月二十八日

陣取ヲカタメテ、小牧山ヲ不攻也、

伊勢ヨリ美濃ヲ經テ犬山ニ入ル

〔長久手戰話〕

乾　廿一日（三月）、秀吉大坂出勢、伊勢路、美濃路ヲ經ル、秀吉智早ク大將なゝは、早速出勢（速カ下消ジ）被心懸候へとも、此時迄と自分人數ハ少し、皆信長舊臣を數、人數被集故、人數ハ不殘見合被申處、武藏守羽黑まけ軍を聞、いつ成事ゟ仕出さんと思ひ、人數ハ揃ヲされとも、追々跡ゟ可參と云渡し、廿一日ゟ大坂出勢有之、伊勢路へ趣き（急）、城之仕置申付ら廿、美濃を經テ犬山へ被來也、

勝入大草山ニ砦ヲ構フ

近江三法師領三十萬石外、美濃國士領外、伊勢五郡、大和筒井領外、河内ゟ若江衆、其外攝津、和泉、秀吉此時分播磨、丹波所々押領ス、因幡、伯耆、淡路、備中手ゟ入、旗下、但馬ハ秀吉領、二（脫アルカ）〇中略、二十二日、蟹清水、外山、宇多津砦造營、十四日ノ條ニ牧ム、二十四日、比良村、小幡村兩砦造營等ノコト

廿七日、秀吉犬山入城、郎日近鄉巡見、小牧山向堀構、勝入大草砦構、秀吉三月廿一日大坂發陳、伊勢路城々仕置被致、美濃路へ廻り（マヽ）内、廿七日、犬山著城被申候處、良將故其日大軍を卒（率）し、樂田、羽黑邊巡見有之也、敵ハ不兵威を振ひ、地形を善惡（ノカ）を見、地利を考へ、小牧山ゟ向て、所々ゟ向城を構へ、人數を分て

入置るゝ、此間の透ゟ勝入ハ、犬山ハ秀吉へ渡し、大草ゟ砦を構へし也、

犬山ヲ秀吉ニ渡ス

日根野弘就

領知不知、濃州の武萬石、濃州出生、齋藤山城守ゟ仕へ、後信長ニ隨ふ、武功ゟる、

二重堀二千　日根野備中守弘就

弟　同　彌次右衞門

稻葉一鐵

濃州曾根五萬石、同馳（マヽ）方三人衆の内、伊賀州伊賀守、氏家卜全、稻葉伊豫守也、信長ゟ仕へ武功ゟる、次男兵庫頭曾根留守ゟ居ゟ殘る、兵庫子藏人勢州田丸領、

稻葉伊豫守一鐵

嫡子　同　左京進貞通

三男　同　左（右）近太夫

同　勘右衞門

同　彥六郎典通

丹羽長重

生、武衞家修理亮長政、尾州愛知郡兒玉村出仕へ戰功有る元龜二年、江州澤山五萬石、信長生害後、若狹一國、江刕志賀高島二郡、大樽（增）ゟ居城、天正十一、柴田合戰ふ功有て、若狹越前加賀半國八、十萬石領ゟ、天正十三年卒ス、五十壹才、

小松寺八千　丹羽五郎左衞門長秀

〇本書、長秀ト爲スハ、長重ノ誤ナリ、

金森長近

江州虎御前山三萬石、飛州高山三萬八百石、金森ハ柴田勝家ゟ一味して、勝家滅亡後秀吉ゟ降參ス（ル）、故ゟ今度一働可致と早束（速）出張せし也、

天正十二年三月二十八日

内窪三千

蜂屋出羽守賴隆

金森五郎八郎長近

近國の諸將追々來り、此節三萬餘、
其後遠國の諸將聞次第ゟ集る、見合居る衆も、秀吉威勢強き故ゟ、追々來り
隨ふひ、四月八日九日頃こそ、七八萬餘、其以後拾萬餘の人數といふ、
森川權右衞門篠木砦取立、信雄、村瀨作左衞門砦構る、神領、關田の間下市場の內ゟ能場
仰付、一揆頭として森川權右衞門の從士五千石領ゟ、其內四千石篠木こ
所有之、則此處ゟ構ふ、村瀨作右衞門
而領ゟ故、大將分ゟ加勢ゟ被遣也、

森川權右衞門
村瀨作左衞門
篠木莊
柏井莊

篠木庄　三十壹ヶ村　川北越といふ、
大山　明智　西尾　和泉　一色　內津　下市場　下原　大草　庄名
廻間　神明　白山　關田　出川　名栗　神領　上大留　下大留　足振
高籠守（モカ）　玉野　外ノ原　松本　野口　林村　上野　大泉寺　神屋
堀ノ內　久米
柏井之庄三鄕ハ、
上原　下條　中切

〔柏崎物語〕中略、秀吉、白樫左衞門等ニカ、ル、廿六日、美濃路へ入、廿七日、一〇感狀ヲ與フルコトニカ、ル、（三月）

隨分取急、ウルマ（潤）れ渡ゟを越ゟ、午刻犬山れ城へ被參、勝入ね對面しゟ、當
所を早く取手柄を賞美被致、拔地利を見るとゟ直ゟ被出、羽黑、樂田れ方
とゟ、小牧筋へ被參候ゟ見廻ゟ被申、小牧ゟ小平太（原政）とゟ居、神君ゟ清
洲へ被爲入、小平太ゟ東（カ）れ紋れ旗をゟゟゝ、大全（勢）とし居、秀吉柵際まゟ
被參、唐冠れ甲に羽織計ゟ、巡見被致、小牧れをゟ、夫秀吉を打と鐵炮を
雨れ如く打懸る、皆大將達ゆへ小口（濱口アラン）をかし御退候樣皆々申、秀吉おまゟの
樣ゟ名將ゟ申ゟれをれゟるとおしと被申、是計れ砦ゟゝ一踏はぬし也と
申被歸候由、秀吉十三萬餘れ人數ゟを、白（マヽ）ウルマ船を崩（搖脫カ）し、跡へ歸る心ゟ
く、大戰をするまじと、是ゟ三
一廿八日、神君へ小牧をとゟ注進有之、小牧山へ信雄卿御同道ゟる御移とゟ被
遊、御跡清洲ね內藤三左衞門仁（尽）成、三宅惣右衞門、大澤兵部大輔、中安彥四
郎、外頭ゟゟ信雄卿れ家來も居ゟ、秀吉今日も出ゟ、二重堀、鼠山邊へ被出、
小牧へ十二三町あらゟるいおし、おゝへ參らと鑓を入（よカ）ると、山をとゟ下とはは
ゝ居神君（清井忠次）、左衞門尉を御呼被成、敵ゟ軍をたゟ持ゟぬゟと上意ゟとゟ、はや

秀吉鵜沼ノ船橋ヲ撤シテ決戰セントノ言フトノ說
神原康政小牧ヲ守ルト
秀吉、白樫左衞門等ニカ、ル、廿六日、美濃路へ入、廿七日、一〇感狀ヲ與フルコトニカ、ル、（三月）
家康信雄ト回道シテ小牧ニ入ルトノ說

天正十二年三月二十八日

天正十二年三月二十八日

軍を持ぬと申上、ばらと喰留よと上意に付、大將悉く色光く、時ゐ左衞門尉自分け家來にゐふ樣ゐ、神君け上意ゐ不搆、空を見ゐ、日ゐ晩景ゐ及、小屋道具を清洲よ取寄とゐふゐ居ゐ故、左衞門尉功者け事、麁骨ゐ事ゐ成ゐしと被思召候由、〇中略、家康、廣瀨景房等ヲシテ、敵狀ヲ偵察セシムルコトニカヽル、前揭小牧御陣長湫御合戰記ニ同ジ、

酒井忠次宿營ノ準備ヲナス

鵜沼ニ船橋ヲ架ス

家康挑戰セントス

一廿八日け夜、上方け先手大騷動致も、三河勢出ゐと騷く、秀吉聞て、稻葉一鐵齋を遣とし靜免らゐ、仍之左ゐけゐる、

〔小牧戰話〕小牧御陣

一秀吉公大垣を立て鵜沼よ船橋をわさし、犬山の城ゐ移らをゝり、先手小牧山の東西へ押廻しぬ、うく而上方勢小牧山東二重堀の前へ人數おしゐさし、備間とうよ見へゝゐる處よ、小牧山ゐ家康公御覽有て、本多中務に一當あてとと被仰ゐるふ、御挨拶も申上けりしゞ、再三の御意なりしゐ、酒居(井)左衞門尉黑頭巾二枚(ヲ突ト云、マヽ)、御側ゐ有しゐ、此中の評定無ゐ成ぬと申ゐる、中務ゐ必無用に候と申も、此節いつをも小牧山の城にて下墨ゐるよ、可押寄とも可陳取とも見えけりゐる、諸人合戰の心懸有しに、左衞門尉打仰き、日を見て郎等よいひ付ゐるゐ、今日と軍も有ゐしき間、宿陳の用意して來をと清洲へこそゐ遣しゐを、其節家康公にと、左衞門を召て御尋有ゐるゐ、合戰を持さる敵に哉と被仰きをゐ、合戰を仕ゐしき敵と申上る、子細ゐいうこと御尋有ゐれゐ、左衞門尉、日と八ツ過に成候、敵地へ深入しゐる間、早速可陳取に候、其上秀吉弓矢功者之大將なれゐ、無案内なる合戰有ゐしく候と申上ゐる處よ、案のとく其通にて、敵も早速陳取ゐり、

秀吉書ヲ家康ニ遣リテ決戰ヲ挑ムトノ說

高山重友諫止ス

〔武邊咄聞書〕八

一天正十二年四月、尾州小牧御陣の時、秀吉公ゐ二重堀の城へ御打廻りに御入被成、大手先け關戶の走り櫓へ御上り、小牧山を遠見被成、高山右近大夫常(重)任(友)を召、小牧の家康方へ狀を越んと思ふ也、其子細ゐ、明日明後日の中實否の一戰を致し相果さんと思ひ切ゐる、我(ワカ)等足も不引樣よ支度し、一戰よて埒明可申候間、家康も其用意いさされ候へと書狀認可遣と被仰出、高山右近暫思案して、御無用よ可被成候、不入事よて候と申上ル、秀吉公、何とて不入事と申候と御尋、右近申上候ゐ、御

天正十二年三月二十八日

秀吉長岡忠興ヲシテ書狀ヲ家康ノ陣ニ送ラシムトノ說

天正十二年三月二十八日

書を被遣候共、迚も無事ある御返事を家康被成間敷候、左候へハ御機嫌そこま、御をね被成候ハヽ、明日の御軍ハ御まけと申上ル、秀吉御意ハヽ、我をきゝさるとて軍ハ可負様おし、右筆よへとて、増田右衞門尉長盛を召、右の段々を堅文ハ書を、壹間計の竹こゝさみ、長岡與一郎忠興（後ニ細川越中守云、）を召、其方只一騎ハて此文を持、小牧山敵陳の一の木戸筋ハ立置て乘返るへし、立（カ）様心得へし、左候ハヽ、家康より取ハ可來と被仰、高山右近以の外氣色替り、與一郎上意成共不可參、御忠節おらハ無用ハ可仕と申上ル、忠興ハとゝく不申、謹而罷在候、秀吉、よし〳〵忠興ハ得參間敷候、鐵炮ゟきひしゝ來候間、醐（醐）酌あるへし、餘の剛の者こ持をて可遣と被仰、忠興色を變し、右近をとつさと睨、不入事を申上候ゆへ、御機嫌損し候、其御書を被下候へ、拙者罷越立可申と被申上、秀吉御機嫌直り、去ゝ我差圖すへしとて、座を御立被成、忠興を御傍へ召、小牧山家康陣の前ハ見ゆる松の一村ある所の小塚の見ゆる所ハ、此文を立置、早々可乘戻との上意也、忠興、承り候とて、馬ハ打乘、件の竹ハ夾候御書を馬上ハ持て、乘立て參り、御指圖の所へ行、馬より下立、小塚の上こ立置候處、小牧山より鐵炮を打懸ル

渡邊守綱等秀吉ニ返書ス

家康ノ陣ハ柵堀ヲ設ケズ

事雨のおとし、忠興ハ御文を立置、五廻り六廻り輪乘して、靜々と被歸候、秀吉ハ矢倉より御見物也、忠興罷歸り、御差圖の所ハ御文を立候由被申上、秀吉公聞召、我先刻より是こて見さり、いつゝも文の立樣よしと被仰所ハ、如案家康公御陣ハ、鴾毛の馬ハ乘、赤縅うけさる武者一騎乘出し、彼立置候御文を取候を、秀吉御遠見有て、あれ〳〵見候得、我申さるあとく文を取ハ來候と御機嫌也、卽うの武者御文をかさけて小牧へ歸ル、秀吉頓而返事可來とて御覽被成候所ハ、此度ハ金のびを蓋らさしさる武者、鹿毛の馬ハ乘、文を竹ハさゝさ乘來、もとの所ハ立置、馬を乘廻し、文をさゝの竹のひつゝを直し、乘廻し〳〵罷歸候、秀吉公御意ハゟ、家康返事來り候、取てまいゝと被仰、忠興又乘出、うの御返事を取て被差上候、披見あるハ、家康公御返事ハて歟し、鐵炮大將渡邊半藏守綱、水野太郎作正重御返事なり、其詞云、御書拜見仕候、明日御一戰の砌、柵堀を御備跡ハ被仰付、思召切て御一戰可被成間、此方ハも其支度可仕旨、御紙面之通奉得其意候、其許ハ左樣ハ可被仰付候、其段此方ハゟ入不申候、柵堀不仕候ても、皆東者ハて、一足も逃候者無之候間、家康ハ申聞ルハ不及候、我々より乍憚

天正十二年三月二十八日

秀吉彈雨ノ中ニ立ツ

榊原康政檄文ヲ發シテ秀吉ノ罪惡ヲ擧グ

天正十二年三月二十八日

御返事申上候との文言也、秀吉公、扨々憎き返事哉と、御無興被成候、高山右近、されとこそ我等の如了簡、兎角ろくある御返事ある申上間敷候、左候ハヽ、御きね可被成と存候間、御無用と申上候キと苦々敷申上ル、秀吉ハ、よし〳〵仕様ありとて、馬引出をよとて、御馬よゆらりとめし、忠興一騎被召連御乘出し候、御近習追續いて乘出し御供仕候、秀吉ある件の松の一むらある小塚の上へ御上り、草摺を捲り、御尻をたゝき、家康是くらへくらへと被仰候、小牧山よりハ、唐冠の甲よ孔雀の尾の羽織ある秀吉あるそ、ふるれうてとて鐵炮雨のふるとく打ちけ候、秀吉公ハ、天下の將軍よある、鐵炮ある當らぬものよと被仰、靜よ御乘戻り候、人々興を醒しなると云々、（落）

穗集古老物語同ジ、

○榊原康政、檄文ヲ發シテ、秀吉ノ罪惡ヲ擧グルコト、疑ハシケレドモ、便宜左ニ合敍ス、

〔武德編年集成〕二十八 頃日（四月五日）、榊原康政、樂田、二重堀等ノ諸陣へ書牘ヲ傳テ曰、秀吉既ニ君恩ヲ知ラスヌ、信雄卿ト兵ヲ締フ、惡逆無道ノ甚キ、孰カ是ヲ惡マサランヤ、諸將羣士何ソ義ヲ忘レ、亂臣ニ與シ從フヤ、早先非ヲ改メ、信

秀吉康政ノ首ニ賞ヲ懸ク

秀吉主恩ヲ忘レテ信孝ヲ殺シ今又信雄トマタ兵ヲ結ブ

雄卿ニ屬スヘシト云、秀吉是ヲ聞テ大ニ怒リ、康政カ首ヲ獲テ、吾心コヽロヨフスル者アラハ、賞祿其請フ處ニ任スヘキ旨令ヲ下ス、

〔越後高田榊原家譜〕坤 同（天正）十二年甲申ノ春、豐臣秀吉ト織田信雄ト不和ニ依テ、信雄、德川殿へ援兵ヲ乞ハル、依之三月七日、家康殿尾州表へ進發ノ時、康政先手ニテ地利ヲ圖リ、進メマヒラセテ、小牧山ヲ陣所ト定メラル、則康政一手ヲ以彼山ヲ取敷、旗ヲ立、同十六日、柵圍落成、相圖ノ狼煙ヲ揚シカハ、則陣所ヲ發ニ移サル、此節敵ノ鋭氣ヲ挫カン爲メ、檄文ヲ作テ以テ之ヲ觸達ス、其文ニ云、

夫羽柴秀吉者野人之子、出於草萊而僅爲馬前之走卒、信長公寵異（過）之過、一旦特擧拜於將帥、食於大邦、其恩高似天、深似海、此擧世所知也、然ニ信長公卒而、秀吉忽忘主恩、遂因際會謀企非冀、將滅其君後奪其國家、慘哉、向（嚮）殺信孝公、今又與信雄公結兵、大逆無道不可勝言、其誰不疾視之、今我寡君（此指家康）、深懷信長公舊好、切恤信雄公之微弱、赫然整旅、不量勢之衆寡、仗大義之當然、伐天人之所惡、人々豈可黨彼凶惡、以汚乃祖佳名於千載乎、惟尙專合力於義軍、速討彼逆賊、以快海內之人心、因以告、（大旨蓋如此カ、）

天正十二年三月二十八日

美濃脇田ノ吉村氏吉、今尾ノ市街ヲ燒ク、是日、織田信雄、其功ヲ褒ス、

〔吉村文書〕○前肥

天正十二歳月日 不詳

至于今尾相働、町令放火候由、粉骨之儀不始于今候、猶以無由斷才覺專要候、
切々其元之様子可被申越候、恐々謹言、

三月廿八日 信雄(花押)

吉村又吉郎(氏吉)殿

〔大友家文書錄〕六義統

○家康、氏吉ニ書ヲ與ヘテ、信雄ノ爲メニ忠節ヲ致サシムルコト、本月十九日ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、筑後高良山玉垂社大祝鏡山宗善夫妻、同國邊春ニ戰死ス、是日、大友義統、其功ヲ賞シ、其男某ニ同國三井郡五日市等ヲ與フ、

就近年不慮之弓箭、筑後上下之者共搆未練候之處、從最前親父宗善、保眞無別儀心底、乍案中感悦無極候、就中宗善事、邊春薩摩守(黒付)以同意、惡黨取懸候刻戰死、忠儀之次第無比類候、連々順路之心底依顯然、父母相共被拋一命候事、前代未聞之儀候、併御愁傷察存候、仍筑後國中六十町分(坪付在別紙)之事預進之候、可有知行候、恐々(惶)謹言、

三月廿八日 義統在判

高良山大祝殿

袖判

坪付

三井郡之內五日市 一所三町
上妻郡之內 一所社領
上妻郡之內吉里 一所拾貳町(廣アルカ)
三井郡之內國分 一所六町
同郡之內野中 一所六町
同郡栗村 一所拾町
同郡藤山 一所拾貳町
同郡森 一所拾五町

天正十二年三月二十八日

六十町ノ地ヲ與フ

坪付

同郡宗崎
三猪(猪)郡白口
ゆ氣
已上

天正十二年三月廿八日

高良山
大祝殿

一所三町
一所三町
一所六町

朽網宗歷

差合ニ依リ替地ヲ給ス

鯵坂莊

去年於邊春山、鎭信同前、御親父宗善夫婦相共被抛一命候、御忠意之趣誠無比類候、就夫被成遣御判形候、珍重候、彼國之御靜謐爲不可有程候條、□□御坪付御知行專一候、何樣御在國中節々可□(申談カ)□之間不能重筆候、恐惶謹言、

□(三)□(月カ)廿八日　　宗歷(朽網)在判

□(大)祝殿　御宿所

〔鏡山文書〕　○筑後

御親父宗善、邊春薩摩守同前、戰之次第、忠儀無比類候、就夫所々雖被成御感(恩)許候、何爲差合申候之條、爲代所三池郡之內四ヶ村拾貳町、三井郡鯵坂之庄之內六丁分六町、同郡之內三行拾町分、同郡鯵坂之庄之內清德分八町、同郡之內五郎丸分廿町之事、可有御知行候、恐惶謹言、

天正十二年(三カ)三月廿日

宗歷(花押)
鎭連(黑木)(花押)
紹運(高橋)(花押)
道雪(戶次)(花押)

戶次道雪

鏡山大祝殿

○龍造寺隆信ノ兵、筑後邊春ノ邊春鎭信ヲ攻ムルコト、十年十月十六日ノ條ニ見エ、

二十九日、丙午、羽柴秀吉、尾張大縣社ニ禁制ヲ下ス、

〔大縣神社文書〕　○尾張

禁制

右甲乙人當社壞取事令停止訖、於社人者如先々可還住、若不謂族申懸有輩者、可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾貳年三月廿九日　　筑前守(花押)

尾州二宮(大縣社)

徳川家康、近江多賀大社町ニ禁制ヲ下ス、

〔譜牒餘錄〕三十五　稻葉丹後守

禁制

一當手軍勢甲乙人等濫入狼藉之事、

一陣取放火、相懸臨時非分課役事、

一三社森伐採竹木事、

右條々於違背之輩者、速可處嚴科者也、仍如件、

天正十二年　　多賀大社町

三月廿九日　　家康公御書判

○信雄、多賀社及ビ其町屋ニ禁制ヲ下スコト、本月是月ノ條ニ見ユ、

惟住長秀、羽柴秀吉ニ答ヘテ、和泉ニ於ケル戰勝ヲ賀シ、併セテ北國ノ情勢ヲ報ズ、

〔侯爵前田利爲氏所藏文書〕

其表爲御見廻以御札申入候、仍今度於泉州中村(一氏)、蜂須賀(正勝)、前野(小傳)を始被及一戰、則時切崩、數千人被討捕之旨、昨日示預、委曲承屆大慶不過之候、誠如此之御

和泉ノ戰
中村一氏
蜂須賀正勝
前野長泰

北國ハ靜穩
前田利家ノ兵出陣ス

長秀ハ長重ヲ秀吉ノ許ニ遣ス

仕合御威光無是非次第候、此上家康可被討果事案之內ニ候、彌相替儀無御座候哉、三介(織田信雄)殿之儀も不及申、家康失十方、引入所無之躰さるへきと察存候、御樣子具蒙仰候ハゝ可爲滿足候、先度御左右ニ在之、中々さやとニ不存候間、此方へ罷下候へハ、樣躰承度口上申候、隨而北國何方迄も靜謐候間、聊被成御機遣間敷候、就其前又(前田利家)左人數此比早々相立申由候、則返札令進覽候、佐々(成政)木陸奥守うらへも持遣候、定而不可有油斷候、其分別ニ同名平左衞門參陳申付之由也、此地罷通候、跡々人數猶以懇可申候、右兩人之人數被召寄之段、近比尤存候、將又せうれ(長重)進之置候、御近所ニ被置候て、萬事御引廻奉賴候、於樣子も、蜂屋(頼隆)、金森(長近)うらへ迄令申候、猶以不及申入候へハ、此上ハ彌諸方被示合、無之越度樣ニ御行肝要候と存候、其や御勝手ニ罷成候間よろしく候、御分別專一候、猶使者ニ申含候、恐惶謹言、

三月廿九日　　長秀(花押)

秀吉樣　人々御中

○紀伊根來雜賀ノ一揆、和泉岸和田ヲ攻ムルコト、本月十八日及ビ同月二十二日ノ條ニ見ユ、

利家長連龍ヲシテ出陣セシム

〔參考〕

〔加賀藩史稿〕一　高德公

是月、羽柴秀吉、軍ヲ帥キテ尾張ニ入リ、國主織田信雄ヲ伐ツ、公老臣長連龍ヲシテ、兵一千ニ將トシテ、往キテ秀吉ヲ援ケシム、

是月、肥後ノ僧某、延曆寺戒壇院ヲ再興セントシテ、同國ニ勸進ス、青蓮院尊朝法親王、之ガ緣起ヲ草シ給フ、

〔來迎寺文書〕三　○近江　延曆寺戒壇再興之緣起

原以、弘佛教賢聖者、授三皈五戒以爲軌範、如來遺敎之指南、治國土賢君、行三網五常以爲政敎、孔丘遺文之庭訓、是則雖內外異門、眞俗歸一理故焉、抑當山戒壇院者、嵯峨天皇御宇天長年中開基、本尊者法花能說敎主釋迦如來大乘圓頓之戒和上、左當來導師彌勒慈尊敎授阿闍梨、右三世覺母文殊大士羯磨阿闍梨、安三尊於一壇、摽三學俱傳、又顯伊字之三點、堂舍表靈山涌現寶塔、內陳二經所在寂光土、四本柱則佛法護持之天衆、因茲參詣于佛前、鳴於一磬開一心之戒藏、行右繞三匝、會權乘之三聚淨戒、致於三禮歸衣座室之方軌、然則一度躡實相眞壇、持一得永不失哉、窮卽身六卽成佛、縱雖白衣嫘緊非五趣輪廻之人、傳聞、異朝隋揚帝者、於金城築戒壇、請天台智顗禪師、受大乘之戒法、本朝弘仁帝於大裏飾戒場、詔慈覺大師、講菩薩之戒律、是併雖膺十善之運、輔万機之政、潛仰三寶之威風、鎭四海之逆浪、加之河西道朗、凝三年之苦行、夢中感如來之授戒、信貴滿慶、預閻魔王之請、至于冥府講讚律藏、冥官作禮拜、獄卒捨器杖、菩薩代罪人獨浮沈涌釜云々、呼嗟如來隱雙林之雲、遠阻星霜、慈氏遊中天之霞、遐徯後下生、中間之昏衢不照戒光、凭何萌佛種之苗薹、爰九州肥後沙門某、欲聚一國之奉加、遂一宇之再興云々、倩案之、生於無佛世、搜得魚袋金、奇異曷事勝之耶、乞願唯莫遷光陰、急催郡縣之芳助、令滿造功之願望、若然現滿山之冥衆加擁護、當預三聖之級引、化生都率之內院、待龍花之正覺而已、仍願海淺旨如件、

天正十二曆彌生上旬　　二品親王（曾朝法爲王）（花押）記之

○羽柴秀吉、正覺院豪盛、德雲軒全宗ニ、戒壇院ノ再興ヲ許スコト、五月一日ノ條ニ見ユ、

羽柴秀吉、尾張黑田社、美濃崇福寺等ニ禁制ヲ下ス、

〔籠守勝手神社文書〕○尾張

天正十二年三月是月

天正十二年三月是月

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉(藉)之事、
一放火之事、
一對地下人不謂族申懸事、
右條々堅令停止畢、若違犯之輩在之者、速可處罪科者也、仍下知如件、

天正十二年三月　日　筑前守(花押)

〔聖徳寺文書〕○張尾

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉(藉)妄、
一放火之事、
一對地下人不謂族申懸事、
右條々堅令停止訖、若違犯輩在之者、忽可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾貳年三月　日　筑前守(花押)

〔崇福寺文書〕○美濃　太閤様禁制書

禁制

尾州正(聖)徳寺

崇福寺

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉妄、
一陳取放火之事、
一剪採竹木事、
右條々堅令停止訖、若違犯輩在之者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾貳三月　日　筑前守(花押)

〔諸國高札〕三本願寺兼帶所并末寺高札之寫

禁制

一軍勢甲乙人亂妨狼藉事、
一陣取放火事、
一對地下人不謂族申懸事、
右條々堅令停止畢、若於違犯輩ヲ、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十二年三月　日　筑前守在判

美濃國六條村河野善超寺高札之寫

濃劦六條本庄

右高札筑前守秀吉公ゟ頂戴仕候、但紙御書判ニ而御座候、先年ゟ板ニ寫境内ニ建置候由申傳候、只今ゝ境内ニ建不申候、

羽柴秀吉、諸軍ニ令シテ、亂妨狼藉ヲ戒ム、

天正十二年三月是月

一錢切
失火
逐電

船越景直

〔古文書〕船越記錄御用所本

定

一ミの之地陣取よおゐて、亂妨狼籍(藉)のともから一せんきりさるへき事、

一於陣取、少も大儀(火我カ)いさをともから在之ハ、則その者をからめ取可出置、自然ちくてんせしめハ、其主人可成敗事、

一ぬゝ、ゐら、たき木、さうし以下、てんしもよ相理可取事、

右條々於違犯之輩在之者、忽可加成敗者也、仍下知如件、

三月　日　　秀吉公朱印

船越左衞門尉(景直)殿

〔福島家系譜〕正信市兵衞尉殿

尾張國海東郡花正庄二寺村ニ住居、自秀吉賜下知狀一通、于今傳之、家譜不傳、故不詳、依之正信爲始祖、

下知狀

定

一みゝ之地ちんとりよおひて、らんとうらうせきの輩一せんきりたるへき事、

一ちんとりよおひて、火我いさを輩有之は、卽其ものをからめとり可出、幷しせんちくてんせしめハ、其主人せいたいをへき事、

一ぬゝ、ゐら、たきゝ、さうし以下、てんしもよあいおゐてハこれをとるへき事、

右條々違犯之輩有之者、可加成敗者也、仍下知如件、

三月　日　　秀吉御判

福島市兵(正信)衞尉殿

○秀吉、コノ定書ヲ出スコト、年次未ダ詳ナラザレドモ、姑ク茲ニ掲グ、

池田勝入(恒興)、美濃西圓寺ニ禁制ヲ下ス、

〔西圓寺文書〕○美濃

禁制

一當手之軍勢濫妨狼籍(藉)陣取放火之事、

一鄕質所質之事、

一伐採山林竹木之事、

赤坂寺內
西圓寺

右條々於違犯輩者、堅可加成敗者也、仍如件、

天正十二年三月是月

福島正信

鄕質
所質

天正十貳三月　日　恒興(花押)

織田信雄、近江多賀社及ビ其町屋ニ禁制ヲ下ス、

〔多賀神社文書〕二〇近江

禁制

一軍勢甲乙人等亂妨狼藉之叓、

一陣取放火幷相懸非分之諸役之事、

一三社伐採竹木之事、

右條々堅令停止訖、若違犯之輩、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十二年三月　日　信雄(花押)

多賀社中幷町屋

○家康、多賀大社町ニ禁制ヲ下スコト、本月二十九日ノ條ニ見ユ、

是春、誠仁親王御生母萬里小路房子疾ム、和仁王御生母勸修寺晴子(新上東門院)モ亦疾ム、

〔玄朔道三配劑錄〕天正十二ノ春　大典侍殿　八十一歳、患傷寒、初五六日、竹田法印(定加)療治、至八日而譫言不止、大便五日不通、潮熱去來、汗出、予(曲直瀬道三)小承氣ニ參、柴ヲ加ニ貼、大便通後、小、柴、胡ニ加減而熱退、十餘日而平安、

若宮(和仁王)樣之御袋後准后、產後血暈不止、小腹在塊而痛、脈浮數而有力、予紅、歸、芎、沒、桃、我之類ヲ用、先黑藥ヲ用テ血暈止、續テ煎藥三四貼テ、瘀血下テ、腹痛止、

竹田定加
曲直瀬道三

四月大 盡 丁未 朔

一日、〔村〕信濃屋代ノ屋代秀正、上杉景勝ニ背キ、同國海津ヲ去リテ、荒砥ニ據ル、是日、景勝、岩井信能等ニ命ジテ之ヲ擊タシム、尋デ、景勝、自ラ信濃ニ出ヅ、

〔志賀槇太郎氏所藏文書〕一 ○出羽

市川信處

急度申遣候、仍而屋代（秀正）海津（城料等）引拂ふ付而、彼地無心元候條市川（信忠）令同心、無嫌夜中、早速相移、各談合堅固之仕置尤候、自爰元人數一兩日中ニ悉可差遣候、先々明日安田彌九郎其地迄可指越候、謹言、

卯月朔日　　景勝（花押）

岩井備（信能）中守殿

〔歷代古案〕四

今般屋代不及暇引籠之條、仕置爲可申付、諸侍中へ申屆候、雖不能申候、其國是非此度相極候之條、老父各令談合、一途可申越候、須田（左衞門佐）方彌無別儀被抽忠信候之樣ニ才覺尤候、謹言、

（朱書「天正十二」）四月二日　　景勝

上倉治部大輔

秀正ヲ處分スベシ

景勝信濃ノ形勢ヲ革名盛隆

上倉治部大輔殿

岩井備中守殿

〔別本歷代古案〕十五

急度以使者申届候、仍今般屋代左衞門海津取除候仕合、時宜如何覺外候、縱私之宿意ニ候共、不及暇引籠候間、可覃其仕置候、各別而累年忠信此辰候條、一廉奉公肝要候、猶富永備中守相喩口上候、謹言、

四月二日　　景勝

清野左衞門佐殿
寺尾傳左衞門尉殿
西條治部少輔殿
綱嶋豐後守殿
大室源二郎殿
保科左近尉殿

〔歷代古案〕三

內々自是可申述之由被存之處、御脚力到來、快然之旨被露直報候、如御札、去

天正十二年四月一日

天正十二年四月一日

冬盛隆(景考)ゟ以使者被申仰(談カ)候處、乍不始儀、別而御執成之段祝著被申候、仍而去六日向田村表御調儀之由、定而彼表早速可被屬御手裏事無猶豫候、次當方之儀、信州海津在城被申付人之内、號屋代(越中守子左衞門尉)者令逆心之間、爲彼仕置至于半途出馬被申、其響不承敢、逆徒居城荒砥、佐野(下高井郡)山兩地、不經五三日自落、無行方爲躰候、如此之上、當州仕置彌堅固ニ被申付候、其外諸境無相替儀候條、下郡出馬不可有程候、其節猶以御入魂畢竟被任入候、萬々期後音令略候、恐々謹言、

天正十二ノ狀
卯月十三日　　直江山城守
會津御家來　　兼續

ニ報ズ　盛隆田村表ニ働ク
秀正ノ居城荒砥佐野山陰ル
景勝ハ近ク越後下郡ニ出馬スベシ
秀正城ヲ出デヽ行方ヲ知ラズト稱ス
直江兼續

〔歷代古案〕八

如御意、杏々奉絕音問、無御心元候處、當府ゟ御音書被指越候、尤直山(直江兼續)遂披露候、則喜悅之段被及直報候、仍當口模樣之儀、信州海津地端廻輪差置被申候屋代左衞門尉企逆意、號荒砥地ゟ引籠候之處、不移時日、信州之人衆被申付、被取詰候之條、去八日夜中ニ令出城、其身一類不知行方罷成候、其上屋形(景勝)半途ゟ被罷出、如存分仕置被申付候、可御心安候、定而風說被聞召、可無御心元候間、子細申達候、將又盛隆東口ゟ御出馬之由、何ニも御太儀不及是非候、内々以脚力も御音信雖可被申候、爰許仕置取籠候之條、遲々非無沙汰候、近日可爲納馬候、春日山へ不被寄馬、直樣下(部カ)鄕ゟ出張可被申候、至其時、具可申定候條、委曲小澤方へ申入候、定而傳上可被申候、恐々謹言、

盛隆東口ニ出馬ス
秀正麻績青柳兩氏ト共ニ家康ニ屬ス

（朱書）天正十二
卯月十三日　　鴎閑齋

〔大日方文書〕○信濃

道喜(花押)○宛所ナシ、

來札本望之至候、仍而今度屋代逆心ニ付而、與風御出馬候、然ゟ其地用心堅固ニ候之由肝要候、不及參陣、其元ニ有之御番專用候、猶期後音候、恐々謹言、

卯月廿四日　　直江
大日方佐渡守殿　御返報　　兼續(花押)

〔景勝一代略記〕一天正十二三月、又去(新發)ゟ田へ御出馬ニ也思召候處、信濃海津ゟ屋代越(秀正)中逆心仕、海津引拂、汝(ヤ、下同ジ)在所へ引籠、麻績、青柳同心ニて、家康御手ニ屬ス、此靜謐に信州へ御出張也、屋代汝ゟ在所ゟ三河へ取除也、於見(虛發)

天正十二年四月一日

景勝麻績ヲ攻落ス

景勝八月上旬納馬ストノ說

青柳麻績兩氏秀正ニ勸メテ家康ニ屬セシム

景勝小笠原貞慶ノ屬城麻績ヲ攻ム

上條宜順ヲシテ山浦景國ニ代リテ海津ヲ守ラシム

新發田重家景勝ノ屬城笹岡ヲ攻ム

天正十二年四月一日

へ御出馬有、城責落給、青柳ハ小笠原(貞慶)へ取除也、〇小笠原貞慶、麻績、青柳等ヲ攻ムルコト、四月四日ノ條ニ見ユ、然共生捕まゐ西こ上る、いかり山と新地(云此カ)御拵、西南のおさへに在番小田切左馬助、保科豐後被指置、扨海津へ御出、山浦源吾(景國)殿四郡仕置こ被指置處、越中不儀を仕付、上條(宜順)殿を置御申有、(マヽ)八月上旬御納馬也、

〔越後古實聞書〕一〇中略、新發田重家、笹岡城ヲ攻ムルコトニカ、ル、下ニ收ム、六月、信玄より申來ハ、小笠原の領分青柳、于味(麻績下同ジ)の城代、屋代越中を勸め、三河の家康公へ隨ひ、越中ハ梅(侮)津の城を引とらひ、在所新戸(尼)へとり籠申と云來まゐ、柴田(新發)への御馬を信玄へ被爲出、其內ゟ越中守ハ三河へ取のく故ゟ、小笠原領へ押籠、于味を生捕、磔こ被成ル、其隙ゟ青柳ハ小笠原へのく、于味の城を責メられ、于味を生捕、磔こ被成ル、其隙ゟ青柳ハ小笠原へのく、大城もせめたとされ、三ケ所の城ゟ人數を入替、境の稻荷山にかけ上ケ被成、保科豐後守、小田切左馬助二人居置、夫より海津へ御馬を向らまて、四郡の守護代ハ、山浦源吾國清(景)おれとも、屋代越中と一ツ成とて、上條殿を御供ゟて、八月ね入て御退陣也、

〇新發田重家、景勝ノ屬城越後笹岡ヲ攻ムルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔越後古實聞書〕一天正十二年甲申四月ハ、柴田(新發田重家)一味の城々の人數を集め、

ヲ攻ム笹岡ハ山城

今井某ガ妻ノ奮戰

重家退ク

大勢ゟて笹岡の城を取詰ける、小せり合ハ日夜おゐとも、大勢おるハ初て也、山城の事おれバ、敵を下手ゟして、防戰成ルゆへ、大勢と云共敵不叶、たて籠る者とも大利を得る、殊ゟ信州牟人雨ノ宮と云者を、今井抱イて有バ、其日の働敵味方目をおどろかし、兼而ハ六具(マヽ)ゟて六間のから堀を飛をのおれハ、飛行自在の働キ也、柴田下知ゟて、搦手へ人數を廻し、一ノ木戶邊に仕寄おるゟ、味方ハ拂て大手ゟあり、今井ゟ女房腹卷ゟて、みだせ髮ゟ鉢卷して長刀を持、下女端手ゟ下知して、石磨、茶臼、擣臼轉ゟけて打倒す、今井ゟ妻の有さまおゟら靜もかくやと、敵味方譽メざるハおし、敵陣ゟハ揚貝立て、馬印れ本ゟ集る、夫ゟ因幡(重家)ハ退ケ(キカ)ゟける、無際限手負引ゟけ〳〵のくをあり、味方も人數おらべ見れハ、討死三十貳人あり、敵の首をあらたむれバ八十三也、高名の暇名(假カ)をおるし、討取首共ゟ春日山へ注進す、景勝公も大感あり、今井所へ御感狀御書被下、幷同心其外へ皆御感狀を被下、田島の作り左つけて後、御馬可爲出とありし、〇下略、景勝、麻績ヲ攻ムルコトニカ、ル、上ニ收ム、

上杉景勝ノ將須田左衞門佐等、信濃丸岩、三原ヲ攻略ス、是日、景勝、之ヲ

天正十二年四月一日

羽尾源六郎
市川信處
岩井信能
湯本三郎左衛門ヲ引付クベ

褒シ、且左衛門佐ヲシテ、元ノ如ク、同國麻績ヲ守備セシム、

〔歴代古案〕五

對直(粟鹿)江、如注進者、羽尾源六郎去廿六、丸岩之地乘入、仕置堅固申付之由肝要候、畢竟須田、市川(信處)粉骨故与感入候、乍此上彌兩人幷吾分入念、彼地持詰候之様ニ可相稼事、千言萬句候、巨細直江可申越候、謹言、

三月廿八日　景勝

岩井備(信能)中守殿

〔歴代古案〕七

態御飛脚則遂披露候、仍先達而以相浦主計助被仰出候三原之調儀、以御稼羽尾方本意、公私太慶此事ニ候、雖新申事候、物毎無御油斷被入御精、御忠信之至誠無比類被思召候、乍此上、彼地如何共堅固被持詰候様、畢竟貴殿御分別ニ相極候、次ニ于見(麻績)御番勢之儀、御斷無御餘儀候へ共、自餘ニ可被仰付方無之候條、乍御太義憑思召之段御諚候、御家中衆雖可爲御苦勞候、此度之儀候間、被懸御意尤候、然者丸岩之地御合力之儀、急度可申付候條、可御心易候、將又湯本三郎左衛門御朱印相調進之候、如何様ニも有御計策可被引付候、

其外之儀御稼偏御手前可有之候、猶期重說候、恐々謹言、

卯月朔日　直江山城守
須田左衛門佐殿　御報　兼續

是ヨリ先、信濃木曾ノ木曾義昌、其屬城同國贄川ノ守將奈良井治部少輔ヲ斬ル、因リテ、贄川又兵衛等、義昌ニ叛キ、同國松本ノ小笠原貞慶ニ內通ス、是日、貞慶、又兵衛ニ地ヲ與フ、

〔木曾考〕○信濃　妻籠々城幷福島合戰

同年(天正十二年)、贄川(西筑摩郡)ニ在番セシ奈良井治部少輔ヲ、故アリテ義昌ヨリ成敗サセケルヲ、彼地ニアリシ贄川又兵衛、同盟物、千村丹波守等、是ヲ恨テ逆心シ、深志(東筑摩郡)ノ城主小笠原貞慶ヨリ贄川又兵衛ニ書ヲ賜ル、依之貞慶ヨリ贄川又兵衛ニ內通ス、

今度其方依忠信、谷中本意不可有幾程候、然ハ(奈良井)おらい一跡於府內壹所永代不可有相違候、先手之儀ハ、其方分別次第不可異儀(有脫カ)候、爲後日仍如件、

天申ノ四月朔日　贄川又兵衛殿　貞慶　書判

○木曾舊記錄異事ナシ、

治部少輔貞慶ニ内通ス

〔木曾考續貂〕一〇信濃　木曾義昌

天正十二年、贊川ゟ在番せる奈良井治部少輔、信州深志の城主小笠原貞慶ゟ内應之聞有て、義昌より成敗をらは、〇上略下

王女御違例

二日、戊申、誠仁親王王女、逝去アラセラル、

〔兼見卿記〕六　三月十九日、丙申、雨降、自勸修寺晴豊相以使者申來云、姫宮樣御違例也、御加持ニ可祇候之旨、御局ヨリ仰也、畏存之由申入了、神壇修行之砌被出、早々祇候也、直可參之由被申、相添使者申入、此方次第可祇候之旨仰也、於萬里小路所、著烏帽子齋服、御局へ參、卽奥之御座所へ參、姫宮樣御座、御乳人イタキ申サルヽ也、致御加持了、於次御座敷在一盞之儀、宸前御盃御局へ、予呑之、次御局へ參也、御看經之樣躰申入了、可有相傳之由被仰了、姫宮樣御守可調進上之旨申入、御祝著之由御局仰也、然者宮、館各御守可進上之旨、仰畏之由申入了、以上御守八、向清三品、南豐軒來、昨日之儀相談、今朝使者喜介ヲ松勝へ遣、三品早々玄以へ被出可然之由相談之處、玄以今朝阿彌陀寺齋ニ被出之由申云々、晚ニ可被出之由被申了、

吉田兼和加持ヲ行フ

廿日、丁酉、姫宮四歳、當年星持來、今日モ御加持ニ可參之由仰也、畏之旨御返事申入了、齋了、參御加持、守八、天度百座祓持參申了、於萬里少路所著齋服、御局へ參、以外御煩敷爲躰也、女中各恐怖也、明日モ可參之由、御袋勸修寺晴子之御局仰也、畏候由申入了、

廿一日、戊戌、午刻參御加持、彌御煩之爲躰也、牧庵ニ可被見之由仰候間、卽遣使者召寄、見御脈療治之義被仰出、中々迷惑之由申入、是非共達而仰候間、藥可致調進御請申、退出仕了、

廿二日、己亥、爲御見舞早々以使者申入、同前之由仰也、後刻罷出、未牧庵御藥進上了、

廿三日、庚子、早々勸亞相へ以使者姫宮御煩見舞申了、同前之由返事也、齋了罷出、牧庵致祇候、御藥之義迷惑之由申入、諸醫放申之間、御大事極也、其故御分別也、成次第御藥可進上之旨、堅仰之間、御請申退出仕了、〇下略、泉州表ノ戰ノコトニカヽル、三月二十二日ノ條ニ收ム、

醫師牧庵

王女大慈光院ニ移ラセラル

廿四日、辛丑、爲御見舞罷出、今朝岡御所（大慈光院）へ姫宮御成也、卽祇候了、同篇蒐角相極御躰也、牧庵御藥御理申入不進上之由申了、〇下略

廿六日、癸卯、○略　中直姫宮御見舞申、向勸亞相、彌御驗氣之由亞相被申之由侍(土田)從(兼治)申了、此度之御平愈奇妙也、諸醫御藥一兩服ッヽ令調進、無少驗、既被出禁中、岡之御所ニ御座、時節ヲ待有躰也、然所御驗氣更非人力歟、

四月二日、戊申、○略　中出京、向勸亞相、於門外對面、亞相云、姫宮今朝御逝去也、今日迄御拘奇妙也、自寔前御定業ト相見御躰也、無是非次第之由申了、御袋之御局卒度見廻申可然之由被申候間、參御局口、以女房館申入了、向萬里、晝祿也、向上乘院、面談、園碁二番打之、持命(明)院對座、暫相談了、萬里來、次向清少(舟橋國賢)納言、暫相談、三品來、玄以所へ罷向之由被申起座、次向富少(種直)路、極臈(中山孝親)相談、今度姫宮之義申訖、極臈藥五三日參也、夜前丹州之者參、令進上一藥、卽時御他界之由極臈相談了、

〔皇親系〕七

誠仁親王

┌王女　母同上、(勸修寺晴子)天正九年十二月一云、十年正月二日生、

羽柴秀吉、近江長濱町人ニ命ジテ、鍬二百挺ヲ同國坂本ヨリ尾張針床ニ運送セシム、

〔南部文書〕二　○近江

從坂本鍬貳百挺可相越申條、爲當町中もよせ、尾張針床迄可相屆也、

卯月二日　御朱印(秀吉)

長濱町人中

信濃木曾ノ木曾義昌、同國黑澤、兒野等ノ鄕民ニ令シテ、軍功ヲ致サシム、

〔木曾舊記錄〕一　○信濃

御朱印　覺

一このさひいて候て、そしりめくり候ハヽ、やんるのうへ、一人ゟ廿俵つヽ

ふちすゑ事、

一ちうなんからいろせものゝなし、百姓からいちうけんふかまゑき事、

一ろうめう候ハヽ、けせ(結解)け幷ゆるんくゆるもへき事、

一はしりめくり玄ゑねこて、何よてものそみこなもへき事、

一くろさゑの内ニこの(御朱印)てそんもち候ハヽ、はもの(ママ)ゆゝや一ゝちのあひさ

おくはしきの事、以上、

天正十二甲申年卯月二日

くろさ𛀁の郷中へ

〔兒野文書〕（木曽義昌）朱印 ○信濃

今度一途走廻おゐてハ、本意上、三十俵ヶ、可宛行、一廉有高名者、成中間可
召仕者也、仍如件、

天正十二甲申　卯月二日

兒野
田澤
矢白木
上鹽淵
鹽淵中屋
越畑
上平

黒澤郷　功名アラバ中間ニナスベシ

板敷野大屋
同所也、與七郎
同所也、三郎五郎
神戸
兒野　與三郎
板敷野　和子
鹽淵彦三郎

〔附錄〕

〔兒野文書〕（木曽義昌）朱印 ○信濃

今度別而走廻、頸壹ッ討捕之條、向後成中間可被召仕之旨、被仰出者也、仍如
件、

天正十二甲申
十月七日
孫次郎

原圖書助奉之

天正十二年四月二日

〔木曾舊記錄〕○一信濃

一和田の小三郎と云ハ先祖之事、今ハ彌九郎ト云土百姓ト成、此處ニ右之御簾中○義昌室、御滯座(在)こて、御所持之地藏尊殘シ置て、今ニ有之、又義昌公御朱印所持、左之通二通之内、假名文之方ハ鼠ニ喰(食)、切レ々々ニ相成、文字難分、乍去御朱印之處ハ殘リ有之、

御朱印四角こて文字不分、

自今以後可走廻之由候之條、成中間、走夫丸可有免許之旨被仰出者也、

仍如件、

天正十二年甲申

十月六日

和田彌三郎

小野內記介奉之

三日己酉、羽柴秀吉、伊東長實ニ地ヲ加フ、

〔小川榮一氏所藏文書〕○二美濃

秀吉公ヨリ始テ御頂戴ノ御朱印

平野權平(長泰)當知行分之內ヲ以、四百八拾石○備中岡田伊東家譜ニハ、四百六拾石トアリ、遣之、都合九百六拾石令扶助訖、彌可抽奉公忠勤事肝要也、仍如件、

伊東家御系圖　長實

卯月三日

伊藤甚太郎(長實)殿○備中岡田伊東家譜ニハ、伊東トアリ、

御書判

是ヨリ先、京都上京、羽柴秀吉ニ物ヲ贈ル、是日、秀吉、之ニ答フ、

〔京都上京文書〕○一山城

爲音信生絹一、同帷廿到來悅入候、此表彌任存分之條、心安可存候、猶玄以(前田)ゟへ申候、恐々謹言、

卯月三日　秀吉（朱印）

上京中

爲音信生絹一疋帷十到來、祝著候、尙委曲細井新介可申候也、

卯月十二日　秀吉（朱印）

上京中

○コノ書狀共ニ年次未ダ詳ナラズ、姑ク玆ニ掲グ、

北畠朝親、德川家康ニ南海ノ形勢ヲ報ジ、伊勢ノ地ヲ返付セラレンコトヲ請フ、

天正十二年四月三日

ヲ請フ、

〔植松文書〕○河（駿）（封紙ウハ書）「作左衞門尉殿　本多重次」　朝親

雖未申通候令啓候、從去年渡藤左相傳使者付置、身上偏家康樣ゟ奉憑覺悟候キ、然處上邊依不慮之儀、至尾州被成御出馬之由尤珍重候、就其紀州四國致御一味候樣可相調之旨蒙仰候、種々申調、早至泉州表悉打立、海陸共所覃手無如在相働候、卽奥角筆本見置、墨付取進之候、乍憚其表無御越度候樣ニ被廻御計策者、天下御利運眼前候、兼亦右如申候、土州へも渡藤左申談、早舟申付、此等之趣申越候、定淡州へ可爲渡海候、將亦勢州五郡内之儀、如前々被返置候之樣ニ、御墨付被申調給候者、可爲本望候、於此表者、隨分可抽忠節覺悟候、卽家康樣へ以愚札申候、向後之儀彌以貴邊取成奉憑外無他候、猶條々角内申含候、恐々謹言、

卯月三日　　朝親（花押）

本田作左衞門尉殿

〔參考〕

〔北畠家系圖〕

時具　從四位下、參議、左中將、永祿六癸亥年、法名天祐、歲六十一、天文五丙申年四月十五日死、是七代目、元親房改具國、

正三位　具教　於三瀨生害ス、歲四十九、法名天覺、權中納言、天正四年丙子十一月廿五日死、

南都東門院　具親　天正四年ニ還俗ス、後長野御所ト云、

是東門院兒也、

式部大輔　實具　親思（息カ）、男也、長野ノ三男也、

〔伊勢國司御一族家諸侍幷寺社記〕伊勢國司御一族家

東門院具親朝臣舍弟、國司具國息、

大友府蘭、義鎭宗麟、國政ニ關スル意見十四條ヲ宰臣志賀道輝、田原親家ニ寄セテ、其旨ヲ義統ニ傳ヘシム、

〔大友文書〕六〇筑後

覺

一被先憲法、每事以思惟被加下知可爲簡要之事、

一一郡同諸鄕庄公事沙汰令出來、以閙目之上、闕地等於有之者、方分幷役所へ被申付、裁判之人被任申旨、堅固可被加下知事、

一就調方之儀、宿老被申談候題目相定候事、次以直之分別被申付候儀相定

憲法ヲ先ニスベシ

候事、殊當方之法儀凡無其紛候事、

一近習其外召仕候人、於領地自然公事以下出來之時、動直被差遣撿使取沙汰、從前々稀之子細候之條、向後穿鑿可爲專一事、

一國中諸侍重緣等申結候刻、爲義統被加詞候事、自然者可依人候歟、縱申人雖有之、輕々敷取沙汰從前々無之候事、

一就政道閙目等之儀、或國之衆、或近習其外諸侍中、號召籠徒被留置候事、太不可然事、

一一郡（并）諸鄉庄衆之儀、連々以愛憐奉公連續候樣有度事ニ候、在陣等幾度も馳走之事候之間、人數一人も無懈怠樣可有分別事、

一近邊奉公立柄、時宜仕合、臘（歟カ）意等、恣之樣躰以外ニ、（候カ）第一酒雜談麁相之躰不及是非候之條、是又堅被申付候ハヽ、（說アルカ）國家之大綱不可過之候事、

一義統兄弟同好中之儀、爲義統別而被添心、何篇入魂不及申候事、

一屋敷普請等折々無油斷被申付肝要候、殊石火矢彌數ヲ被申付、玉藥等湛（貯カ）之、其心懸專一存候事、

一粮等之事、是又自然之時不被事闕樣才覺專要之事、

石火矢ノ數ヲ增加スベシ

被疑者ヲ徒ニ留置スベカラズ

近習召使ノ領地ニ於ケル公事ニ直ニ檢使ヲ遣スコトナク穿鑿スベシ

一近習其外不斷至堪忍之輩、不應其身公役、同衣裳等ニ至迄、分（憑）過（分カ）之馳走更不可然候、就中不退召仕辛勞之人へハ、先慈悲被加不便專一候、當國計之儀候之間、憐愍之外不可有之事、

一盛岡之儀、是又可被撰退事、

一撰人躰、心持等ヲ能々被見切、近邊へ可被召仕事肝要候、縱雖爲忠儀之筋目、於不覺悟之輩者、近邊へ可被召置事太不可然事、

一右之條々凡存知次第書付申候、近來老ニやれさる申事ゟ候へ共、餘ニ世上笑止ニ見及候之條、大形書注候、於無分別者愚老罷出、推參之儀曾而成申間敷候、此謂被相心得候て、義統へ可被申達候、以上、

天正十二年卯月三日　（大友休（宗）麟）（花押）

大友義統、長野勘七郎ヲシテ、豊後龍ケ鼻ニ在番セシム、

〔長野文書〕○豊後（東國東郡大内村）

龍ケ鼻城番之儀、至都甲山城入道申付候、被申談、勤番肝要候、聊不可有油斷

天正十二年四月三日

（田原）親家ノ○松野文書ニハ、府蘭ノ花押ナク、紙背ニ府蘭ノ繼目竝ニ花押各三個ヲ踏ス、兩文書共ニ寫ニカ、ル、

之儀候、猶田北十郎（宗鎮）可申候、恐々謹言、

卯月三日　義統（花押）

長野勘七郎殿

○義統、長野因幡守ノ龍ヶ鼻在番ノ功ヲ褒スルコト、正月二十三日補遺ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔長野文書〕○豐後

右馬助望之由、可存知候、恐々謹言、

九月廿一日　吉統（花押）

長野勘七郎殿

四日、庚戌是ヨリ先、織田信雄、德川家康ト共ニ、保田佐久間安政安次ヲ招ク、是日、之ニ書ヲ與ヘテ、紀伊根來衆ト事ヲ計ラシム、

〔寬政重修諸家譜〕十五百三十三　佐久間安政（或は安次、久右衞門、久六郎、弘治元年、御器會（席）に生る、保田佐介知宗ヶ養子となり、保田を稱せ、○略中十二年（天正）、織田信雄、豐臣太閤と矛楯するをよふるとき、東照宮の台命をうけたまはり、信雄乃令ヨ應して、舊好乃士卒をよひ根來寺の衆徒、雜賀の銳兵を率て、河內國國見山城ヲ楯おもり、太閤の軍將和泉國岸和田の城主中村式部少輔一氏と矢もゝ挑み戰ふ、おのゝとき東照宮より數度の軍功を賞せられて、御書を下さる、其乃ち太閤信雄と和睦あるによより、退て關東におもむき、弟勝之とゝもに北條氏政ヲつかふ、北條家沒落の後、太閤其武勇をにしみ、おもを誅せも、勝之とゝもも蒲生氏鄕ヨ屬せらる、おのゝとき本稱佐久間に復も、乃ち氏鄕ヲ先手とおり、陸奧國征伐の士ヲくわゝり軍功あり、○下略

〔佐久間軍記〕國見山戰場附長久手

天正十二年甲申、秀吉ヨリ信雄ヲ亡サントシ給フ、家康公ハ信雄へ御助成也、秀吉ト兩公ト尾州ニテ對陣有、保田久右衞門安政ハ、志津嶽合戰ノ後、根來ニ住居スル所、家康、信雄兩公ヨリ被仰下アイタ、譜代ノ家人等招、根來法師、紀州軍士ヲ催、河州國見山ニ城ヲ築楯籠、河州泉州ノ國侍ト挑戰、秀吉公聞之、中村孫平次一氏（式部少輔）ヲ泉州岸和田城へ被指下、三月ヨリ十月迄屢戰フ、家康、信雄兩公ヨリ保田久右衞門（後歸本名、號佐久間備前守）被下御書之趣、

對三郎兵衞書帖令披見候、仍其許之儀、才覺之由尤ニ候、此節候之條、彌無

（織田信雄）

天正十二年四月四日

秀吉青塚ニ出ヅ

天正十二年四月四日

由斷於抽忠儀者、可爲祝著候、將亦此表之儀、羽柴青塚迄打出候、幸之儀候條、早速可打果事歷然候、於様子者可心易候、就其身上之儀、何様ニモ可爲望次第候間、諸山令相談計策肝要候、猶此者口上申含候也、恐々謹言、

卯月四日　　信雄御判

保田久右衞門殿

○家康、紀伊名草郡ノ諸氏及ビ根來ノ僧徒ヲ招キ、和泉、河内ヲ襲ハシムルコト、三月二十日ノ條ニ見ユ、

織田信雄、尾張知多郡ノ地ヲ永田久琢ニ與ヘテ、軍忠ヲ勵マシム、

〔古文書〕永田記錄御用所本　○

信雄判物

領知方儀、以緒川領（尾張知多郡）内可令扶助候間、不散人相抱、可勵軍忠事專一候也、

卯月四日　　信雄書判

長田彌左衞門（永田久琢）殿

東照宮御判物

家康モ亦安堵ノ狀ヲ與フ

久琢家康ニ屬シ後信雄ニ仕フトノ說

此度令歸參候上、以緒川領之内三千百貫文、所宛行不可有相違條、全可令知行、者守此旨可勵軍忠之狀如件、

天正十二年　　家康　御判

卯月四日

長田彌左衞門殿

〔譜牒餘錄後編〕十七　御小性組　永田主殿

十番大草主膳正組永田主殿　○譜牒餘錄後編永田主殿書上同ジ、

養祖父永田彌左衞門法躰宗祐儀、織田信長ニ罷在候、然共權現様ヘ御出入申上、天正拾貳年卯月四日、三千百貫文御證文頂戴仕候、其以後織田常眞ヘ致奉公、常眞流勞（疑）之節、御當地ヘ罷下被召出、三千五百石拜領仕候、宗祐儀致隱居候ニ付、知行悉共ヘ分知仕、宗祐六百五拾石分ヶ取相果候、家督養父同姓三郎右衞門ニ被仰付、御朱印頂戴仕候、三郎右衞門義四男ニ御座候、秀忠様ヘ獻上物度々差上候付、御内書數通、右御證文（○天正十二年卯月四日附、長田彌左衞門宛、家康安堵狀ヲ指ス、コノ先祖書ノ前ニ揭グ、前揭古文書ニ同ジ、）幷御内書私家ニ代々所持仕候、以上、

天和四甲子年二月十五日　　永田主殿（花押）

大草主膳正殿

天正十二年四月四日

天正十二年四月四日　　水野備前守殿

〔寛政重修諸家譜〕十五　永田久琢（彌左衛門、致仕號宗祐、今改呈譜久勝ニ作ル、）母ハ某氏、織田
右府ニまミえ、天正十二年、長久手御陣のとき、ぬきんでゝ信雄ニ属をしかと、
四月四日、緒川領のうちふしして、三千百貫文ハ地を宛行ハるゝきむね、東照
宮より御判物をたまひ、信雄よりを直判の書をあさぬ、
○家康、尾張緒川先方衆及ビ同國常滑先方衆ノ歸屬ヲ賞シテ、其本領
ヲ安堵セシムルコト、三月十八日ノ條ニ見ユ、

織田信雄、舊ニ仍リテ、尾張熱田社領ヲ不入ト爲ス、

〔田島仲吉氏所藏文書〕○尾張
熱田宮祝進物神田幷敵身方預ケ物俵物、爲何闕所地候共、不可有異儀、殊門
外ハ入使之事、竹木所望、鄉質取立之事、上様（信長）御判形明鏡上ハ、如先々令免許
者也、

天正拾貳年　　信雄（花押）
卯月四日
熱田祝師殿

鄉質

家康モ亦安堵ヲ與フ

熱田宮祝遣（進）物之神田幷敵味方預ケ物俵物、爲何闕所之地候共、不可有異儀、
殊門外ハ使入之事、竹木所望、鄉質取立之事、上様御判形明鏡之上、此度信雄
ハ申上、如前々自今以後御免許不可有相違之狀如件、

天正十二年　　家康（花押）
卯月四日
熱田祝師殿

○信長、熱田社領ヲ不入ト爲スコト、弘治三年十一月二十七日ノ條ニ
見ユ、

常陸府中ノ大掾清幹、行方幹佐ノ軍功ヲ褒ス、

〔水府志料〕十二　行方郡玉造村大場惣助所藏
此度於芹澤（常陸行方郡）、其下知以敵打捕之由、大慶候、猶當方被相稼處、可爲祝著、委細塙
右近可申越候、恐々謹言、

四月四日　　清幹（大掾）（花押）
行方主馬（除作）正殿

天正十二年四月四日

佐竹義重芹澤國幹ヲ攻ム　幹佐國幹ヲ助ク　貝塚駿河守　徳川家康眞慶ノ戰功ヲ褒ス

〔行方玉造家譜〕幹佐　行方玉造主馬正、母芹澤氏女、居玉造村、○略中天正年中、太田城主佐竹常陸介源義重、發大兵攻芹澤城主芹澤兵部少輔平國幹、幹佐与同族行方城主下河邊常陸介、率玉造、西連(蓮カ)寺兩勢援之、討捕敵足輕大將綱與(脱アルカ)十郎某、殺傷許多、大顯武名、此時府中大椽(掾)清幹賜感狀、

〔附錄〕

〔水府志料〕十二行方郡玉造村大場惣助所藏

此度於芹澤、敵打動不及是非候、就之國司被下候(脱アラン)、猶可致忠進(注カ)候、謹言、

天正十二年

三月十九日　重(玉造重幹カ)

貝塚駿河守とのへ

是ヨリ先、信濃松本ノ小笠原貞慶、上杉景勝ノ屬城同國麻績、青柳ヲ攻ム、是日、復之ヲ攻ム、

〔小笠原系圖〕○地伯爵小笠原忠春氏所藏

去月廿八日、至麻績青柳被及行、二曲輪迄攻入隨一之者數輩被討取之由、注進喜悦候、定而落去不可有程候、彌無油斷可有御馳走事肝要候、恐々謹言、

卯月三日　御諱(家康カ)

小笠原右近太夫(貞慶)殿

〔書簡幷證文集〕○笠系大成附錄所收

去ル四日、信州之内麻績、青柳城二之廓迄責寄、能者數輩討取、注進之段神妙之至ニ候、彌可抽忠信者也、

四月十九日　家康(花押)

小笠原右近太夫とのへ

右小笠原忠雄君家藏、按天正十一年(二)癸未(甲申)四月十九日也、

就今度合戰、芳札令祝著候、先書委申候間不能重說候、此表近日任存分候、近々至長沼、羽柴可令敗北條、必今度可討留之候、可御心易候、次景勝可令蜂起候哉、不可有差切、乍去其表各致相談、無之由斷可被及行事肝要候、尚期後信候、恐々謹言、

卯月廿三日　家康(花押)

小笠原右近太夫殿

右小笠原長勝君家藏、按天正十二年甲申四月廿三日也、秀吉卿與織田信雄尾州小牧對陣之時、賜之書乎、右近大夫殿者貞慶君也、

〔寛永諸家系圖傳〕三十八　小笠原貞慶（従五位下、右近大夫、）　のゝち上杉景勝一戦をはしめんうため、近國の諸將をあさらひて、數度いくさをたゝかふといへども、貞慶勝利を得て、威を近國よふる、〇上略

〔寛政重修諸家譜〕百八十八　小笠原貞慶（小僧丸、喜三郎、右近大夫、）　十二年（天正）三月、同國（信濃）青柳、麻績等れ城砦を攻落すのよし、告たるまゝしかは、御感ありて、玄い〳〵御書被賜ふ、後尾張國小牧陣のときも、上杉景勝あをさへせしむる、信濃國麻績鄉に出張し、所々れ要害被守おこたる池田勝入信輝、森武藏守長一（可）等、ひきうふ三河國ゟ攻いれへきのきこえあれよより、をそるゝふこ從被告たてまつりしかは、御喜悦にれやしめさを、二十三日、御書を賜ふ、〇上略

〇貞慶青柳、日岐、麻績ヲ攻ムルコト、十年九月是月ノ條ニ、犬甘久知ニ麻績ヲ攻メンコトヲ報ズルコト、本年四月十九日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔信府統記〕十八　松本領古城記　筑摩郡古城地　麻績組　麻績山古城地（麻績町ヨリ亥ノ方二十一町）

貞慶青柳麻績ヲ攻落ス

麻績左衞門

九間、本城ノ平、（東西二十四間、南北十四間、）領主麻績左衞門、（帶刀ト云シモ此人ニヤ、又父ニヤ、）本姓服部氏、尾見甚右衞門ト云フ者甲州ヘ屬シテ、十騎ノ軍役タリ、麻績式部大夫、（尾見ト音同キ故誤リ記セルニヤ、甚右衞門ト改ケルカ、其義ハ詳ナラス、先祖何レノ頃ヨリ爰ニ在リシニヤ、一說ニ、服部ノ家ハ久シク此邊ヲ領セリ、其所由ハ仁熊岩殿寺、昔ハ寺領三百町餘アリシヲ、寛元四丙午年、服部伊賀守ト云フ者此領ヲ落シテ、永樂六十貫文付ルト云フコト、岩殿寺ノ傳ニ見ユ、）日落城ス、是小笠原貞慶ヘ從ハサルニ依テ攻沒セリト云々、

信州表少々仕置アリ

五日、（辛亥）上杉景勝、越後天神山ノ守將清水內藏助ニ、信濃ニ出馬セルヲ報ジ、鎭定ノ後ハ、越後下郡ニ出陣スベキヲ述ブ、

〔歷代古案〕六

急度申遣候、仍信州表少々有仕置、不圖令出馬候、彼口明隙直樣下郡可爲進發候、其內若敵相動候者、各ト合堅固之備肝要候、替儀候者、自陳中可申候、謹言、

四月五日　　景勝

清水內藏助殿

〇景勝、屋代秀正ノ背クヲ以テ、自ラ信濃ニ出ヅルコト、本月一日ノ條

ニ見ユ、

是ヨリ先、伊達政宗、相馬義胤ト陸奥金山ニ對陣ス、蘆名盛隆、其將須江弾正左衛門尉ヲ遣シテ、政宗ヲ援ク、是日、政宗、之ニ答フ、

〔歴代古案〕三

御來翰令披見、快然之至候、仍今度爲御助勢、須江彈正左衛門尉ニ鐵炮衆被相添被指越候、外聞實儀一段本望之由被申候、然者當表之儀、兼日向金山(伊北郡)搆地利、其上宇田(相馬郡)之庄ゟ物深々及搖、追日稼詰被申候、於此上茂猶々押詰(マヽ)及取出、可覃其扱之由被存候、於備者可御心安候、兼又自佐(佐竹義重)岩田(田村清顯)無事雖被及籌策候、輝宗堅固ニ被申拂候條、各使節中歸路候、樣躰之事ハ、彼方見聞之條不能細書候、珍布義も候者、御音信ニ可申承候、恐々謹言、

三月廿八日　　眞元(伊達)

蘆名(盛重)殿

御來翰令披見、快然之至候、仍今度須江彈正左衛門尉ニ鐵炮衆數多被差添、御屆ニ預候、外聞內儀喜悦不淺候、當表之儀宇田、金山之通路ゟ搆地利候上、猶以敵中押詰候、於備ハ可御心安候、樣躰之事ハ、彼方見聞之條不能細書候、恐々謹言、

卯月五日　　政宗(伊達)判

蘆名殿

○盛隆、政宗ニ書ヲ遣リテ、義胤トノ媾和ヲ賀スルコト、十一年七月十日ノ條ニ見ユ、

六日、壬子、織田信雄、美濃今尾城森寺跡職一圓ヲ吉村氏吉ニ與フ、

〔吉村文書〕二　○武藏

今尾城森寺跡職一圓付候訖、猶竭粉骨、令本意之上、重而可加恩賞者也、

卯月六日　　信雄(花押)

吉村又吉(氏吉)郎殿

○信雄、氏吉ノ今尾ノ市街ヲ燒ク功ヲ褒スルコト、三月二十八日ノ條ニ見ユ、

伊豆韮山ノ北條氏規、朝比奈泰勝ニ報ジテ、北條氏政、同氏直父子ガ救援ノ意アル旨ヲ、德川家康ニ通ゼシム、

鐵炮衆

宇田莊

佐竹義重等政宗ト義胤トノ間ヲ調停ス

伊達眞元

氏政氏直父子ノ中一人赴援スベシ

〔不破文書〕

態以飛脚申入候、仍御加勢之儀、先日河尻ニ具ニ承候、則氏政父子へ爲申聞候之處ニ、家康御存分次第、親子之内一人成共御立可被成之由候、上方御本意ニ候へハ、關東迄之覺ニ候之間、急度御加勢可被申存分ニ候、就其拙者儀當地韮山ニ被指置候間、此趣於御前ニ堅御請尤ニ候、委曲其地之模様御報待入候、恐々謹言、

四月六日　　美

（朝比奈泰勝）朝彌太參　　氏規（花押）

○氏政、氏直、尾張長久手ノ戰勝ヲ家康ニ賀スルコト、本月二十三日ノ條ニ見ユ、

大友義統、豊後柞原八幡宮大宮司賀來某ヲシテ、同社造營用材ヲ、同國由布院六所ニ於テ伐採セシム、

〔大友文書〕○豊後（竪紙）宮師□坊

大宮□（司）殿

數度如申候、當社御造營之事、無油斷可被相調候、殊本社材木取之事、於由布院六所採用專一候、奉行中被申談、早々以越山、霧雨前可被取調事肝要候、聊不可有緩之儀候、恐々謹言、

卯月六日　　義統」

大宮司殿

〔附錄〕

〔大友文書〕○豊後（竪紙）賀來社　　義統（花押）

大宮司殿

於由原八幡宮、臨時之祭禮被執行之由候、祝著候、彌可被抽精誠事肝要候、猶大津留主馬允可申候、恐々謹言、

二月廿八日　　義統（花押）

賀來社

大宮司殿

島津義久ノ將島津忠長、伊集院忠棟等、肥前高來ノ諸城ヲ降ス、是日、井

義久老臣ヲ召シテ有馬表肥後表ノ行動ヲ議ス
上井覺兼德淵ヨリ田船ス三角荒浦ニ著ス
荒浦ヲ發ス
忠棟ト共ニ三會ニ著ス
島原伊賀守忠棟兼ヲ訪フ
忠長松浦隆信ニ書狀ヲ遣ス
十二段帆ノ兵船

福、神代ヲ收ム、

〔上井覺兼日帳〕

十二日向

四月朔日、出仕如常、忠棟(伊集院)、親貞(本田)、拙者御用之由候間、御前へ參候、鎌刑(鎌田政廣)、白周(白俗重政)已上五人參候、有馬表、肥後表兩口之御行、又ゝ御存分共被仰聞候、又御申上共也、夫より御暇申、罷而從德之淵出船仕候、此晩三角之荒之浦へ著船候、鎌刑同泊也、拙者著候へとも、罷而鎌刑父子御酒被持、拙者船へ被載候て閑談共也、其後拙者御酒持て鎌刑船へ禮申候而、遙(遙カ)ニ雜談共也、

二日、忠棟之船相待候處ゟ、夜中ニ通之由候へハ、早旦荒之浦を出船候、島原ゟて忠棟へ追付申候、此沖ゟも地下人なと御酒共くれ候、夫ゟ三江(會)へ著船候、諸番衆祝言へ被出向、吾々著津目出由也、忠棟同心ニ麟臺(島左近)御宿へ參候、御振舞也、此間之地頭島原伊賀守と申者、圖書頭殿も御覽之間、忠棟、拙者見參申候へ共と新武(新納忠元)なと頻ゟ承候、麟臺御覽之上ハ、無是非由候而見參仕候、祝物共くれら(ゝ)候、忠棟御同前候、平戸之松浦肥州(鎮信)へ計策之書狀、八木越後守(吉信)へ認させられ候也、宿本餘り之あゝり城ゟて、人せき(キカ)ゟて候ハヽ、拙者船十二段帆ゟて、家之内之樣ニ候へハ、此夜ハ船中ニ明候、

柏原左近將監井福ヲ攻ム

河上忠智有馬鎭貴山田有信等覺兼ヲ訪フ

三日、神代、井福、森山なと船より各見償被成候、忠長、忠棟、拙者同船より見申候、小村〳〵ハ足輕舟漕付候て放火共なり、井福へ柏原左近將監小舟より遣候而、合戰なと申させ候、夫より城内より落合賴存由申候へハ、將監も陸ゟ下候て、兎角被申候事承申候條、又八木越後守相添尋遣候、無別儀可申入候、併先刻騷動に妻子等内端へ遣候衆參候、是を今日船より召寄候處ゟ、唯今之船數を見候而、中途より引歸候、各見させられゝ前に候間、手火矢なと射させられ、城近き在家なと放火させられ候て、先々今夜ハ船を漕退なされ候て、明日明後日之間、必々可申入由也、眞實ハ不知候へとも、彼城之樣子可持堪躰ゟも不見得候條、任其儀ニ、各番處々々へ歸帆候、此夜被成、拙者ハ船ゟ居候、夜半之鐘聲ハ、咄氣聲と替たれまてゟて社候へ、旅泊之躰對愁眠候、

四日、早朝平田新四郎殿、猿渡越中守(信光)殿なと被來船中候而閑談共也、平良麓へ宿候へハ船より下候、

五日、平田濃州(光宗)宿へ御禮申候、河上三州(忠智)、有馬鎭貴、山田新介(有信)殿なと拙宿へ禮被成、御酒ゟて雜談共也、神代、井福なとより、賴存候由を申候へ共、未然ニ

天正十二年四月六日

安富左兵衛佐

神代ノ人質

井福森山ヨリハ人質ヲ千々岩ニ出ス

井福神代ヲ請取ル

忠棟神代ヲ檢分ス

候間、山田新介殿、安富左兵衛佐内船より、可被聞果之由申候て遣候、柏原左近將監、江田安藝守、拙者前より右之衆へ相添遣候、各酉刻計歸帆也、明日ゟおらゐ神代より質人取替可申由定候也、山新介ゟ忠棟大野へ宿被成候へゟ、彼方へ直ゟ被罷出候、從有馬殿も神代之儀、又井福、森山よりゟ、昨日到千岩(ヶ脱下同ジ)表、質人指出候由承候也、

六日、早旦、柏原左近將監殿被來、夜前井福より、先日取合候使兩人來候、此方へ質人指上候すれ共、杜山へ申合事候へゟ、千岩へ質人指遣候、儘ゟ八木越後守、柏原先日之首尾ゟて候へゟ、早々請取被成、狼藉等之儀無之樣頼之由申來候也、然而此等之由、書狀を以、忠棟へ事問申候也、可然之由之返事候之條、八越、柏將、宮崎衆、拙者人數相添、井福之事請取遣候、神代も此日請取ニて候、川上三河守、比志島式部少輔殿へ請取也、此外西川、森山なと諸々(脱)之衆請取被成候也、平田濃州、穎娃(入脱)左馬之介殿、山田新介殿、拙宿ゟて閑談共也、

七日、忠棟、神代へ爲一見越著被成候、我々も其分候、明日於彼方各著合、御談合可有由相定候、拙者事、神代ゟも、然々之宿無之候間、又々平良へ罷歸候、

小代親泰(頼永)ニ降ル

島津氏種子島久時神代ニ著船ス

高來郡ハ南蠻宗流行ス

義久滿明寺(滿明寺)ヲ再興センコトス

北郷忠虎

吉利忠澄(忠虎)

伊集院久治等肥後ニ戰フ

神代駿河守

諫早表ノ計策

深江安德

島原三會等ニハ有

肥後表小代(頼永)殿御奉公被申候、就夫慈之衆ゟ、高瀬表まて被打入之由風說也、種子島(入脱)殿船數卅艘計ゟて、神代へ此日被著候、

八日、於神代御談合衆忠長、忠棟、光宗、新納武州、川上參州、穎娃殿、比志島殿、山田新介殿、鎌田出雲(政近)殿、拙者右之衆あり、此表御行事、當郡中南蠻宗ゟて候、温泉山坊(滿明寺)中無殘破滅候、然者御再興之御立願此度被成候、左樣之儀ゟ、御神領過分ゟ候ゟてゟ難成事候へゟ、此等之御談合也、(○義久、滿明寺ヲ再興センコトスルコト、三月二十四日ノ條ニモ見ユ、)伊佐早表計策之儀等出合候、宇土(名和顯孝)殿ゟ、使書幷酒肴預り候、其使物語候、肥後表ゟも、敵六十餘被討取、御勝利之由也、彼表へも、北郷彈正忠(忠虎)殿、吉利下總守(忠澄)殿、伊集院下野守(久治)殿なとをゝしめ、數多之軍兵被差登候也、此晩拙者ゟ、井福之御番ゟ相定ゟて越著候、地頭神代駿河守へ宿申候、船本まて指出候也、

九日、從早旦伊地知伯州(重秀)ヲ始、鹿兒島被來(脱アルカ)候て閑談也、此日川上參州、伊伯州まて候、有馬殿森山へ被居候ゟ、可被仰之由候、昨日御談合共候、然ゝ川上へ越著也、伊伯も呼申候而、昨日之出合物語申候趣、内端之番衆ゟ不入事候へゟ、深江、安德、島原、三江此等ゟゝ、有馬殿火之番等被仰付、又耕作

天正十二年四月六日

馬鎭貴ノ兵ヲ入レ其他ノ諸城ニハ薩摩ノ兵ヲ入ルル安德上野守

吉利忠澄肥後ニ戰フ

時分ゟ候間、下々へも然々被仰付候而肝要候、其外之諸城へハ、薩摩衆御番可申付之由也、又ハ安德上野守へ、安富左兵衛尉別而有馬殿爲、薩摩爲、御奉公入魂被仕之御禮共也、上原長州より使預候、先日島原へ籠城候大將衆數多の內、四人然々之者ゟて候、彼衆歸宅申候而、別而御奉公可申由候條、儀者質人召寄候へ、歸宅させられへき由被仰理候、然間一兩日中質人參候由到來也、

○家久、有馬鎭貴等、龍造寺隆信ト肥前島原ニ戰ヒテ之ヲ斬ルコト、三月二十四日ノ條ニ、忠棟、上井覺兼等、肥後五箇浦ヲ攻ムルコト、四月十日ノ條ニ見ユ、ナホコノ頃、吉利忠澄等、肥後ニ戰フコト、便宜左ニ合敍ス、

〔諸家由緒〕○吉利家由緒書覺書　一同（天正十二年）四月、肥後國一揆御退治、諸將同前ニ出張仕、御奉公仕候事、

七日、癸丑、羽柴秀吉、洛中洛外ニ於テ、京都米座ノ外ハ米ヲ、同錫座ノ外ハ錫ヲ賣ルヲ禁ズ、

〔天正十一年折紙跡書〕○淡路

米之座事、脇賣於猥者、從前々今以如有來可加成敗之狀如件

天正十二　四月七日　上下京　米之座中

洛中洛外錫事、先祖座人之外、少も令商賣族於在之者、從先規、今以如有來爲座中可成敗之狀如件、

天正十二　卯月七日　座中

〔附錄〕

〔天正十一年折紙跡書〕○淡路

地（つし）護軒分地子錢、年貢、所々散在事、令扶持候條、彌遂糺明、全可有領知候、恐々謹言、

天正十二年四月七日

天正十二

卯月五日

梅甚入御宿所

本願寺光壽、(教如)近江瀨田及ビ山城宇治ニ遊ブ、尋デ、京都ニ之ク、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕○城

一四月七日、上(知信)様、新門(光豊)様、瀨多、宇治通爲

御見物御忍ヒテ御他出、新門様ハ京都ヲ此次ニ御見物云々、

羽柴秀吉、尾張曼陀羅寺ヲシテ、其寺領ヲ安堵セシム、

〔尾張曼陀羅寺記錄〕

(尾張葉栗郡)前飛保地頭、領家代、鄉、祠堂、買得、寄進田地等之事、如先々任無捨地時旨、當寺領不可有相違狀如件、

天正十二年卯月七日　　筑前守秀吉判

曼陀羅寺役者中

○家康、曼陀羅寺ニ禁制ヲ下スコト、本月十一日ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、羽柴秀吉ノ將羽柴長秀、(秀長)筒井順慶等、織田信雄ノ屬城伊勢松島ヲ攻ム、守將瀧川雄利、城ヲ致シテ去ル、是日、秀吉、八重羽左衞門尉等

前飛保地頭領家代鄉

如春ト共ニ瀨田宇治ニ遊ブ

ヲシテ、之ヲ守ラシム、尋デ、長秀等、尾張ニ入ル、

〔榊原家文書〕

態申候、松賀嶋城相渡候者、八重左、富平右兩人留守儀可被申付候、被入念政道用心等堅可被申付候、不可有由斷候、津四郎左へ此方へ可被相越候、恐々謹言、

(別筆)「未年」

卯月七日　　筑前守

八重羽左衞門尉殿　　秀吉(花押)

富田平右衞門尉(知信)殿

津田四郎左衞門尉殿

富田知信

津田四郎左衞門尉

家康サヘ討果サバ宜シ

〔山本正之助氏所藏文書〕○山城

一勢州松ヶ嶋儀、三郎兵衞(瀧川雄利)助命、城可相渡由種々令懇望候條、家康さへ討果候へハ、彼等儀者不入儀候間、助首城を可請取由申遣候間、彼表人數貳万餘も五三日中ニ可令著陣候、○(上下略、四月八日附、惟住長秀宛、秀吉書狀、全文ハ本月八日ノ條ニ收ム、)

〔龜子文書〕○濃信

天正十二年四月七日

長秀順慶等尾張ニ著陣ス

殊ニ勢州松賀嶋令落居、彼面之人數我等弟始美濃守（羽柴長秀）筒井順慶悉此表へ著陣候、○上下略、卯月十一日附、木曾義昌宛、秀吉書狀、全文ハ本月九日ノ條ニ收ム、

〔松井家譜〕一 春光君御譜

一伊勢松歟嶋も落居候而、羽濃州、筒井其外此表著陣之由候事、○上下略、卯月十二日附、柴田紹安宛、松井康之書狀、全文ハ本月九日ノ條ニ收ム、

〔多聞院日記〕一 三十 三月廿二日、

蒲生賦秀羽柴秀勝

一勢州松カ嶋ノ城三郎兵衛五百計ニテ立籠テ、筒井、江州蒲生（賦秀）ヲツキ、小一（羽柴秀勝）（羽柴長秀）郎取詰云々、○上下略、根來ノ一揆、兵ヲ出スコト及ビ秀吉、兵ヲ佐保山邊ニ集中スルコトニカヽル、並ニ三月二十二日ノ條ニ收ム、

順慶二ノ丸ヲ占領ス

卯月四日、

一去三日ノカツセン、勢州松カ嶋城ノ二ノ丸筒井へ取了、手負數多在之云々、椿尾、矢田ノ辰巳討死、白土（菅田）、スカタ（ヤ）、便（次）慶、箸尾、萬歳衆手負云々、

雄利和ヲ懦ジテ退ス城

〔顯如上人貝塚御座所日記〕○山城 一十日（四月）、圓匠（西山内坂）尾州勢州之陣ヨリ、爲御使龍歸、勢州松ヶ嶋の城扱ニてノキ、和談云々、さ候へハ、勢州ハ一篇ニ筑州理運、尾州表迄過半其分也云々、

〔勢州軍記〕下 信雄兵亂

大和伊勢ノ衆松島ヲ攻ム

一松嶋城攻事　秀吉卒（帥）諸勢、欲攻松嶋城、先以舍弟羽柴美濃守秀長（長秀）給大和國、同以筒井順慶給伊賀國、○秀吉、大和ヲ長秀ニ、伊賀ヲ順慶ノ子定次ニ與フルコト、十三年九月三日ノ條ニ見ユ、爲松嶋之先懸、其外當國衆織田上野介信雄（以下同）、九鬼大隅守嘉隆、田丸中務少輔具直（良勝）幷岡本下野守、藤堂佐渡守高虎、津川三松、同謙入、神田、中村、佐々木以下其勢五萬餘也、同三月十五日、圍松嶋遠卷之、在々令放火、同十六日早天筒井順慶先乘入於侍町也、城中諸勢欲入城者、敵味方入亂、傳石壁入內也、織田信雄放火於侍町燒亡之、爰小倭侍井田勝藏、境節在森本飛驒守之宿所、欲入城中之處、佐々木半右衞門尉見付之、懸詞合鑓、遂討捕井田也、其外後武者少々討之、日置看此分勢、開門斬出、依之外搆之敵味方八方迯散也、此時猛火將移城、瀧川侍中津志摩介上殿守消之、故本丸不燒也、其後諸勢陣於堀際攻之、同十七日、十八日兩三日之間、日置大膳亮察其不意、開門斬出、與筒井順慶揉合挑戰、諸侍振手柄也、人々譽其武威云云、故攻衆不心易、送日數圍之、爰信雄之侍小崎新四郎、便瀧川家籠城、人非之、落書曰、

順慶侍町ニ乘入ル

城ノ中ニ入サル者ガ三アル蚤ト虱ト小崎新四郎

織田信包放火ス

其後寄手衆中佐々木半右衞門尉之陣所入夜伐而、佐々木被討畢、是去二

日置大膳ノ奮闘

天正十二年四月七日

落首

日朝、佐々木等推寄飯野郡下村神戸、執破下村仁助之館、此下村方澤家之與力也、憤之下村遂討佐々木云々、

本田親康船江ニ籠城ス

一本田逆心事　南方本田左京亮親康楯籠於船江城、依其聞中村仁右衛門尉之進(勧カ)、元來有二心、雖然兼子息千勝丸爲人質在松嶋、故本田欲盜出之、去三月十五日、密語高嶋次郎左衛門尉勝政也、高嶋忍內外之敵目、交諸勢入松嶋城、便日置方挑合戰、經六日之後、同廿日夜廻謀略逃虎口、遂盜出千勝丸、寄手謂落人、而千四五百人從三方追懸之、高嶋知案內、無事故落來云々、雖然本田未止籠城、遂滅亡畢、夫莫攻二心之敵、必獨亡也、若攻之則爲怨者也、

尼慶寶婿和ヲ斡旋ス

一松嶋和睦事　同四月下旬、松嶋城既至四十日攻之、爰在比丘尼號慶寶、此比丘尼者、星合左衛門尉之息女、或人妻也、十八之歲其夫病死矣、病中盡孝無量、死後悲其別而忽遂出家、立貞心不見兩夫、誠奇特之女也、故諸侍憐之養育彼禪尼也、慶寶憐瀧川、日置之籠城、或時來羽柴秀長之陣、述可扱之旨、秀長感之任其意、慶寶止鐵炮、致內外之便、遂事調畢、瀧川、日置等乘船渡尾州也、其外之者共互捕替人質、持弓鐵炮、瞻合引退也、岡本下野守請取松嶋

雄利等船ニテ尾張ニ退ク

岡本良勝城ヲ請取ル

雄利濱田城ニ籠ル

津川謙入同三松等松島ニ籠ル

木造左衛門佐松島ヲ攻ム

瀧川雄利松島ヲ請取ル

日置大膳亮加勢ニ加ハル

樂田表ノ合戰ノ風說

城、四十日計在番之、又瀧川下總守其後給北方濱田城、楯籠之、日置大膳亮依家康之所望、後奉德川家而早世云々、

〔木造記〕木造左衛門佐戸木籠城次第

一天正十二甲申年三月三日、津川玄蕃允をは、長島より生害せさ給ひ、松ケ嶋ノ城をは、瀧川下總守より給わりおをとも、玄蕃允ら殘黨よ、津川鎌(謙カ)入、武兵衛(衛カ)上松、津川彌太郎、神田清(ヤ)藤右衛門、中林仁右衛門、佐々木半右衛門、富田平左衛門(右)なと言をの楯籠、城を中々渡も間敷躰に見へおる程よ、木造左衛門佐具康松ケ嶋わ押寄せ攻戰ひ、津川彌太郎以下百餘人討捕引退々り、其後瀧川下總守伊賀よ(ヤ)來(リ)、松ケ嶋を請取、殿主を堅固しらは、日置大膳亮加勢して、門矢倉をらゝめおり、此節田丸中務少輔、九鬼大隅守、澤源六郎、秋山右近大夫、芳野宮內少輔、織田上野介殿等と、秀吉公之味方なり、木造左衛門佐幷小倭衆、船江之本田左京進、神戸與五郎、佐久間甚九郎、國符(府)次郎四郎、天野周防守、長島之土方河內守、蒜野等ハ信雄卿之味方よて、右持分之城々よ楯籠々る、秀吉公松ケ島を攻可給とて、打立給ふ折節、家康公と羽柴孫七郎秀次公と額(樂田)殿表よて合戰之由聞へしらは、

吉公まり尾州に發向し、松島にゐ羽柴美濃守長秀、筒井順慶、織田上野介、九鬼大隅守、田丸中務少輔、岡本下(野)總守等被指遣、此人々松ヶ島に押寄攻戰ゐり、城中よも其名得さるをのとも籠、中こ(マヽ)は防戰、日置大膳ゐ三度迄門攻ゐらき切て出、敵數多うち捕々り、かゝりゐるところゐ、慶法〇前掲勢州軍記ニハ、法ヲと云比丘尼和睦之扱し、城を渡し、四月下旬こ、瀧川下總守を日置大膳亮も尾州ゐ退しなり、此尼ゐ國司之侍星合左衞門尉と云もの う娘よてゐるしゐ、十六歳よて夫こ別を、貞女之道を守、尼よなり居ゐり しゆへ、人々表(マヽカ)こおもゐし成、此度籠城之難儀を扱ゐるを、又貞心之なす所にやとかんしゐへ、其後瀧川下總守ゐ四日市西城こ籠りしとなり、天正十二甲申年、松ヶ島をは、秀吉公ゐ蒲生飛驒守こ給ゐり、同十六年迄居城し、後松阪(坂)ゐ移りたゐふなを、

右ゐ、永錄(祿)十二巳ゐ延寶二申年戸木軍ゐ延寶三卯迄百七歳成、天正十九辛ゐ成、

〔寬永諸家系圖傳〕百八　藤堂高虎　與左衞門尉、佐渡守、

不和成しゆへ、家臣羽柴下總守雄利勢州松賀島れ城ゐ籠こを(マヽ)、ときよ秀長(長秀)こを攻、高虎先陣となりて、一れ木戸ゐやふる、敵ゐりそきて、二の木戸ゐひて、ゐもらく相さゝゐひ、高虎甲首一級ゐ得さり、秀長、高虎ゐ軍功衆人ゐこえさ(マヽ)事ゐ感し、ゐつゐら備前國宗れ刀ゐ ふ、

〔高山公實錄〕二　同十二年(天正)甲申年(公ゐ誤)二十九、三月、是より先つかさ、羽柴殿、織田信雄と不和となり、信雄の家臣羽柴下總守雄利謹按、雄利初ハ源淨院の住僧、後ふ瀧川三郎兵衞雄親、又羽柴下總守雄利、事蹟北畠物語、勢州兵亂記諸書み詳なり、伊勢國松ゐ島ふたてゐもゐ、公、秀長(長秀)朝臣の先鋒とゐりて、城門を破て、一番に乘入、敵退てニの木戸を閉んとに、公進てとけしく戰ひ、みつから甲首一級を獲給ふ、秀長朝臣大ふ其功をめてゝ、備前國宗の刀を賜ふ、

年譜　天正十二年、公二十二歳、原註、秀吉、織田信雄ト尾州小牧ニ對陣ス、時ニ信雄ノ家臣羽柴下總守雄利、勢州松カ島ノ城ヲ守ル、秀長コレヲ攻、公城門ヲ破テ、一番ニ乘入、敵退テ二ノ門ヲ閉ントス、公進テハケミ戰ヒ、甲士ノ首ヲ取、秀長大ニ悅ヒ、公ノ戰功諸士ノ準フヘキナシト云テ、指料ノ備前國宗ノ刀ヲヌイテ賜フ、寬永系譜行狀、傳記、家譜略同、〇中略、勢州兵亂記ニ異事ナシ、據リテ、松島攻圍ノコトヲ揭ゲ、前揭勢州軍記

天正十二年四月七日

天正十二年四月七日

服部正成松島ニ籠ス

服部竹助家乗　伊勢松ヶ島陣畫夜御責被成候へハ、城中ヨ居申候服部半藏（正成）、瀧川三郎兵衛方より、高山様へ種々御斷申候ヨ付、曖ヨ相成申候、此節も御供仕候、

謹按、兵亂記ヨ、松ヶ島攻衆羽柴美濃守秀長以下凡四十日許攻之とあり て、四月下旬ヨ、慶法尼（○前掲勢州軍記ニ寅ヲ作ル、法ヲ寅ニ作ル、）の扱ヨて城を渡ス事をゑるせり、編年集成ヨも、松ヶ島の城攻三月十五日より始る由ハあり、ゑのゐヨ宗國史ヨ正月に繫るゐ訛也り、

三雲成持雄利ト共ニ松島ニ籠ル

〔藤堂文書〕高山様御幼年之時よヲ、今の御身上御立身之夏一勢劦松ヶ嶋の陣相働、其以後大納言（羽柴長秀）様大和紀伊伊賀御拜領、三千石御加增ニ而、都合一萬石被仰付候夏、

寛永十八年丑十二月十二日村瀨市兵衛書付之扣覺

一天正十二年、伊勢松ヶ嵜（嶋）城攻、先登而破一ノ木戸、得冑首、賜備前國宗刀、年廿九、

〔寛永諸家系圖傳〕九十二

大權現幷ヨ織田信雄ニ豐臣秀吉と尾州小牧ヲ對陣ハりしとき、成持、信雄

三雲成持（豐左衛門、のち新左衛門とゐらさむ、）天正十二年、東照

伊賀者松島ニ籠城ス

乃命ヨよヲて、代々あひ去ゑゐふとこ依乃勇士百餘人を率て、瀧川三郎兵衛とともヨ、勢州松賀嶋乃城ヲ楯籠、ゐちまヨ瀧川とおゐしく濱田の城ヨ今度於抽忠儀者、江州本知之分如前々可宛行之條、可盡戰功事專一候、恐々謹言、

卯月十三日　　信雄判

三雲新左衛門尉殿

其方身上之儀、江州本知如前々申付候條、彌無油斷諸方令調略、忠節肝要候者也、仍如件、

天正十二年卯月廿五日　　家康御判

三雲新左衛門尉殿

〔譜牒餘錄後編〕三十四　安藤彦四郎

○寛政重修諸家譜三雲成持譜コノ次ニ、乃ち和議なりてその事をとけゐ、これヨより蒲生飛驒守氏郷ろもとヨ寓居ゐトアリ、

月十六日より同廿九日迄、羽柴下總守殿、日能（熊）大膳殿、伊賀之者籠城仕候、寄庶士以下之下

天正十二年甲申年、伊勢松ヶ島ニ、三

天正十二年四月七日

清洲ニ在陣ス

戰死ノ伊賀者

天正十二年四月七日

手ニハ筒井順慶、織田上野、其外數多被寄候、其時伊賀之者共討死數多仕候、松ケ島和談ニ罷越(カ)、尾張清洲ニ在陣仕候、其刻之仕合共、右之家中衆寄手之衆具ニ被存候事、

〔譜牒餘錄後編〕(三十四 庶士以下之下 村上武大夫)

一天正十二甲申年、伊勢松ヶ嶋ニ三月中、羽柴下總守、日好(吉)大膳、服部等之伊賀者共籠城仕候、寄手筒井順慶、織田上野、數多被寄候、其時節伊賀之者共打死仕相働申候、終ニ和睦罷成、其後尾州清洲ニ在陣仕候事、

〔伊賀者由緒〕

一天正十二甲申年、伊勢松ケ島ニ、三月十六日ゟ同廿九日迄、羽柴下總殿、日除(吉)大膳殿、伊賀者籠城仕候、寄手ニハ筒井順慶、織田上野、其外數多寄候、其時伊賀者討死仕候ものハ、乙兵内、新條嘉助、塚本土左衛門、山中鹿右衛門、湖田(明カ)助九郎、増田外記、押田淺右衛門、杉内藤内、氷室久助、原惣左衛門、杉谷織之助、勝田文太郎、高非三九郎、服部傳五右衛門、同筑後、柘植五平次、淺場半内、天野市郎兵衛、重本數右衛門、中村八之丞、野呂和助、西尾志摩、不破新六、奥山兵庫、太田源藏、寺田周藏、矢頭友右衛門、同丹右衛門、飯田彦四郎、遠藤武太夫、藤田國右衛門、宍上主馬、服部新九郎、同孫平次、宮田

服部正成伊賀者ト松島ニ籠ル

秀吉ニ從屬ノ伊勢信雄ニ從屬ノ伊勢侍

福次郎、吉田權九郎、豊島與市、渡邊泉州、竹田喜齋、渡邊利仙、永持德藏、木原又四郎、粕谷右京、町井庄太夫、福森定齋、服部内藏、已上四拾六人討死仕候、松ケ島和談ニ罷成、尾張清洲ニ在陣仕候、〇下略、家康、蟹江ヲ攻ムルコトニカヽル、

御陣御供書付

一天正十二甲申年、伊勢松ケ嶋三月中迄羽柴下總守、日吉(吉)大膳、服部仲、服部半藏、伊賀者陣を取罷在候得共、寄手筒井順慶、織田上野數多被寄候、其時節伊賀之者共大勢討死仕候、終ニ和睦ニ罷成候、其後尾劦清洲ゟ在陣仕候、

〇信雄、松島ヲ雄利ニ與フルコト、三月六日ノ條ニ、秀吉、田丸直息ニ松島攻圍ノ策ヲ授クルコト、三月十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔豊臣秀吉譜〕一勢州侍織田上野介初、田丸中務、九鬼大隅(澤カ)源六、秋山右近、芳野宮内等屬秀吉、信雄味方ハ、南方ニハ木造左衛門佐、小山戸、舟口(江)前田等、北方ニハ神戸與五郎、佐久間甚九郎、國府二郎四郎、天野佐左衛門、土方彦三郎等各籠地(吸カ)也、秀吉卿被攻松島、家康尾州被出合力、依之秀吉發向尾州

表、就夫松島御次丸、羽柴美濃守、筒井順慶、織田上野、九鬼大隅等凡四十日攻之、其内日置大炊（聴ニ同ジ）三度開門切出合戦、

一〇中略四月下旬、松島、慶法ハ、〇前掲勢州軍記ニハ、法ヲ寶ニ作ル、ト云比丘尼入拵（拔カ）、開退、瀧川三郎兵衛、日置大炊歸尾州、

〔氏郷記〕

上　信雄秀吉不快事　付松島軍事

〇上略、信雄、津川玄蕃允等ヲ斬ルコトニカ、ル、三月六日ノ條ニ收ム、伊勢國ハ大方信雄ノ國ナリケレハ、國中ノ城々ヨリ人質ヲ捕ラレケリ、近邊船江ニハ、本田左京亮千騎計ニテ籠城セラレケリ、戸木ニハ木造左衛門佐是モ千騎計ニテ籠城セラレケリ、戸木ノ木造ヲハ無二頼モシウ覺エシカ共、船江ノ本田ヲハ、無覺束ソ被思ケル、其故ニ（ハカ）左京亮ノ婿中村仁右衛門ハ秀吉ノ御方ニテ、本田ニモ謀叛ノ進（逆）メ有シトソ聞エシ、角テ秀吉ヨリ松島ヘ討手ニ差向ラレシ諸大名、數萬ノ軍兵ヲ（舁カ）雲霞ノ如クタナヒキ、三月十五日、松嶋ヘ推寄、二重三重ニ取巻ケリ、明日ハ早天ヨリ攻ラルヘシト聞エシカハ、船江ノ城主本田左京亮子息千勝丸トテ、生年十四歳ナルヲ松ケ嶋ヘ人質ニ取レテ、内々謀叛ノ心ハアリケレトモ、誰トテモ恩愛ノ別レノ悲シサハ去事ナレハ、流石ニ思ヒ捨ラレス、祖父如入夫婦ノ人々、左京亮ハ申ニ不及、家子郎等賤男賤女ニ至ルマテ、コハ情ナシ、只一人在ス若君ノ、明日ハ、武キ武士モ、皆鎧ノ袖ヲソ濡シケル、爰ニ高島次郎左衛門ト云兵アリ、本田父子彼ヲ呼テ、汝ヨリ外ニ可頼者ナシ、如何ニモシテ、松島ヘ忍入リ、千勝ヲ盗ミ出シテ參レ、若盗ミ得スンハ、人手ニ掛ンヨリ、御邊カ手ニ掛テ、千勝ヲ差殺シ、其死骸ヲ枕ニシテ、腹カキ切テ果ヨ、此度ノ命ヲ我ニ得サセヨカシト被申ケレハ、高島畏テ承リ、命ヲ限リニ才覺仕テコソ見候ハメ、但七日カ内ニ歸參リ候ハスハ、定テ死ツラント思召候ヘトテ、我屋ニ歸リ、妻子兄弟ニ最後ノ暇ヲ乞、互ニ盃ヲ取カハシテ、武具取テ著シ、頼ミ切タル下人ヲ只一人召具シテ出ケレハ、舍弟高島椋右衛門、同孫兵衛、鎧ノ袖ヲ引止メ、是程ノ御大夏有ヘシ共覺エス、敵已ニ十萬餘騎ニテ取巻テ候テ、城中ニモ究竟ノ兵三千餘騎ハ候ヘシ、御邊ノ御爲ニハ、城中ノ勢モ城外ノ兵モ、皆敵ニテ候ヘハ、定テ討死シ給フヘシ、日比ヨリ某等モ、最後ノ御供トコソ存寄テ候ニ、口惜ウモ召連給ハヌ者カナト云ケレハ、高嶋聞テ、最其志ハ頼モシケレトモ、本田殿、汝ハ行ン者ヨトコソ宣ヒシニ、兄弟三人行テハ、縦本望ヲ遂

本田親康船江ニ籠ル　木造左衛門佐戸木ニ籠ル　秀吉ノ兵ヲ松島ヘ攻ル　親康息千勝丸ヲ松島ニ質ト　高島次郎左衛門ニ千勝丸ノ命ヲ奪取ヲ命ズ

次郎左衛門城中ニ入ル

ルトモ其甲斐ナシ、殊ニ大勢ハ忍ヒ得ヌ事モコソアレ、若我討死セシト聞ハ、妻子ヲ守立ンコソ、誠ノ忠孝ナルヘケレト止メシカハ、弟共力不及止リケリ、高嶋則打出、寄手ノ勢ニ紛テ、此彼ニイテ日ヲ待暮シ、忍ヨリ堀際マテ寄ケルカ、今日家ヲ出ルヨリ、命ヲ捨ントソ覺悟シケレハ、思切テ忍ヨリ、難ナク塀ヲ乘コエテ、主從二人城中ヘ入シカトモ、天運ヤ強カリケン、見過ムル者モナカリケリ、千勝ハ何クニ在スト彼方此方ヲ尋ヌルニ、有長屋ノ中座敷シツラヒテ、國中ノ人質共ヲ追籠、緊ウ番衆ヲモ付テ置レケル、中々盜ミ得ツヘウモナカリケリ、千勝ニ尋合テ、我ヲモ付ヲカレントテ、是マテ參テ候ト申ケレハ、千勝モ涙クマレケリ、付置レタル乳人ニハ和泉局、小姓ニハ中西與次郎丸ト云童、共ニ涙ニ咽ヒケリ、其後高島、日置大膳亮ノ手ヘ參テ申ケルハ、某モ千勝ニ付置候ハントテ、先日是ヘ罷越候、明日ノ御合戰ニハ、御手ヘコソ加リ候ハメト申ケレハ、日置、高島カ大儀ニ是マテ被參タリヌ、神妙ナル被申分カナ、急テ此手ヘ被參ヨト被申ケレハ、大膳亮ノ手ニ加テ、門矢倉ヲソ堅メケル、本田左京亮ト日置大膳亮トハ相婿ナレハ、日來ヨリ知レタル故ナリケリ、其比於尾張國（樂ハ四ノ誤ニ同ジ）額殿表ニ、家康ト秀吉ノ御猶子羽柴孫

三月十六日長岡藤孝浦生賦秀等松島（樂ヨリ樂田ニ向フ）

七郎秀次ト合戰ニ及ヒ、秀次難儀ノ由聞エケレハ、秀吉モ御出陣アル、松カ島寄手ノ大名ノ内モ、先ツ急ヲ救ハンカ爲メ、長岡兵部大輔藤孝、蒲生飛驒守氏郷（賦カ）、其外大勢、同十六日、松島ヲ立テ、額殿表ヘ發向セラレケリ、松カ島ニ殘留テ攻ラレケル人々ニハ、先ツ秀吉ノ御弟羽柴美濃守秀長（長秀）、筒井順慶ヲ大將トシテ、其外ハ當國ノ大名秀吉ノ味方ニ參ラレタル織田上野介殿、九鬼右馬允、田丸中務少輔、關右兵衛尉、都合其勢四萬餘騎トソ聞エシ、同十六日ノ朝ノ間ニ、寄手ノ大將（勢カ）黑煙ヲ立テ、松カ島ノ四方ヨリ攻入、織田上野介殿ノ手ヨリ、早侍町ヘ火ヲカケテ、雲井遙ニ燒上ル、船江ト松島トハ、其間十八町ナレハ、此分勢ヲ見テ、アハヤ千勝モ高島モ死ツラントテ、人々歎キ合レケリ、松カ島城中ノ兵トモ、一騎當千ノ名ヲ兼テ顯シタル者共ナレハ、少モ不騷防戰ヒケル間、本丸ヘハ火モ付ス、弓鐵炮ヲ差詰引詰射カケ打カケシカハ、數萬ノ寄手堀際マテ押寄、爰ヲ先途ト攻戰フ、爰ニ日置大膳亮ノ持レシ門矢倉ノ寄手ハ、天下ニ無陰大剛ノ人ナリシ大和國守護筒井順慶ニテアリシニ、大膳亮門ヲ推開キ、斬テ出、敵ノ中ヘ駈入、蛛手十文字ニ斬テ廻リケレハ、寄手ノ大勢怺ヘ兼、四方ヘハツトソ引タリケル、誠ニ異國ノ張良

三月十九日秀吉家康ト長久手ニ合戦ストノ説

蒲生堅秀歿ス

カ義、樊會(噲)カ勇モ是ニハ爭テ勝ルヘキ、大膳亮ノ軍兵共ハ云ニ及ハス、小姓草履取ニ至ルマテ、手柄ヲセヌハナカリケリ、去トモ寄手猛勢ナレハ、是ヲ支トモセス、堀際ニ陣取テ攻ケレハ、イツ可果軍トモ見エサリケリ、去程ニ、尾張國ニハ、同十九日、長久手表ニテ、秀吉家康合戦ニ及シカ、味方ノ軍打負ケ、秀吉ノ頼ミ思召タル大名池田紀伊入道勝入、子息勝九郎、同婿森武藏守長一(可)ナト云一人當千ノ人々マテモ討死セラレケリ、去共秀吉其外一味ノ諸大名ハ、恙ナク引取給テケリ、同十日、江刕日野ニテハ、蒲生左兵衛大夫賢(堅)秀入道、年五十一ニテ果ラレケリ、〇堅秀歿スルコト、本月十七日ノ條ニ見ユ、天下騒動ノ折柄ナレハ、隠サレシトソ聞エシ、亦其比蒲生飛驒守氏郷江州ノ内ニテ、加增ノ地ヲ給ハラレシトカヤ、扨モ松ケ島ノ城ヘ、僞テ楯籠シ本田カ侍高島次郎左衛門ハ、日置大膳亮カ手ニ加テ、數度ノ戰ニ分捕高名ヲ極メ、隙ヲ伺ヒ、千勝ヲ盗出サントセシカトモ、内ニハ三千ノ士卒目ヲ放タス、外ニハ四萬ノ軍兵雲霞ノ如ク堀際マテ攻寄タリ、高島已ニ六日マテ城中ニアリシカトモ、如何ニ叶フヘシトモ見エサリケリ、究竟ノ兵計ニテモ、カヤウノ時ハ大夏ソカシ、增シテ幼キ人或ハ女房ナレハ、案シ煩テ立タリシカ、イヤ〳〵七日

次郎左衛門千勝丸ヲ盗ミ出ス

ノ日限モ明日計ナリ、今宵盗損セハ叶フヘカラスト思切テ、此上ハツヽミテモ詮ナシ、若シ討レタル時ノ證據ニモ成給ハンスレハ、押留ラレンハ知ラストモ、此人ハ左ハアラシ者ヲト思ヒ、密ニ大膳亮ニ近付、有ノマヽニ申テ、今宵盗ミ出シ候、若討死仕候ハヽ、加様ニ仕タル躰ヲ御覽シ置レ、本田ニ被仰聞テタヒ候ヘト申ケレハ、日置聞テ、扨モ御邊ハ大事ノ使ニ來ル者カナ、我ハ苦シカラストモ、内外ノ人ノ目ヲ能忍ハレヨトソ被申ケル、頓テ同廿日ノ夜、千勝其外ノ者共ヲ心ヲ合セ引具シテ出、一人宛塀ヲ乘セケルニ、高島ハ太刀抜持テ後ニ引ヘ、誰ト過ムル者アラハ、差違ントソ待カケタリ、四五人ノ者共皆塀ヲ蹈ケレハ、高島モ難ナク乘蹈ヘ、下人ヲ乳人女房ニ付、我身ハ千勝丸ニ立副、太刀提テ、退キ不得ハ、千勝ヲ差殺シ討死セント思テ、堀際迄出ケレトモ、トカメアヤシム人モナシ、爰ニ高島カ弟高島椋右衛門、同孫兵衛ハ、主從四人、兄ノ行衛ノ覺束ナサニ、去十六日ヨリ夜々忍テ、寄手ノ勢ニ紛レ堀際迄來リ尋ケルニ出合タリ、弟共是ヲ見知テ、コハ如何ニ嬉シヤトテ立寄シニ、高島大キニ力ヲ得、主從十人計ニ成テ、千勝ヲ中ニ立、道ヲサシテ出ケルニ、敵如何シテカハ見付ケン、城ヨリ落人コソアレ、餘スナ漏ス

親康秀吉ニモ屬セズ

親康ノ家絕ユ

木崎新四郎

天正十二年四月七日

ナト聲々ニ呼リシカハ、我討取ント進程ニ、千五百餘騎カ三手ニ分チ、鞭ニ鐙ヲ合テ追カケケリ、其音大山ナントノ崩レカヽルニ異ナラス、去共高島難ナク逃延テ、十人計ノ者トモ、鰐ノ口ヲ逃レ、恙ナフ船江ニ著シカハ、本田父子喜ヒアハレケル事斜ナラス、殊ニハ高島カ手柄ノ程ヲソ被感ケル、角テ本田左京亮入質ヲハ取返シケレトモ、未籠城シテ、流石秀吉ヘ味方モセラレス、赤松ケ島ヘハ力ヲコソ勠スヘキニ、剩加樣ノ不義アルニ依テ、信雄、秀吉共ニ惡フ思召ケレハ、磯ニモ波ニモ不付シテ、遂ニ身上果ケルトソ聞エシ、本田次郎親經カ嫡孫ニテ、代々武勇ノ家ナリシカ、斯ル世ニシ合テ絕ケルコソ悲シケレ、去程ニ松ケ島籠城ノ人々、同四月ノ下旬マテ攻ラレシカトモ、張良ヲ欺ク瀧川、日置ナレハ、是ヲ攴トモセス、其後モ日置大膳亮二度マテ門ヲ開テ切テ出、毎度ニ敵ヲ追拂ヒ、首數多討取シトカヤ、此三度ノ戰ニ恐テ、寄手ノ人々モ、此手ヲ數多堅メケリ、亦伊勢國住人木崎新四郎トテ籠リケルカ、ハカ〳〵シフ出テ軍ヲモセサレハ、何云ケル者、瀧川ニ伴ヒテ籠者ノ仕ワサトハ不知、城中ニ札ヲ立テ、

城ノ中ニイラサル者カ三ツアルノミト虱ト木崎新四郎

尼慶寶蓮和ヲ斡旋ス

雄利神戸ニ歸ル

日數漸々四十日ニソ及ケル、其比伊勢國ニ慶法〇前揭勢州軍記ニハ、法ヲ寶ニ作ル、ト云比丘尼アリ、是ハ岸江ト言ケル人ノ娘、去人ノ妻ニテアリシカ、十六ノ歳夫ニ別レテ、悲ミノアマリニ、我此後亦誰ヲカ見モシ見エントテ、長ケト等キ黑髮ヲ切リ、苔メル花ノ姿ニテ、乍チ出家ヲ遂ケ、世ヲ厭ヒ、貞女ノ心ヲヤフラシト、イトヤサシカリシ女性ナリ、サレハ若年ノ昔ヨリ、老タル今ニ至ルマテ、人々其志ヲ感シ、諸大名皆此尼公ヲハコクマレケリ、然ニ瀧川、日置永々ノ籠城ヲ慶法痛シフ思ケレハ、或時美濃守秀長ノ前ニ來リ、城中ニ被居候瀧川殿、日置殿ハ我等ノ旦那ニテ候カ、永々ノ籠城痛シフ御座シ候、我等扱テ見候ヘキカト申ケレハ、各扨モヤサシウ申タル尼公カナ、尤可然ト被申ケレハ、頓テ城中ヘ參リ、此由申ケル、瀧川、日置合點セラレサリシヲ、慶法色々ニソ諫メ申ケル、兩人サラハ門前ナル堀迄迎船ヲ被遣候ヘ、左アラハ城ヲ渡シ申サント申セシ、慶法承テ、秀長ニ其由申ケレバ、無異儀船ヲ被遣ケリ、瀧川ハ神戸ヘ、日置ハ蒲田ヘ、服部半藏ハ家康ヘ歸リケリ、角テ秀吉ヨリ松カ島ノ城請取トシテ、岡本下野守ヲ被遣ケレハ、馳來請取テ番ヲサセテソ守リケル、

天正十二年四月七日

蒲生賦秀等松島ヲ攻ム

秀吉賦秀等ヲ尾張ニ招ク

〔武德編年集成〕二十七

三月十五日、秀吉方蒲生氏郷（賦秀）、織田信兼、筒井定次（每下同ジ）、九鬼大隅守嘉隆、田丸中務少輔直昌（息）、關安藝守入道萬鐵齋父子、岡本下野守宗（良憲）、武衞治部大輔義銀入道三松軒、津川右衞門佐入道謙入カ一族郎從等、多勢勢州松カ島ノ城ニ向フ、當城ハ勢陽ノ要地ニメ、信雄初テ是ヲ築カル、壘隍嚴整ニシテ、城將ハ大剛ノ瀧川三郎兵衞、且援將トメ日置大膳亮、神君ノ隊長服部半藏正成等ノ逞兵三千人ヲ籠置カル、殊ニ國士等カ質子ヲ本丸ニ衞護ス、然ルニ船江ノ城主本田左京亮親康（次郎親常後胤）カ愛子千勝丸（時ニ十四歲）モ當城ニ在ケルカ、左京亮ハ信雄ヲ叛テ、內々寄手ニ志ヲ通スル故甚嘆激シ、其臣高島次郎右衞門ヲ松カ島ニ遣ハシ、是ヲ盜ミ出スヘキ計策ニ及フ、次郎右衞門稻麻竹葦ノ如ク打圍ム松カ島ノ城邊ニ忍寄テ、千辛萬苦メ郭內ニ入、本田左京ト日置大膳ハ相婿故、千勝丸カ最期ヲ見屆ヘキ爲ニ忍入旨日置ニ斷ハリテ、彼隊ニ屬シ、持口ノ衞兵ニ加ハリ、虛ヲ量テ千勝丸ヲ携ヘ奔ント計ル、

十六日、○中略秀吉方ニモ、嚮ニ神君清洲ニ著御ノ告有シカハ、松カ島ノ寄手蒲生氏鄕、長谷川秀一、加藤作內光泰ヲ尾州ニ招カルト雖、其餘尙數萬ノ多

勢タル故、松島ヘ押寄、筒井勢先登メ市鄽ヲ放火シ、諸士ノ宅ヲ追捕シ、外郭ニ有テ、三ノ丸ニ引取サル士卒少々討捕所、援將日置大膳還兵ヲ率テ突衝シ、惣郭ノ中ヘ乘入シ敵ヲ追散ス事、風ニ草ノ偃カ如シ、織田信兼カ放火ノ餘烟殿守ニ移ラントセシヲ、城將瀧川三郎兵衞カ士中津志摩介殿守ニ登リ是ヲ消止ルト云、其後諸勢堀際ニ仕寄、竹把ヲ附ル、

十七日、松カ島城ヨリ、日置大膳亮軍ヲ不意ニ發メ、筒井カ陳ヲ攻擊、從兵大ニ驍戰メ功ヲ顯ハス、

十八日、日置大膳亮又突テ出、勇ヲ振フ、當城內ニハ、神君ノ銳士服部鬼半藏正成、伊賀ノ士ヲ率テ楯籠シカ、同ク城外ニ發シ驍戰ス、

〔武德編年集成〕二十八

三月廿日、松カ島城中ニ於テ、本田左京亮郎從高島次郎左衞門、此間日置大膳亮カ手ニ屬シ、功ヲ顯ハシ、主人千勝丸ヲ携ヘ出ント欲スレ𪜈、城兵皆渠ニ心ヲ放タス、城外ハ寄手ノ猛勢稻麻竹葦ノ如打圍ム故、今日ニ至素志ヲ果サス、既ニ萬死ニ決シ、日置ニ心底ヲ私語ケレハ、大膳亮モ渠カ深忠ヲ感激シ、漸ク是ヲ許ス、高島大ニ悅ヒ、千勝丸竝ニ乳母和泉、小兒姓中西與次郎、幼童六郎丸ヲ携ヘ、壘ヲ越テ出ル所ニ、此程六箇日

四月二十八日松島開城ストノ說

ノ間、高島カ弟椋左衞門、孫兵衞從者二人ト𠮟ニ、夜毎ニ寄手ノ多勢ニ紛レ、堀際ニ忍寄テ窺ヒケルカ、是ヲ見付大ニ悦ヒ、相タツサヘ、船江城ニ歸ル、此本田左京亮ハ、國司北畠家ニ仕フ、世ニ勇名有ト雖、今度質子ヲ盜ミ出シナカラ、奈何シケン秀吉方ノ色ヲモ顯ハサス、空ク光陰ヲ送リ畢ヌ、終ニハ領知ヲ沒收セラレ、懦弱ノ汚名ヲ末代ニ貽ス、其臣高島カ忠義ノ稱ノミ世ニ鳴ルト云、

四月廿八日、〇中略勢陽松カ島籠城ノ瀧川三郎兵衞、日置大膳、神君ノ援將服部鬼半藏、四十日ノ間驍勇ヲ奮ヒ防戰メ、數萬ノ寄手攻倦ミ、比丘尼慶寶ヲ以テ和ヲ調ント請フ、時ニ城内モ糧米乏キニ至ントスル故、是ヲ許容シ、寄手ヨリ船ヲ乞テ、火炮弓矢ヲ備ヘ、人質ヲ受取、敵トニラミ合テ船ニ浮ヒ、尾州ニ歸ル、神君大ニ城將等カ鋭武ヲ稱嘆セラレ、遂ニ信雄ニ請ヒ、日置ヲメ神君ノ臣トシ玉フ、然レ𠮟幾程無歿シ、剩子孫無ト云、瀧川三郎兵衞ハ後年秀吉ノ寵臣トメ、羽柴ヲ賜ハリ下總守ニ任ス、

〔池田氏家譜集成〕二十一池田記六

小牧長久手陣始終附勝入、之(元)助討死之事

爰ゟ佐久間甚九郎ハ、信雄卿の御身方として、勢州嶺の城へ籠城ゟり、蒲生

林正武神戸ヲ開城シテ加賀野井ニ籠ル

雄利松島ニ入ル

松島攻撃ノ諸將

氏郷(賦秀)ハ秀吉卿乃一味ゟれハ、是を大將として、嶺の城を攻落しゟれハ、〇秀吉ノ兵、峰城ヲ攻ムルコト、三月十五日ノ條ニ見ユ、神戸加賀野江の城ゟ籠りゟり、勢州の住人嶺、久次、上木、千草四人加勢として、是を加賀(もカ)ノ江の城ゟ加りゟる、然る所ゟ、神戸城へ信雄卿方瀧川三郎兵衞後ゟ羽柴下守と言、馳來りて守ゟるゟる所ゟ、同六日、信雄卿の御下知として松ゟ嶋へ押寄、城中へ使を立、城を渡さるへき旨申ゟハしけゟハ、先日木道(造)にあら切せらるて、防くに力不及、城を渡し、大和國へ退ゟる、瀧川城を受取て守りゟる、去程ゟ、秀吉卿諸將ゟ仰せて、松ゟ嶋城を攻らるゟきよし聞へゟれハ、當國蒲田の城主日置大膳亮ハ、瀧川を見積(積カ下同ジ)んとて、千餘ゟて馳來る、籠城人數都合三千餘と㕝聞へし、ゟくて秀吉卿方れ諸將、數萬の軍兵雲霞のとく襲き、三月十五日、松ゟ嶋へ押寄、二重三重に取卷て、明日ハ早天より攻らるへきに極りゟる、其比家康ハ、信雄卿を見積んとて、信雄卿と小牧へ出張なる、秀吉卿も、近々額田(樂下同ジ)へ出張と聞へしゟは、松ゟ嶋寄手れ内ゟりし永野(長岡)兵部太輔藤孝、蒲生飛驒守氏郷、其外大勢額田へ趣(赴)きゟり、扨松ゟ嶋攻手にゟ、秀吉卿れ舍弟羽柴美濃守秀長(長秀)、筒井順慶を大將として、其外織田上野介、九

天正十二年四月七日

鬼右馬允、田丸中務少輔、關右兵衞佐、其外四萬計、同十六日朝詰寄せ、織田上野介手より、大町へ火を掛燒立、四方より責々る、松ヶ嶋の城中少も不騒、各持口を固めて防々る、殊ゑ日置大膳亮持口をい、筒井順慶攻々る所を、大膳亮門を開て切て出、散々に戰、追退けい引さり々る、大膳亮ヶ兵士い兒小姓小僕ゑ至るまて、手柄をせぬいなうまゝなり、されとも寄手い大勢おれい事ともせず、城際へ押寄て、いつ果をきとも見へさまゝなり、（き）後よい扱よ成て、城を渡しゝると也、○

神戸友盛、澤城ヲ棄テ、織田信包ニ屬ス

〔勢陽五鈴遺響〕五河曲郡　神戸府城

天正十二年春、織田信雄、豐臣秀吉ト鉾楯ニ及テ、蒲生飛驒守、進藤山城守、關安藝守萬鐵入道父子、近江軍兵ヲ卒（率）シテ、信雄屬城神戸及國府ヲ伐ツ、故ニ神戸與五郎、國府二郎四郎敗績、尾張清須城ニ奔リテ、織田信雄ニ屬ス、又神戸藏人友盛、澤城ヲ弃テ、織田上野介平信包ニ屬メ、安津（濃津カ）々ニ到テ卒去ス、茲ニ家滅亡セリ、

上下略、信雄、三老臣ヲ誅スルコト及ビ家康、清洲ニ至リテ信雄ト會スルコトニカヽル

〔諸國廢城考〕七伊勢　澤城

天正十年、織田信長此城ヲ神戸藏人ニ賜フ、十二年、蒲生氏鄕（賦秀）コレヲ攻ム、藏人支ル事叶ハス、城ヲ棄テ奔ル、

織田信重

生駒彌五左衞門尉

谷崎忠右衞門尉

守岡金助

家所某

林城

天正十二年、織田信兼（包下同ジ）此城ヲ築キ、子民部少輔（信重）初稱十郎、三ヲ入置ク、○下略

畑城

天正十二年、蒲生氏鄕此城ヲ築キ、生駒彌五左衞門尉ヲ置テ守ラシメ、木造城ヲ攻ム、

小河城

天正十二年、蒲生氏鄕此城ヲ築キ、谷崎忠右衞門尉ヲ置テ守ラシメ、木造城ヲ攻ム、

淨土寺城

天正十二年、織田信兼此城ヲ築キ、守岡金助ニ守ラシメ、木造ノ城ヲ攻ム、

連部城

天正十二年、織田信兼此城ヲ築キ、家所某ニ命メ守ラシメ、木造城ヲ攻ム、

河內城

天正十二年、長湫ノ役ニ、豐臣秀吉兵ヲ引テ此城ニ入ル、（城主未考、）

長秀織田長益ノ書狀ヲ秀吉ニ致ス
五月十三日歸ル
秀吉岩崎山内窪青塚田中郷二重堀マデ押詰ムル芝手ヲ築キ柵ヲ付ケ
佐久間正勝

萱生城

天正十二年、長洲ノ役ニ、織田信雄、佐久間駿河守正勝ニ命メ、此城ヲ築カシム、

八日、甲寅京都ノ奉行前田玄以、羽柴秀吉ヲ尾張ノ陣中ニ見舞フ、是日、京都ヲ發ス、

〔兼見卿記〕六　四月八日、甲寅、○中略玄以筑州在陣爲見舞、尾州へ下向、

五月十三日、己丑、自勸亞相（勸修寺晴豐）申來云、今日下向之處、玄以上洛也、直ニ淀へ下向也、○下略

羽柴秀吉、惟住長秀ニ答ヘテ、尾張、伊勢等ノ戰況ヲ報ズ、

〔山本正之助氏所藏文書〕○山城

去五日御狀幷信雄、家康臆病ヨリ（源五郎カ）黑（源山長盛カ）付兩三通、今日八日參著令拜見候、扨々おゝしき事被申廻候と笑申候、

一此表之樣子先書委細如申候、岩崎山、窪（脫カ）青塚、田中郷、二重堀まて押詰陣捕候て、悉要害ニ拵、陣捕候前ニ芝手を築、柵を付、少も無越度樣ニ申付候事、

一去六日に池勝入、森武藏（長可）、三好秀次（秀次）、孫七郎、左衞門（堀秀政）督、人數貳萬四五千ヨリて、至小幡表差遣、小幡城二ノ丸迄攻入、首百餘討取、則龍泉寺山を根城ニ拵、柏井、大草何も取積丈夫之普請申付候、今明中ニ首尾候間、然者小幡、森山其外不殘令放火、至參州表令手遣、可發向調儀間、九鬼右馬允（嘉隆）も船手ニて彼國へ差遣候事、

一勢州松ヶ嶋儀、三郎（瀧川雄利）兵衞助命、城可相渡由種々令懇望候條、家康さへ討果候へハ、彼等儀者不入儀候間、助首城を可請取由申遣候間、彼表人數貳万餘も、五三日中ニ可令著陣候、○松島開城ノコト、本月四日ノ條ニ見ユ、幷泉州表爲番勢、備前衆壹万計相越候條、岸和田、大坂ニ達、最前遣申候人數五六千候間、至當地令著陣候事、

一右分ニ以猛勢押詰、普請丈夫ニ相構候之間、縱敵身を捨候樣ニ仕候共、不取合、如何ようもおふり候て、大あミををき、家康を取卷、卽時可討果候間、少も御氣遣有間敷候事、

一五郎（丹羽長重）左衞門殿陣取、可然山を要害ニ申付居陣候、普請以下萬端被入精、一段おとなしく候由申、各も譽申候間、其方ゟも秀吉令滿足候、時（於脫カ）者可御心安候、委細御使者口上ニ申含候、恐々謹言、

天正十二年四月八日　　丹羽長重

敵來ルトモ兵ヲ出スコト勿レ

卯月八日

(雑賀長秀)惟越州御返報

羽筑

秀吉(花押)

羽柴秀吉、生駒親正、山内一豊、矢部善七郎等ヲシテ、尾張柏井ノ森川屋敷ノ砦ヲ、一柳末安ヲシテ、酒井七郎左衛門屋敷ノ砦ヲ守ラシム、尋デ、末安ヲシテ、森川屋敷ニ移ラシム、

〔山内一豊武功記〕○佐 天正十二甲申年

一四月八日、織田信雄公と秀吉公及鉾楯、信雄公家康様へ御加勢ヲ頼給ふ、依之尾州小牧山ゟ秀吉公と御對陣、此時一豊公ハ柏井ノ内森川屋布御要害ニ、秀吉公ゟ生駒市左衛門吉(親正)一殿、一豊公、矢部善七殿被閣也、

急度申遣候、兩三人之儀ハ、柏井ノ内森川屋敷御要害ニ有之、堅番之儀可被精入候、少々敵出候共、外へ不被出、城中ニて無越度様ニ可被申付候、不可有油斷候、恐々謹言、

卯月八日

筑前守

秀吉 御書判

生駒市左衛門殿

山内伊右衛門殿

矢部善七郎殿

森川屋敷ハ構宜シ

〔伊豫小松一柳文書〕○伊豫森田專之助氏所藏

急度申遣候、其方事ハかし(柏井)ゐ之内さかい(酒井)七郎左衛門屋敷用害ニ在之、堅番等可入精候、少々敵出候共、そとへ人數不出、城中ニ在之、無越度様ニ可申付候、不可有油斷候、恐々謹言、

卯月八日

筑前守

秀吉公 御居判

一柳市介(末安)殿

○伊豫古文叢所收一柳文書同ジ、

兩人口上之通聞屆候、森河屋敷構能候由ニ候間、右之城尚以念を入拵候而、餘之城をハ何も引崩候て、右城ニ各一所ニ可有之候、やきりおとをもをがり(て脱カ)ニ仕直申候、いろふ(ふ脱カ)も丈夫ニ可申付候、不可有由斷候、恐々謹言、

筑前守

卯月九日
生(稲)橋市左衛門殿
矢部善七殿
山内伊右衛門殿
一柳市介殿

酒井屋敷ハ構悪シ
小牧ノ兵小幡へ移ラバ情況ヲ報告スベシ

書狀令披見候、仍今朝さゝい七左(郎脱)衛門屋敷へ相移者、構も惡敷候間、方々御存(稚)候て不入事ニ候間、各一所にて可然候、無越度樣ニ分別尤ニ候、小牧ゟ出候人數小幡へうつり候者、得其意候歟、其表樣子聞屆候て、慥ニ可被申越候、不可有由斷候、恐々謹言、

卯月九日　　筑前守
一柳市介殿　　秀吉御判有

是ヨリ先、美濃遠山ノ遠山半左衛門尉、同國岩村ヲ攻ム、是日、家康、之ヲ褒ス、

〔上原準一氏所藏文書〕○讃岐(高松部)

御狀披見本望之至候、仍岩村へ相籠候者共被討捕之由御注進、則披露申候、度々ケ樣之御手柄共一段御祝著被成候、雖不及申候、彌其表之儀無御油斷御心懸尤ニ候、此旨可被成御書候得共、揃者方ゟ可申越候由、御意共候、次者此方之儀、彌々御存分被成候、是又可御心安候、尙吉左右奉待候、恐々謹言、

四月八日　　直政(井伊)(花押)
井兵部少

遠山半左衛門尉殿　御報　　直政

○半左衛門尉、明知ヲ攻ムルコト、三月二十三日ノ條ニ、美濃ノ地ニ戰死スルコト、十月十八日ノ條ニ見ユ、

龍造寺政家、筑後柳川ノ鍋嶋信生(直茂)ニ誓書ヲ與フ、

〔鍋嶋直茂譜考補〕五上　蓮池御入城

一其後直(信生)茂公猶御身ヲ被退、佐嘉ヘ御出不被成、然ルヲ政家公ヨリ御使ヲ以、國家御政務ノ事彌御賴ミ被成ノ旨神文ヲ以テ被仰遣、頻ニ蓮池(肥前佐賀郡)ノ城ヘ被招居シカハ、公此上ハトテ、柳河ノ城ヘハ龍造寺上總介家晴ヲ被召

信生柳川ヨリ蓮池ニ入ル

天正十二年四月八日

置、蓮池へ御入城アル、

此時龍家ノ御一族幷頭々ヨリ公へ神文ヲ被差出、其人數ニハ、江上權(權)
兵衛尉家種、後藤伯耆守家信、龍造寺安房守信周、同和泉守長信、同上總
介家晴、同越前守家就、横岳下野守賴續、姉川平右衛門尉信安、内田紀伊
守信堅、副島長門守賢家、鴨打陸奥守胤忠、以上十一人一紙ノ連判也、
此節政家公ヨリノ御誓詞ニ云、舊記、

再拜々々敬白天罰起請文之事

一從最前家之(なカ)被存候上之、於于今親茂子兄弟之様ニ何篇無腹藏可申承
之歟、

一於虎口其方及難儀之、乍勿論見捨申間敷歟、

一其方我等間若誰人雖有讒言、互可糺實否事、

一我等依若輩、可請異見、無腹藏承候者、如何躰ニ被仰候共、氣ニ懸申間敷
之事、

一自然存寄儀候者、其方被仰候上ニも差返可請合申之事、

右條々於令犯用者、

草罰文、

天正十二年卯月八日

信生 參

民部大輔
政家 血判

一其後政家公、直茂公へ御相談アリテ、佐嘉、蓮池ノ兩城ヲ被修補、要害ヲ被
設ケルニ、直茂公世ヲ御伺ヒアルノ由諷說アリ、因茲公御蟄居アリテ、更
々世事ニ御構ヒナシ、然ル間政家公又々神文ヲ被相送、樣々被仰シニ依
テ、公御心解ラレ、彌國家ノ御支配アリ、

政家公ヨリ重テノ御狀幷御誓詞ニ云、舊記、

態申候、仍其方事我等家を被相歎候上者、如(ママ)睦甲冑共ニ信生可爲下知次
第、若相背人候者、一途可被申付候、爲存知候、猶用口上候、恐々謹言、

六月十五日

信生 參

政家御判

再拜々々敬白天罰起請文

右意趣者、就今度其方身躰、從城原之惡說、爲政家毛頭不存候條顯心底候、
於此上者聊非虛僞候、雖新敷不及申候、其方我等間、於向後如此曲說共承

天正十二年四月八日

信生窺家ノ志アリト風聞ス

城原ヨリノ惡說

舅子兄弟ノ如クスベシ

天正十二年四月八日

付候者、互糺實否、勿論不可有異儀候事、

草罰文、

天正十二年六月廿三日　龍民　政家御判

信生　參

政家ノ一族等モ亦誓書ヲ信生ニ與フ

〔藤龍家譜〕四　同四月（天正十二年）、御國家御政務ノ叓、直茂公ヘ御任セ成サルヘキトテ、柳川ヘ御在城アラレシヲヲ、蓮池ノ城ニ招居ラル、柳川ノ城ニハ龍城（造）寺上總介家晴ヲ遣ハサレ、入替テ相守ラル、

此時直茂公御身ヲ退カレ、佐賀ヘ御出是ナキニ付、政家公御神文ヲ以テ頻ニ御招キ有、御一族幷頭々ヨリモ神文ヲ差遣ラレシト也、其後直茂公蓮池ノ城ヲ修補セラル、要害ヲ設ケラレシニ依テ、世ヲ御伺アル由風說アリ、茲ニ因テ、又々公御神文ヲ差遣ラレケレバ、直茂公漸ク御心解ラレ、彌御國家ノ支配サセラルル、

〔北肥戰誌〕二十九　田雜父子軍忠、龍造寺靜謐ノ叓

一龍造寺政家嶋原ヨリ佐嘉ヘ歸城セラレ、納富但馬入道道俊、龍造寺越前守家就以下ノ輩相集リ、安房守信周ハ筑前一ノ岳ノ城ヨリ馳來ラレ、國家靜謐ノ談合樣々也、時ニ安房守ノ方ヨリ、急キ梁河（梁下可ノ）ヘ使ヲ立、鍋島信生ヲ佐嘉ヘ被招シカ共、信生ハ聊カ思慮有ルヨシニテ來ラレス、仍テ安房守自身寺井ノ長福寺迄來テ、信生ヘ度々使ヲ遣ハシ、國家相續ノ談合ニ候間、扞テ佐嘉ヘ來ラルベキヨシ頻リニ申サレシ故、信生不及力シテ、先ツ長福寺ヘ來リ、安房守ヘ對面アリ、稍少時密談セラレ、信周ハ佐嘉ヘ歸ラレ、信生ハ梁河ヘ歸城アリケリ、其後信生梁河ノ城ヘハ、龍造寺上總介ヲ南ノ關ヨリ招キ居、其身ハ蓮ノ池ノ城ヘ移ラレ、晝夜無弓（油カ）斷方々ニ至、色々才覺ヲ以テ、謀略ヲ被回シ間、龍造寺ノ城下少シモ騷動セス、國中シカト靜謐シ、近國ノ旗下中モ彌異心アラサリケリ、

龍造寺家晴ヨリ柳川ヘ歸城ノ時南關ヲ入ル

〔肥陽軍記〕八　信生公家業御相續事

サテ信周ノハカラヒニヨリ、信生公ヲ柳川城ヨリ蓮池ヘ呼マイラセ、當家ノ事ヲツカサドラセ申シ、柳川ニハ龍造寺家晴ヲ置テ守ラセラレ、御領内イヨイヨ靜カ也、〇（上下略、龍造寺隆信、島原ニ戰死スルコト及ビ大友宗麟、兵ヲ筑後ニ出スコト等ニカヽル、）

信生龍造寺氏ノ事ヲ執ル

九日、乙卯是ヨリ先、吉田兼和、使ヲ遣シテ、羽柴秀吉ニ祓ヲ贈ル、是日、使者、尾張ヨリ京都ニ還ル、仍リテ、兼和、參內シテ、尾張ノ戰況ヲ奏ス、

天正十二年四月九日

勝軍ノ祓
秀吉ノ奏
者豊田定長

〔兼見卿記〕六　四月二日、戊申、○略　中筑州出陣、濃州へ明日三日下喜介、今夜相調書狀渡之、勝軍之御祓、鞦一懸大總、遣書狀、折紙也、奏者豊田(定長)龍介方へ手繩腹帶(マヽ)カ、遣書狀、人夫一人召連可被下之由申付之、筑州方へ書狀見于左、

爲御出陣御祈禱、勝軍自在之御祓進入候、可屬御本意之段、勿論存候、隨而鞦一懸大總、進獻候、輕志憚入候、恐々謹言、

吉田左衞門督
兼和(花押)

(四カ)三月三日

羽柴筑前守殿　人々御中

豊田龍介方へ、

御在陣御祈禱之御祓、幷鞦一懸大總、以直札申入候、可然樣御申合憑存候隨而貴殿へ手繩腹帶進之候、微少爲恐候、使者可申入候、恐々謹言、

吉田
兼和(花押)

(四)三月三日

豊田龍介殿　御陣所

使者繪圖ヲ以テ對陣ノ樣ヲ語ル

三日、己酉、天晴、喜介未明罷下了、及夕月神祈念清天也、

九日、乙卯、天晴、尾州筑州在陣へ差下使者喜介、罷上、書狀之返事在之、双方對陣慥見之、大方以繪圖相語了、以此繪圖、禁裏へ爲令申入出京、向勸亞相(勸修寺晴豐)(庭田重保)察所へ行之由、自留主被申之間、勸使者ヲ召連、按察へ罷向、亞相五辻(爲仲)卜將碁(基)也、庭田亞相(重保)已下見物也、尾州陣中之樣出繪圖相語、上江可被懸御目歟之由申之處、尤可然候、中山黃門(親綱)令同道可祇候之由被申之間即參內、中山親王(誠仁親王)御方へ被申入、兼和御前へ參、具ニ可申入之旨仰也、予云、爲躰也如何、各其分也不苦之由中山被申之間、參御前、繪圖之樣申入、日野黃門(輝資)萬里小路(充房)、中山、四辻中將(季満)衣冠、各御緣ニ祇候也、予委細申入、可致退出之處、可候之旨仰之間、御緣各次(ナミ)ニ在之、有御盃之義、先御盃已前、餅アコマ(トテ)各被下之、次御盃、中山頂戴之次第也、勸亞相、源三位(五辻爲仲)、上乘院祇候、御通在之、各數盃也、兼和依仰數盃被下之、迷惑了、御謠在之、予發聲、各達而依被申而也、祝言謠之數刻大御酒也、次退出、日野黃門、進上ト一獻相見也、向清少(舟橋國賢)、參(公雄)德大寺殿、暫御雜談、向牧庵、自是歸宅、○下略

羽柴秀吉ノ將三好秀次、池田勝入、恒興森長可等、三河ニ出デントス、德川家

秀吉木曾義昌ニ戰況ヲ報ズ　池田勝入森長可岩崎城ヲ陷ルル　岡崎表へ働キテ利ヲ失フ　松島陷落シテ羽柴長秀等尾張ニ著陣ス　勝入負傷スト言フ

康、尾張長久手ニ襲ヒテ之ヲ破ル、勝入、長可等、戰死ス、

〔龜子文書〕　〇信濃

尙號根城、尾口、樂田要害丈夫ニ普請申付候、

去八日御札今十一日令拜見候、仍此面儀彌無異儀候、併一昨日九日池田勝入、森武藏(長可)、三州境目相動、岩崎城責崩、首數多討捕得大利候處、卽岡崎面へ深々ら相動、及一戰失勝利候、定其邊へ雜說共可申候、爰元無差儀候、殊ニ勢州松賀嶋令落去、彼面之人數我等弟始美濃守(長秀)、筒井順慶悉此表へ著陣候、於樣子者不可有御氣遣候、尙期來音節候、恐々謹言、

卯月十一日　　秀吉　花押

木曾伊豫守(義昌)殿　參御返報

〔武州文書〕　四上石神井村三寶寺所藏

書狀令披見候、仍去九日ニ參州岡崎表池田相預(助カ)候處ニ、敵夜中人數をくり候て、彼後切懸及一戰、手前切崩、數多討果候、然處ニ池勝令負手、不慮之段不(是脫カ)非候、此表儀樣堅(盛脫カ)固申付候、勢州杯(ハイ)の的(マト)も令落居、彼表人數貳萬餘昨日令著陣候、於樣子ニ不可有氣遣候、其後苦勞令推察候、尙追々可被申越候、恐々謹言、

筑前守
秀吉（朱印）

卯月十一日

長船五左衞門尉殿
富岡平左衞門尉殿

〔加舍文書〕　〇丹波

此面爲音信、饅頭一折到來祝著候、仍此表之儀彌丈夫申付候、一昨日三州岡崎面池勝入被相動、雖失勝利不苦候間、可心易候、勢州松賀嶋城も令落去、彼面之人數悉相越候間、尙以不可有氣遣候、尙追々可申越□(候)、□(恐)々謹言、

筑前守
豐嶋七兵衞尉平入道
泰盈

天正十二年四月九日

家康勝入
長可秀政
秀一以下
一萬餘ヲ
討取ルト
言フ

平岩親吉
鳥居忠政

信雄秀吉
ヲ樂田ニ
追籠ムト
言フ

卯月十一日

□□□□

〔徳川文書〕 ○張 ○尾

今日九日午之刻、於岩崎之口及合戰、池田紀伊守(勝入)、森庄藏(良可)、堀久太郎(秀政)、長谷川竹(秀一)、其外大將分悉人數一萬餘討捕候、卽可遂上洛候間、本望可被察候、恐々謹言、

卯月九日 申刻

家康(花押)

平岩七之助(親吉)殿

鳥居彦衞門尉(右衞カ)(忠政)殿

〔吉村文書〕 ○一肥前

書狀委細披見候、如申越候、昨日巳刻於岩崎表及一戰、一萬餘討捕候、大將分池田父子三人、勝藏、久太郎、竹、三好孫七郎、其外面々共不知其數候、筑前額(婆)田ニ追籠候、今明之間討果、頓而其左右可申聞候、謹言、

四月十日

信雄 (黒印) ○印文威加海内

吉村又吉(氏吉)郎殿

秀吉 (朱印)

吉村氏吉
家康ニ戰
ヲ賀ス

家康皆川
廣照ニ戰
況ヲ報ズ

昨日於岩崎之口合戰之儀付、早々飛脚令祝著候、頓而可令上洛候間、彌可被任存意候、於其表今度被抽忠節之儀無比類候、尙以無油斷於有馳走者、可爲本懷候、恐々謹言、

卯月十日

家康(花押)

吉村又吉郎殿

〔鐵屋水野文書〕 ○張 ○尾

さん〳〵くさひ(草臥)候之間、印判ニ候、

書狀披見候、如申越候、於岩崎表及一戰長策候、大將分皆討捕候、惣人數七八千討捕候、筑前頓而討果候而、自是吉左右可申聞候、馬廻者共少召連候、不高名者一人も無之候、猶追々可申候、謹言、

卯月十日

信雄 (黒印) ○宛所切リ取リテナシ、

〔皆川文書〕 ○二下野

遠境之處芳墨、殊爲御音信黒鞍(鞍カ)之馬被差上給候、乘心馬形等勝候間、別而自愛不斜儀候、眞上洛之節候之間、祝著無申計候、將又其表惣無事、由良、長尾儀付而、先度中川市助差越候キ、定可爲參著候間、不能重說候、從去九日及合戰、

木下勘解由同助休

信雄香宗我部親泰ニ書ヲ與ヘテ秀吉ニ送ル美濃ニ入ルトノ言フ

天正十二年四月九日

始池田父子、森庄三、木下勘解由、同助(駒ヵ)左衛門、大將之者共悉、其外一萬餘討取候、羽柴儀使者如見聞之、地利ニ引入在之間、一途遲延之儀候、乍去此度討留無異儀可令上洛候、於樣子者可御心安候、尙使者口上相含候、恐々謹言、

卯月廿一日　　家康(花押)

皆川山(備後)城守殿

〔香宗我部家傳證文〕四

三月十九日芳翰、今月朔日令披覽候、仍羽柴儀尾州犬山迄越大河押入候間、則可討果事掌に候つる、然處思外濃州地ニ到て逃入候間、無本意遁シ遣候、足早ニ令敗軍候、其子細者、先度及一戰、池田父子、森勝藏以下其外人數をも持候者共一萬五千餘討捕候、依之敵失大利逃散候、左候間、伊勢口、濃州口兩方差合可切上候、〇(下略、五月三日附、香宗我部親泰宛、信雄書狀、全文ハ五月三日ノ條ニ收ム、)

殊去月九日、於岩崎口被及一戰、池田紀伊守父子幷森勝三ヲ始其外隨一之者共一萬餘討捕候、〇(上下略、五月七日附、香宗我部親泰宛、織田信純書狀、全文ハ五月三日ノ條ニ收ム、)

〔松井家譜〕一

春光君御譜一　一〇(中略、秀吉、犬山ニ入ルコトニカ、)三月二十八日ノ條ニ收ム、四月五日、

勝入ノ建議ニ三河ニ入ラバ小牧ヲ引拂フベシ

秀吉秀次ヲ將トシテ三河ニ向ハシム

松井康之柴田紹安ニ戰況ヲ報ズ

小牧表兩軍ノ距離ハ五六町

秀吉樂田ノ古城ニ陣ス

於御本陣御軍議有之候節、池田信輝入道勝入被申出候ハ、德川家之軍勢悉小牧山ニ出張し、本國守うすゐるへし、參州ニ責入らゐ、德川家小牧山を引取らるへし、左ゐらゐ、信雄一人之力ニ而、此大軍を引受防戰あらんより、事成ゐさかるへしとの御評定ふて、秀吉公羙犬山ゐ樂田ニ御本陣を被移、羽柴秀次公を惣大將ニ而、池田家御父子を初參州ゐ被差向候、東照宮此由被聞召、同月九日、小牧山を夜籠ニ御打出、於長久手御一戰有之、池田家御父子以下討死ニ而、秀次公被及敗軍候、其比柴田遠江入道紹安ゐ康(ヤスヵ)之ゐ返書案、

筑州さゐ爲御見舞、飛脚被進候ハ、尤可然存候、在陣以來不申承、御床敷存候處、貴札本懷候、隨而泉州表一揆蜂起仕候處、被打果旨、鰭而相聞、上下滿足申候キ、〇(根來雜賀ノ一揆、岸和田ヲ攻ムルコト、三月二十二日ノ條ニ見ユ、)

一此表儀、家康こゝき山之(ニカ)被陣取候、此方先手衆ニゐ五町六町在之儀候事、

一筑州御本陣かくてんと申て(すカ)古城ニ御座候、こゝきとかくてんとのゐひゞ五十町程在之儀候事、

天正十二年四月九日

天正十二年四月九日

一池紀、森少藏(勝)、羽(左脱カ)、三孫七、木下助左、同勘解由、此衆手をわけ三州境目わ御
差越候處、家康こまき山を夜籠ニ出、右之衆へ切懸、一戦ニ而池紀父子、
森少藏、木下助左、木下勘解由、此衆打死候、羽左、三孫七無異儀退被申候、
其外諸卒大方うゝをも申候、ゑゝもとのさゝゐりこわ少も不成候事、
一伊勢松歟嶋も落去候而、羽濃州、筒井其外此表著陣之由候事、
一加賀能登衆近日出勢之由申候、越前衆之儀ゑ、右(既カ)ニ出勢まて候、五郎(惟住長秀)左
御息(長重)御出陣まて候事、
一先可申入處延引申候、如御書中袋一ッ、桶一ッ、拝領候、遠路と申御懇志
過分之至候、恐惶謹言、

卯月十二日　　松新
　　康之

紹安公　貴報

〔家忠日記〕

四月七日、癸丑、働候、
八日、甲寅、家康へ出仕候、
九日、乙卯、岩崎筋へ働候て、敵先勢池田勝入父子、森武藏守其外壹萬五千餘討
捕候、酒(酒井忠次)左ゑ小牧之おさへおて候、
十六日、壬戌、鵜八郎三所ニふる舞候、外山へ番ニ越候、
十七日、癸亥、酒(酒井家次)小五ふる舞候、

〔兼見卿記〕

六　四月十三日、己未、早天退出、尾州表注進云、去九日、於熱田之
邊及一戦、筑州方敗軍、池田親子、森勝三討死云々、下々數輩討死、追々注進
彌治定也、筑州在所卒度ゝ無別義云々、然共京都以外騒動了、
十五日、辛酉、〇中略入夜尾州表之雑説以外流布、洛中取亂無正躰云々、爰彌(弥カ)氣
遣了、
十六日、壬戌、昨夜騒動雑説也、且(毛カ)頭無之義也、安堵了、

〔多聞院日記〕

一三十　四月十四日、
一去十二日、尾州ニテ及一戦、森勝三、三好孫七郎、池田、保(堀)利久太郎以下終了、
乍去筑州陳ハ無殊儀云々、今ノ分ハ家康勝ニ可成歟、如何、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

〇山城　一去九日(四月)、於尾州合戦、森武藏守、池田紀
伊入父子ヲハシメトシテ、歴々之者共、其外軍兵一萬餘討死、則敗軍、然共
筑州覺悟堅固之故、やゝてもちゝさめらを訖、軍兵討死之儀ゑ、其節如風
天正十二年四月九日

三(三河)等ヲ勝入ニ向フ
家康夜牛小牧ヲ發シ勝入等ヲ襲フ
羽柴長秀筒井順慶ニ尾張ニ等著陣ス
加賀能登ノ衆モ近日出勢ス

酒井忠次小牧ヲ留守ス
熱田邊ニテ一戦スト風説
京都騒擾ス
家康ノ勝利ニ歸セン
三千人計死ス

聞ニハ無之云々、何レニ家康大利此時也、

秀吉ノ兵二日ヨリ行動ヲ起ス

〔當代記〕二　四月二日、池田正入（勝下同ジ）々道、同男庄九郎、森武藏爲先勢三萬餘以人數、孫七郎秀次（秀吉公甥）、岩崎ヨリ岡崎邊（江）可動之旨、令擬被打出、家康公合戰可有之ニテ、六七八三日相續、小幡筋（江）被打出ト云ヘ共、敵不相見、

勝入岩崎ヲ攻陷ス

秀次等敗退ス

家康勝入ト戰フ

秀吉龍泉寺山ニ出ヅ

家康小牧ニ歸ル

九日ニ又被打出處ニ、敵先勢池田家康公先勢、秀次幷堀久太郎人數ヲ追崩、數多討捕、池田聞之ヲ出向之間、右之衆退散、家康公押出直ニ合戰、庄入幷武藏守討死之間、士卒令敗北、二萬餘討取、秀吉公聞給則出馬、龍泉寺山ニ打上リ給、于時家康公朝之合戰ニ士卒相勞ノ間、先刻早小幡ノ城ニ令移給、其晩ニ及暮小牧山（江）歸陣、但路次被相廻也、秀吉公ハ其夜龍泉寺ニ陣取、翌日本陣（江）被歸、此度被打負合戰謂乎、此比サバ（ママ）せ甚五郎又可來歟ノ由、家康公ハ有ケレトモ、無擧容（含）間、又頓テ逐電、高山（江）揚人數令用心、恐怖給シト見タリ、然處伊勢筋之手當ニ被指置美濃守（秀吉舍弟）、幷筒井順慶、其外二萬餘、秀吉公ノ陣所ニックヽ、コレニヨッテ士卒快氣ト見エタリ、

〔豐鑑〕ニ袖露

秀吉ノ兵七日ヨリ行動ヲ起ス

木下勘解由同助休戰死ス

堀秀政家康ノ兵ヲ逆擊シテ樂田ニ返ス

信雄家康九日ノ朝秀次ヲ襲フ

家康勝入ヲ長可ノ陣ヲ襲フ

永井直勝勝入ヲ討取ル

四月七日、秀吉の方より池田勝入、森武藏、羽柴堀左衞門督、羽柴孫七郎秀次四人、二萬餘け勢汰分て、のくてんより東の山ゐおひ、こまたれ陣を右にして、凌（孫木下同ジ）、柏井ふるゝり、三河國へうつる、後へ廻らんとて出立々る、岩崎れ村を破て、野伏少々頭を切、ふのくてと云所に至りしに、信雄、家康貳萬計の勢汰引具して、九日の朝、日よむのひ、兵をもゝめきそひ來る孫七郎秀次よあけあふ、秀次、信雄、家康け軍を、先（よ）りこき（カ）あるらめと思ひしゐ、思ひの外跡より敵來をは、ゐとてさいく、旗をさ汰して落行ぬ、秀次年いまさ若々れいと、木下勘解由、同助左衞門尉二人をそへらをさり、旗を取て地ゐさし、旗さしをはおとして、貳人ともゐ討死しゝる、其次ゐ有し羽柴堀左衞門督やこゐ汰もゝめてのけ合せ、家康の兵の通りゝる、家康（堀脫カ）勢ふと目をのけを通して、兵ともをおとりゐ揃へ、池田勝入、森武藏う陣ふのあゐふ、池田、武藏の勢跡ゐ軍ゐりと聞て、急掛返して、信雄、家康よ向ふともれを、俄ふうてもとしおれい、軍たてをところおまた、戰負さらに、ひつの二三十人計よて、猶敵を窺ひしゐ、永井右近（直勝）とせ來て、勝入を

安藤直次ヲ斬ル
池田元助
長可ハ鐵炮ニ中リテ死ス

秀吉急ギ出陣ス

家康小幡城ニ入ル

三河ニ出セバ小牧ノ兵ハ

秀吉樂田ニ引取ル

討て頭を得つ、太郎庄九郎少落延しあ、父討をぬと聞て返し合をしホ、安藤帶刀馬よりさあしまにつきおとして、則頭狹得り、森武藏守ハ鐵炮ホ中りをきりれハ、頭を取ぬる者もたしあホ聞えも、彼等皆討をにゝをハ、戰わんとをる者もおく、我先よと落しを追掛、命を留(ママ)る事數しらに、あらうしてホあれひをる者、太刀も刀もをてぬとおありゝゝ、り、軍破をぬと秀吉乃陣へ聞えゝ從ハ、敵軍ホをあれよるらん、戰ハ利ある、へしとて、おくてんれ陣狹出、馬の足を休先に、時乃まホ凌つきぬ、信雄、家康、秀吉あろき武士おれハ、寄來らんと兼てさとり、急き小幡れようおいホ引入しあむ、秀吉おすゑき樣おくて、田中とゐふ村にその夜ハ宿をて、明る十日、おくてんの陣ホ立歸給ひゝり、池田、武藏討をぬれと、秀吉大勢なをむ事ともをに、互に陣を堅し、日狹送りゝり、〇上下略、秀吉、樂田ニ陣スルコト及ビ二重堀ノ砦ヲ撤シテ美濃ニ入ルコトニカヽル、三月二十八日ノ條及ビ五月一日ノ條ニ收ム、

〔太閤記〕九　池田勝入父子討死之事

池田、家老の面々を呼寄、謀をけるハ、小牧山之勢逐日重りぬると見えゝり、然間三川ホハ人數も曾て有ましきり、ゐさ此すゐ間を幸ホ、三州ゟ至て中入し、國中在々所々放火せん、去程あらハ、小牧山ゟ有し遠三二州乃勢可及敗軍事、掌を指う如くあるへし、其旨秀吉ゟ相議し、三州表發向せんと思ふはゐあゟ、面々思ふ所あらハ聞候ハんと被申ゝり、何も宜しくれむしまさんと云しうは、卽卯月四日の夜、犬山御本陣へ參、其旨かくと望をしうハ、秀吉はく〳〵と御思惟有て、明日一著御返事有へきとて、先勝入をハ歸し給ふ、五日乃早朝ホ、池田又秀吉卿へ參、此興行今明日相延候ハヽ、首尾相違ゐさをへく候、其子細篠木、柏井乃一揆を駈催し、村瀨作右衞門尉を一揆大將とし、森川權右衞門要害ホ入置候ハんならましある由、篠木ゟ告知をる者有と申上しあハ、秀吉尤ありと同し給ふて、明日六日打立、東三河を少々令放火、やあて引取、篠木、柏井ホ兩城を拵へ、一揆原ホ多くれ扶持方あと扶助し、毎夜敵の在々へ夜討を入おひやあに程あらハ、尾州半國ハ味方ホ屬し候へし、必敵を侮ゟ候ゐ、ほとらかけし侍るあと諫めて勝入を歸し給ふ、角て三好孫七郎殿、其勢一萬、堀久太郎五千、明日六日池田勝入三州ホ至て發向せしむるの條、兩人も令出勢、勝入指圖次第進退可有之旨、增田仁右衞門尉を以被仰出ゝり、其旨勝入、同息池田紀伊守、森武藏守方へも、兩人助成

必ズ敗レン

村瀨作右衞門尉

秀吉六日ヨリ兵ヲ出シテ東三河ニ放火スベシト命ズ

秀次秀政ヲシテ勝入ト行動ヲ共ニセシム

樂田ヲ本陣トス

勝入等六日夜半出發ス

一揆ヲ懐柔ス

勝入等三河ニ出デンコトスルヲ情報小牧ニ達ス

家康八日未刻密ニ小牧ヲ發ス

小幡ニ入ルル

本田廣孝ヲシテ龍泉寺表ヘ出シ監視セシム

として被差遣之條、宜有相議と也、因然秀吉卿も犬山より出張し、樂田を本陣として、二重堀より青塚ゟ至て、馬ふせたの築地を高くきりせ、用心きひしくりなり、

卯月六日の夜半より、池田父子、森武藏守、堀久太郎、三好孫七郎殿打立、巳之刻ゟ篠木、柏井兩郷、尺地を不餘陣取ゟなり、（二里四方之陣取也、一揆原ゟも秀吉よ初）五萬石之地を恩賜有へき旨、其沙汰ゟ及ひしかゝ、何事もさき〳〵しくそ有なる、斯て九日、三州表可有發向との催し、八日の未明より廻文あり、篠木より小牧山ゟ至て、注進申上者ありけて、信雄卿も、家康卿も、其あらまし被知給へり、注進ゟ來りし者を重く賞し給ひて歸しつゝ、密ゟ觸給ふゝ、今日未之刻より、小幡ゟ至て出勢の事有、旗を去やり、さし物を持せ、密に小牧山を忍ひ出よと、榊原小平太（康政）、後號式部太輔、井伊萬千代（直政）、後號兵部少輔、丹羽勘介（氏次）等、其外兩卿の小姓馬廻母衣之者使番等、其器を撰てふさら世、小牧山をひる未之刻ゟ立て急ゐせ給へゝ、無程小幡之城ゟ著陣あり、本田豐後守（廣孝）ゟ仰て、遠聞之歩士十人許、龍泉寺表へ出し、南はしして勢れ行事有ゝ聞て告知せよと、戌之刻ゟ出し置給ふ、痛ゝしや勝入ゝ、ゐるうれおしらへを夢ゟも去らす、亥之刻よ

丑刻小幡ヲ出ヅ

猪子石原附近ニ陣シテ夜ノ明クルヲ待ツ

岩崎落城ノ風聞

勝入ノ先鋒伊木忠次等岩崎ヲ攻ム

丹羽氏重戰死ス

り打立勢を推行ゟ、遠聞之者立歸り、とや多勢南をはして打候由申上しゐ、雨卿も其用意急にして、丑之刻ゟ出給ふ、遠聞之者又來て、多勢ひきもちきらす打候し、能々其御意得ましはせと告申けるは、心易思ひ候へとて打笑せゝゝ、程ゐく猪腰（子石）原の辰巳れ山ゟ著陣して、夜の明るをそ待ゟける、かゝる處ゟ、丹羽勘介ゟ居城岩崎ゟ當て、鐵炮の音、城を攻る聲夥しく聞えしゟ、早城ゐ落ゟりと、誰云共ゐくひそめたあへりぬ、池田ゟ先手一番備伊木清兵衛尉（忠次）其勢二千餘、二番備片桐半右衛門尉其勢二千、岩崎之城ゟ至て著とひとしく取巻、平攻ゟせめて乗入處ゟ、城内より大手へ突て出防きたゝゞひし内ゟ、鍬形打ゟる甲を猪首ゟ著ゐし、大身の鑓持て、能相手もゐあとき思ひ入ゟる風情見えて、一きは先ゟ進ゟ來りし者あり、又爰ゟ池田紀伊守ゟ内太湯（湯下同ジ）寺左平次後號牧野新九郎、と名乘出、はたあひしゟ、終ゟ猪頸の甲ゐ、太湯寺にうゟれゟゟり、則紀伊守ゟ見せしゟは、軍初の門出よしとやうひして手鑓提、大手の門を相防き、二三度突出しけるとを、多勢入替〳〵押しゟは、あまゟ所手をおひ、土肥七郎右衛門尉ゟ討るとろと、其手之弱兵等搦手さ

秀次伊勢ヲ直政ト戦ヒテ敗退ノ陣ニ聞ス

田中吉政ノ陣ニ秀次ヨリ丹羽長政等ニ破ラル

家康ノ兵小幡ヨリ出デテ秀次ノ陣ヲ襲フ

して落しを、片桐半右衛門尉の勢一人も不漏討捕、三百餘實撿ふ備ふ、勝入實撿しゝゝ、事外なる機嫌にて有し處へ、三好孫七郎殿こそ井伊萬千世と戰給ひしの、追立られ、剛兵共多くうさせ、敗軍ゑ給ふよし云出さり、然共さしのある事ふをゐらはせをの、備を替る事もおく、各目と目を見合せ、息とつんて居ける處へ、田中久兵衛尉、堀久太郎備の前へ來て云やうの、孫七郎唯今榊原小平太、丹羽勘介と挑合戰候しう、多勢よ捫立られ候と云も果ぬふ、久太郎大乃眼をゐあらるし、散々ふゑりけるやうの、使も使よこそよれ、其方の與頭と云人數を進退をる役人と云、旁以使ふとに往還をる人ふの有へあらぢ、唯ふけて來さる物ふこそゐめれ、其上兵書に、將輕則士侮るゝと云をと叱をけをの、田中更よ辭やおりゝり、久太郎左右之者共、堀の推察れ上手ゝ非、田中の使の下手のおと、目引鼻引をらひしおり、

評曰、田中の、其比千五百人餘之組頭とし、秀次長臣さりしふ依て、堀散々ふ叱よゝをゝ、

卯月九日辰之下刻、小幡村より出來りさる勢共、人夫を追散し、其威ゐるめしうそ見えさりける、又一備向ひ來さる者有、穗富と云し者是を見て云や

うの、あれ一備の、心よ合戰を持さる勢おり、各覺悟し給ふへしと云けをゝ共、其行程一里もあり有ての事おをは、爾〳〵聞も入をゝ、ゑゝおのめやる計ふ下知して、一町計張出うさせふける、とのう見るゝ内ふ、田中久兵衛尉（秀次）卿之先手也、後任筑後守、備へ手ゐさく足輕をゝけ、既ふ合戰を取結んとせし處ふ、田中の孫七郎殿へ得御意戰んとてくつろけ行を、岡本云けるの、得御意を所ての無そ、組頭の使せん爲の、貳（キタナク）も見え候ものおあと匆（物カ）りしのとも、聞も不入、傍輩ふも總角を見せにゝり、

評曰、穗富の播州三木ふおゐて、足輕大將おりしの、此陣ふて、秀次へ被召出しおり、さすゝ清撰（精カ）ふあひし者ふて、合戰を心よ持さる勢也と、能を見知けるよと、ゑおのえゐへをゝ、

岡本彦三郎、村善右衛門、白江權太夫おと鐵炮をうさせ防きえしの共、敵猛勢を以追拂ひゝをゝの、引退きさり、然と云共、取て歸し合、手痛く戰て、何も甲付の首三討捕てさし上さり、其をも事とせをゝ進を來るふ、平野權平（長泰）後號遠江守、其をも事とせをゝ進を來るふ、平野權平（長泰）後號遠江守、孫七郎殿常々御目をおけられし故、見廻とし

秀次ノ陣裏崩ス

木下助休等戰死ス

勝入長可秀政等岩崎ノ北ニ陣ス

家康ノ兵秀政ノ備ヲ見テ攻

て、樂田より來さりければ、秀次へ、不懸御目、手鑓提面もふらも突てかゝる、少々突退、能侍一人討捕しの共、又新手を入のへ押合せ戰ひ々り、平野も危く見えしを、是もをし立られ、旗本はして退ふ々り、北るをおふ習、敵引付て、旗本を目ふりけ切てかゝりけるを、木下助左衞門尉、同勘解由左衞門尉、岡本彦三郎、進ミ向て鑓を合せ、ゑいしら程戰ひしを、裏く回をしてまわら ゟ成、危くみえけるを、敵彌利ゟ乘て一押揉て戰けるゟ、二人の木下も岡本、穗富も、一足も引を討死しさりけり、かくてこそ南さして逃るも有、東さして落るも有て、前後左右さんざけさり、岩崎の城乃北ゟ當て山有、池田父子、森武藏守、堀久太郎も、谷川を前ゟあて、陣を備て有し處ゟ、落武者五騎三騎つゝ見え來されど、久太郎鐵炮大將をよひよせ、味方敗軍と見えさるぞ、敵唯今味方を追て可來、十間より外ゟらゝ、玉たうゟようさせそ、若あとてゝ遠く鐵炮をとゝのへ、かけ捨ゟゝ、可爲曲事、馬上一人うちたをし候ゟゝゟゝ、爲加增百石之地可宛行と、たしのゟ云渡しけるゟゝ、一きゝ靜ゟ反回て待居さりゟゝゟゝは處ゟ、孫七郎殿先勢千騎計見えさり々り、敵も追すら回て來さりしの、久太郎ゟ備の堅き次見て、追止てかゝりも不來、又引もせも扣てミえしを、少々突退、能侍一人討捕しの共、又新手を入のへ押合せ戰ひ々り、平野も危く見えしを、是もをし立られ、旗本はして退ふ々り、北るをおふ習、敵引付て、旗本を目ふりけ切てかゝりけるを、木下助左衞門尉、同勘解由左衞門尉、岡本彦三郎、進ミ向て鑓を合せ、ゑいしら程戰ひしを、裏く回をしてまわら ゟ成、危くみえけるを、敵彌利ゟ乘て一押揉て戰けるゟ、二人の木下も岡本、穗富も、一足も引を討死しさりけり、かくてこそ南さして逃るも有、東さして落るも有て、前後左右さんざけさり、岩崎の城乃北ゟ當て山有、池田父子、森武藏守、堀久太郎も、谷川を前ゟあて、陣を備て有し處ゟ、落武者五騎三騎つゝ見え來されど、久太郎鐵炮大將をよひよせ、味方敗軍と見えさるぞ、敵唯今味方を追て可來、十間より外ゟらゝ、玉たうゟようさせそ、若あとてゝ遠く鐵炮をとゝのへ、かけ捨ゟゝ、可爲曲事、馬上一人うちたをし候ゟゝゟゝ、爲加增百石之地可宛行と、たしのゟ云渡しけるゟゝ、一きゝ靜ゟ反回て待居さりゟゝゟゝは處ゟ、孫七郎殿先勢千騎計見えさり々り、敵も追すら回て來さりしの、久太郎ゟ備の堅き次見て、追止てかゝりも不來、又引もせも扣てミえし

擊ヲ躊躇ス秀政反擊ス

家康ノ兵敗退ス

井伊直政長久手ノ長巳ノ山ニ陣ス

秀政等ノ陣疎ニナリテ命令ヲ徹底セズ

直政ノ兵秀政等ヲ攻擊ス

長可ノ戰死

處を、久太郎さゝ推取、時の聲を擧、かゝり候へと、大の眼をいからし下知しさりけるゟゝ、一度ゟ噇とそ突かゝりける、まゝらかけゟおひ足さるゝ勢のくせとして、久太郎こと〳〵よ記圖ゟのり、突て懸ぬるゟゝ、必たまりもあへも敗北する物ゟれゝ、堀り先勢いきをもくれも、一里計追討ゟ二百八十餘討捕ぬ、池田勝入、同子息紀伊守、舍弟古新、後號三左衞門尉、森武藏守も、久太郎ゟ推ゝひて追行、首數多討捕ゟ々り、爰ゟ井伊隼人佑ゟ後齋井伊萬千世とて十九歲、容顏美麗ゟし故、剛兵三千之勢を付給ふ、長久手の辰巳ゟる山ゟ三段ゟ備へ、白ゑゟひの弓鐵炮の者五六百人、先手を張てうさせゟるゝゝ、堀り先勢是り避易し、追止りてみえし處ゟ、久太郎もむや走來り、使番の馬上を以彌制し止、人數を立んとをれとをも、まゝらふ成て、北るをむひ來さりし勢ゟるゝゝ、早速ゟ立得も、池田も森も勢を立んとをれとも、立もそろゝも、下知も聞も、一揆勢のゟとし、白ゑゟひさしたる弓鐵炮、爰を先途と射けるゟ依て、武藏守、ゟるを追立拂ゝんとせしを、鐵炮よて森り眉間を射さりけるゟ、聲もせにうりふれゟ

天正十二年四月九日

家康麾下ノ進撃

池田ノ兵家康ノ馬印ヲ見テ裏扇ス

永井直勝勝入ヲ斬ルル

若江ノ三人衆

臥てゝり、敵も是ゟ氣を得、味方も是ゟ力を失ひ、彌進ミかゝう見えけるゟい、敵猶勝ゟ乘て、山の尾崎を取て推廻しゝり、勝入父子も、左手乃合戰の色如此あしかりけるを見て、右手を強くせよとはれを振て、こゑもの甚、身もはるゝゝ計ゟ怒りつゝ共、井伊の弓鐵炮之勢引ゟこりうちけゝい、無爲方、去かる處ゟ金乃扇の馬驗、岑ゟ見えより朝日乃出るゟおとくをし上ゝり、拔いて德川殿是ゟましはしけるよと、諸人見れとろき、うし弛足をふミ初しゟ、下々の雜兵見るゟ内ゟ裏くつゝし、勝入の旗本うゝく成て、彌危うかゝしゟは、秋田賀兵衞尉、梶浦兵七郎、片桐與三郎、竹村小平太ゟとは少ゝゟゝりて戰ひ居ゝりけるゟ、此由を見るよりも、手前ゟ敵をは追ちらし、手勢引ゝゝ、死を善道ゟ守るとい、此時そかしと思ひきゟ、助來て竪横十文字ゟ切てまわゝ、防きゝゝゟふ形勢、ゝとへていとんのゝも彼し、然りとはへとも、敵い多勢ゟり、味方も小勢ゟれゝ、相ゟゟいもして討死をそ遂ゝりける、

評曰、此者共も心はしゝきまゟ高ゟりしゟ、果して遂忠死き、かゝりし處ゟ、安藤彦兵衞尉突てかゝり、ゟゝし戰て突臥しかゝ、長井右近助來て、勝入うくひを取てゝり、池田う先手池田丹後守（是は河州若江之三人衆と云し内也）

午刻勝入等戰死ノ報秀吉ノ本陣ニ達ス

秀吉龍泉寺ニ出ヅ

木村小隼人佑

堀尾可晴

一柳末安

家次等小幡ニ入ル

鐵壁も物うゝゟ、足踏實地戰へとも、左右之勢い、其をも見もて退しのい、敵ゟ北ゟを追行共、丹後守ゟい取合ゟ、依之勢を立初ゟる所を立も去も、後まて有しのとも、勝入、同嫡子紀伊守、森打死せしゟ依て、惣敗軍ゟ及ひけゝい、丹後守も退ゟゝり、兩卿の先陣後陣ひとつゟ成て追行、平討ゟうち行候を、母衣之者使番之士を以、長追としもゟ、もとや引返し候へと制し給へとも、其道ゟ得ゟる去ゟしゟや有々ん、頓而追捨引入ゟゝり、

秀吉卿依池田父子討死御出馬之事

天正十二年卯月九日午刻、池田父子、森武藏守討死之由、到于樂田注進あり、秀吉卿急具を立よ、取出〳〵ゟ有之勢い、能其城を堅固ゟ守り候へ、其外い悉く打立候へと觸廻し、鞭汗馬急給ふ、一番具ゟ先勢とや出しゝは、御馬驗のふくへを庭前ゟれし立給へ、二番三番よ、十六番まて出し給ふて、卽御出馬あり、道すゟら落武者引もきらほ通りつるゟ、推分〳〵至于龍泉寺、木村小隼人佑、堀尾茂助（可晴）、一柳市介（末安）ゟと著陣し、足をもためも、長久手原ゟし向いんと、龍泉寺の坂を下りくゝり見やゟとはや合戰事過て、小幡の郷へ、家康、信雄乃御勢を取入給ふと落武者も云々り、げゟ左も有と見えけゟ

天正十二年四月九日

い、横あひ〻馬を入、能兵共少々討捕ぬ、爾有〻や、敵も南の山〻付て道をう
へ、取入ける半、秀吉もとやや彼寺へ著給ふてゐたりつゝ、池田ゟ敵を必侮ら
され、ほとらかけを取と再三制しつるゟ、不用して〻かく取越度事、無念極々
せりとて、腹をさち〳〵小幡へかゝり〻て、池田ゟ吊合戦去てんよせいきま
ねて、馬をとゞめ給ひし故、各轡ゟ取付、とや日も西山〻かゝるに、敵も勝て甲
の緒をしめ、一向不取合躰ゟ見え候條、唯柏井まて御馬を納られ、可然おい
きんと、稲葉なともいよ〳〵よく諫申せ〻、應其儀歸陣したまふ、

評曰、ふくるをつよくおふ〻、古今不易の人情あり、今十町も追過ぬ〻、秀
吉卿の先陣と寄合かしらゟあふて、又合戦あらん、上勢や新手と云多勢
と云、三河勢〻事ゟあふてはやられさる勢と云、小勢と云、旁以危のるへき
う、家康卿はすうれ名将ゟて、長追をゑとゞやく制し給ひつるに依て、勝
利故全くせし事〻、麗涓うなくまて追過をし、孫子ゟ討をしを以てう、慎
しをん可有物あり、先陣や打まけ、大将三人討死しやるよし、注進有と等
く、秀吉卿急ゟ勢を出し、小幡へ取入勢の首を且見給ひしん猛将あり、聊
もためらふ心はしまさは、かくんあらし、何もれつをもおとらぬ名将あ
りと、其比の風俗咸感しあひ、

殿や堀尾茂助仕候へ、卽此龍泉寺ゟ殘て、吾馬ゟ越し下ある川を越ある〻、陣
拂ひを致し退候へと被仰付しうん、堀尾奉り、御心安おやされ、ゆる〳〵と
川を御越候へ、某是ゟあらん程ん、能ゟ沙汰し可申と云て、小幡乃方ゟ向て、
弓鐵炮を張出し、雜人原ん先へ退つゝ、かるき者八百計ゟて有しう、觀音堂
ゟ火をうけ、心しつゐにのたしゟ、敵も慕とされて、彌ゟ〳〵と坂ゟかゝ
りてのきし也、

秀吉卿十二萬騎之勢を打納給ふ事

斯て翌日本陣樂田へ勢を可打納との事ゟ極て、明日も又殿ん堀尾茂助（後號帶刀先生吉晴）ゟて有けるを、篠木の内大草村ゟ在て、其時刻をそ待ゟける、秀吉十
二萬騎の勢を段々ゟ備させ、くり引ゟ引給ふう、順風乃船下坂の車よりい
と安（緩）うみえたりしん、豊韓信う下風ゟ非乎、夜をゟめつゝ退けをとを、多勢
ゟれた辰の刻計ゟるうゝ〳〵里をとゐれ、野へ上りしうと、いさ堀尾も退ゐ
んとせし處ゟ、とや一揆共雲霞のゟとくおこり來て、茂助う宿陣乃ゐしき
ゐ幾重共ゟく打圍を、弓鐵炮を打入〳〵、時の聲を作りうけ、既ゟ攻入んと

可晴殿ス

秀吉兵ヲ樂田ニ退ク

一揆可晴ノ陣ヲ襲フ

西ニ向ヒテ鐵炮ヲ放チ東ヨリ突出ス

見えしかば、突て出、成次第ゟ退給へと云も有、いや〳〵八重十重ゟ打圍ミ、殊ゟ篠木、柏井ハ、昔より究竟の射手ハ多き所なれ、爭ふのハ得あん、唯此構を堅固ゟ守り、後巻を請給ひ候へゝしと云も多ゝりけゐ、堀尾其損益沙勘辨し、唯急き突て出退候へ、時刻移るゟ隨て、敵ゃ彌かさかり、味方ハうすく成るべたゝうとて、西の方を專ゟ強く張出、鐵炮を放し立けるハ、一揆共西の方へ悉く馳集て、切て出るゟと相待、細き道ゟせ有あふて騷動しける處を、門をおらき鐵炮をつるべ、突て出しゟハ、蠅を拂ふゟおとく、弓手妻手へ打けさり、やゟて門のうちへ取入、東ゟ向て出しゟハ、一人も殘らに上ある山へ引上、北の方へ赴々り、兵書ゟ云、敵攻其右を、其左を備へよと有し事を、一揆原不知事ハれもゟおさよ、然共西よゐ南より、一揆共山乃尾崎〳〵を取てゐさひ、おゝ乃嶺よりも貝を鳴し、かしこハ谷よりを、曳々聲をあけ、中々すさまじき事肝魂をあらそこそと思ハれしゟハ、弱き下々ハをの〳〵ハ退んとせしを、堀尾、ゟやうの時冷しきに驚き、わた道をのけハ悉くうさ打ゝ物ゟ、心をおとつゟ定め、生死ハ天命ありと思ひきめ、只眞圍ゟ成て退候へと下知し退さりゟり、あまりゟはよく付ぬる時ハ、堀尾引返し突倒

秀吉ノ兵忽チ岩崎城ヲ屠ル

水野忠重
榊原康政
大須賀康
高本多廣孝
同康重
忠重等秀
次ノ兵ヲ

し〳〵、首を捕てハゐきはる事、五六度ゟ及へり、茂助家臣松田左近右衞門尉、吉川新兵衞尉、並河平右衞門尉、中西勝右衞門尉、保木善右衞門、小野彌一、廣瀨專之助、一瀨二左衞門、さひ〳〵歸してハ戰ひ、今度ハ二町餘追歸し、茂助おりさき、酒を一つ二つ呑て松田ゟさし、息をはき退けをハ、一揆乃中ゟを心ある功者ハ、敵おそ思ひ切て見ゆるそと、心ゟふゟミ、はさゟゟおやいされ共、其より大身を出しおハさされた、溢ゐ者もをのつゟら追ゐて、後ハ相引おして見えさりけゐ、

〔三河物語〕下（二好下同ジ）然處ゟ、岡崎へ押寄而城を取物ならバ、こまき山をたもはゝ事成間敷とて、見吉之孫七郎殿を大將ゟおて、池田勝入、森之庄藏、ゑせ河藤五郎、やりの久太郎、其外三萬餘ゟて、天正十二年甲申（キノエサル）卯月八日ゟ、おぐち、がくでんヲ立而、岩崎へ出て、一時之内ゟ岩崎城を責取而、かち時をはくりて有々る處に、家康ハ三河へ敵ゞまゐるとゝ聞召而、其儀ならバ、人數をはそのゐさんと被仰而、水野惣兵衞殿（忠重）、榊原式部太夫（康政）、大ゐの五郎左衞門（康高）、本田豐後守（多下同ジ）親（康俊ヵ）子（重孝）、其外を指ゐあゐされ々る處ゟ程なく見吉孫七郎殿ゟ押寄而、合戰をおてきりくぜおゟ、岩崎を指而おひ打ゟ打、然處ゟやりの久太郎、ゑせ河藤五郎、

追撃ス
秀政秀一等反撃ス
忠重等小幡マデ追返サル
家康麾下ヲ率キテ向フ
勝入長可家康ト戦フ
平松金次郎鳥居金次本多八蔵
酒井忠次二重堀ノ攻撃ヲ提議ス
家康追撃ノ後急ギ兵ヲ牧ム

岩崎の城を責取而、きをひていさる處へおひのけ〻れバ、ちり〳〵ゐ亂而おひける處を、又其寄おひのへされて、おなさ迄うたれける、然る所ゐ、小牧山ふゐ本上（信雄）と坂井左衛門（忠次）（津下脱ヵ）督、石河（數正）やうき守、本田中務（忠勝）、其外之衆を留スゐゐ跡寄押（勝下脱ヵ）将入と森庄藏と押立て、家康へむゐひ〻る處に、押合おゐせられ給ひ而、家康ゐ御旗本衆、井々（伊）兵部せう計、以上雑兵三千餘ゐて、ひ打ゐ打取給ひ、いそぎ人數を引上而、おなさ之城へ引いらせ給ふ處ゐ、くゐんなく殿おぐち、がくてんへ引入給ふ、〇上下略、家康、信雄ヲ援ケテ、小牧ニ秀吉ト對陣スルコト及ビ清洲ニ歸ルコトニカヽル、三月二十八日及ビ六月十三日ノ條ニ牧ム、

〔安藤直次覺書〕一天正十二年、小牧御陣の時、小牧山へ大閤よりとらんと

被思候處、權現樣早先ゐ陣取給ふ故、大閤行當り給ふ由也、四月五日六日比より、大閤より秀次を大將として、池田勝入父子、森武藏守、堀久太郎等牧岩崎通り三刕へ指向、中入して岡崎牧取んとの評議ゐり、其よし或方より告奉れにより、然らゐ御人數を出し給んとて、先小牧の御留守居ゐ、

石川數正贊成セズ
本多忠勝小幡ニ赴キテ家康ヲ小牧ニ迎フ
秀吉家康ニ先ニ小牧ヲ牧山ニ陣取ラレテ當惑スレ

れ、是寄ふさゐゐりを押やぶりて、こと〳〵く陣屋ゐ火をあけてやきさらふ物あらバ、くゐんなく殿をむいぐん可有と踖（ス、ム）給へ共、其比寄石川をうき守ゐ、くゐんなく殿へ心之有間、其儀不可然とて、やうき之守一ゐんゐ踖（ス、ム）さやうき守をゝまぬと見、さらバ我等ゐおなさゐむゐひよ參らんとて、五百計よて、くゐんなく殿之そおい之下を押而こやり、おなさの城へゆきて御供を申而、小牧山へ來る、敵味方共ゐ、本田中務をほめさり、然間くゐんなく殿も、おぐち、がくてんへ引入給ふ、〇別本、コノ次ニ、ゐかゐ共トアリ、

被思候處、權現樣早先ゐ陣取給ふ故、大閤行當り給ふ由也、四月五日六日比より、大閤より秀次を大將として、池田勝入父子、森武藏守、堀久太郎等牧岩崎通り三刕へ指向、中入して岡崎牧取んとの評議ゐり、其よし或方より告奉れにより、然らゐ御人數を出し給んとて、先小牧の御留守居ゐ、

天正十二年四月九日

秀吉家康ニ先ニ小牧ヲ牧山ニ陣取ラレテ當惑スレ
本多忠勝小幡ニ赴キテ家康ヲ小牧ニ迎フ
石川數正贊成セズ

堀秀政家康ノ兵ヲ逆ヘ撃ツ

地雑ヲ隔テ、兩軍暫ク對峙ス

安藤直次ノ機轉

天正十二年四月九日

酒井左衞門尉、石川伯耆守、本多中書を被仰付、此地大切の所なれ、堅可守之由、御念入さる上意あり、扨御先手の衆、九日の朝長久手ゟ て秀次の備へ押付、合戰を始め、秀次敗軍、味方も勢いつれも追打も、勝入、先手なれ、岩崎の城を取詰攻落も、久太郎、二の手故、不合して居々るゟ、跡ゟて秀次敗軍せらるゝ、敵追來るよしを聞、則伏を立て相待さり、味方の人數、逃散敵汔長追しゐ、はいからに成て追ゟゝる處を、敵、あら手ゟて待受戰ふゟより、味方崩れ立、方々へ敗北す、敵此いきやひよ乘、長久手さして追來る處ゟ、權現樣御旗本れ勢を引具し、山陰より敵の向へ押出、御旗馬印を押立給ひなれ、敵、是をみ、おらんてすゝみ得も、敵間地窪ゟて水さまりおと有所也、敵味方暫くにらみ合て、いまさ懸らも、味方の鐵炮御旗本より間をあさて、山の尾つるより打せける、安藤彦四郎直次（後號帶刀）、御側ゟありけるゟ、申樣、あれおる鐵炮此方へ引ひけ、敵ゟさし向け打候ゝゝ可然哉と言上しなれゝ、尤ゟ思召、早々此方へ呼へしとの仰ゟより、使を遣しなれとも、面々手前をさし置、足輕を遣ゝさんといふ者れし、重て呼ゟ遣ゝされなひゝ、漸く鐵炮少し許り來る、扨彦四郎ゟ申つる所より

長可銃傷ヲ負フ

平松金次郎鑓ヲ入ルル

本多八藏長可ノ首ヲ獲

膝入ノ戰死

打せなれゝ、案の如く、敵是ゟ難義して軍中動搖も、森武藏守も鐵炮手を負、其内敵味方の勢互ひに心そせの駈引ありといへとも、いまさ戰ゝ始まらぬ、兩陣踏こさへ居るを御覽せられ、そや懸れとの御下知おれとも、猶容易ゝおゝゝらさりし處ゟ、御先ゟて平松金次郎（或アルカ）も鎗を入、是よりいつなも思ひ〳〵の働あり、此節御馬の先ゟ進んてかせきなる輩、僅十四人也、その内彦四郎ゝ早くかゝり、敵地を見るゟ、手負さる武者あり、首を取んとすゝみける處に、本多八藏傍より駈出、彼手負ゟ乘かゝりなれゝ、彦四郎ゝ先へすゝむ、八藏う討さお敵ゝ森武藏守也、扨小高き所ゟ、黒母衣の武者三十人計かゝまり居る所へ、彦四郎鎗を以て突かゝる、續て味方の輩少々おゝゝるを見て、黒母衣の武者ともゝ開き退く、去ゟる處ゟ、床几ゟ腰をおけさる武者、彦四郎を見て、せうれめと云て立あかゝりて突倒も、首汔取らんと思ふゟ、長田傳八郎後號永井右近太夫、來て、其武者ゟ乘かゝる、其外ゟも二三人すゝみなれゝ、彦四郎ゝ鎗を拔て、傳八郎ゟ首を取らせなる、此武者池田勝入あり、夫ゟ彦四郎ゝ先へすゝむ處ゟ、井伊万千代黒母衣の武者と組て居る汔見て、詞をうけ

天正十二年四月九日

元助ノ戰死

秀吉敗報ニ接シテ龍泉寺ニ向フ

天正十二年四月九日

見合る時ハ、万千代事なく組伏せられ、助るに及ハゝ、彦四郎申けるハ、人數を預りたるもの自分ハ働ハ無用あり、跡の人數ハ集められよとて、猶先へ進む、池田庄九郎ハ、勝入ゟ討死を聞、取て返し、馬上ゟて馳來る故、彦四郎則突落し首を取、そこより猶先へゟせきけるハ、鎗を打折ゟれ、味方の者乃鎗を持て居々るに向ひ、其鑓を借候へと所望しゝ故とも、ゟへハ、其あとりに味方の衆敵を取巻、討ゐまてみゆる故、彦四郎、彼敵ハ打へき間、此刀ゟ取ゐへ、鎗を我ハ與へよとて、刀と鎗を取替て進む、是ハ初討ゟる敵の刀あるを分取ける也、彦四郎ハ直ニ其敵ハかゝりて、又一人打取しあり、

一小牧御留守居の衆、軍れ御勝負を無心許思ひゝる、中ゟも本多中書ハ、今朝鐵炮の音聞へてより久しき間なるゟ、勝負の左右おきハ心許あし、深働し給ひ、御打死も被遊ゟる哉、尤小牧の御留守居堅く被仰付とハゝへとも、上に御大事ハ及ひ給ふまとともありてハ、ゐとひ堅固ハ御留守居仕ても無詮間、所詮御跡ハ慕ひ可參とて、餘人ハ構ハゝに打立て行、拔大閤ハ、味方の敗軍ハ聞、いそき人數ハ引具し、樂田を出、龍泉寺ハゟして被押行

家康小幡ニ入ル

小牧ニ移ル

候處ハ、中書手勢を引連、ゐつ〳〵と下知して、大閤の陣ゟ相並押、大閤ハ山ゥせを被通、中書も間近くゟりつけ押々るゥ、敵の大軍ハ少しも臆をゝ、やゝゟもゝれハ此方より仕懸んとの氣色也、其躰あきらゥハ見えし事ゝれハ、敵陣ハてハ、各よき打をのゥゐと申々れ共、中書ゥ勢ひ撓まされハ、誰向て可討と云者あらゥりゝるよし也、拔中書ハ何事もゐく押過、合戰終り、權現樣ハ小幡へ引取給ふ所へ參りあひ、御前へ出々れハ、よく參りさるとて御感あり、御人數ハ方々へ追討ハてゐる也、いまゟ集らす、御馬廻少勢ある間、中書手勢ハてかこひ奉り、小幡へ入給ひゝる也ハ、御人數も次第に馳集る、爰ゟてまた御評議有て、大閤不寄來内ゟ、早々小牧へ御陣替可然との事ゟて、早潛ゟ小牧へ御越あり、拔大閤ハ龍泉寺山へ押上り見給ふゟ、味方の先手の人數一人も見へされハ、何也も力なく落しゝる由也、權現樣ハ御勝利を得られ、こや小幡へ引取せらるゝ由注進聞へしハよりゝ、さあらハ小幡を可取圍とて、先人數を差向らるゝといえとも、早小牧へ御移りれ由、ゐつ〳〵手なく空しくして、夫ゟり跡へ御引取しと也、

〔永日記〕一長久手ゟ大閤方先手森庄藏手へ、神君方ゟ鐵炮きひしく打れ

天正十二年四月九日

天正十二年四月九日

長可家康共ニ高所ニ陣ス兩軍ノ間ハ谷

城意庵家康ニ撤退ヲ進言ス

折敷さる由、敵ハ少き高き所也、神君の方も高き所也、間拾弐參間のかゞへの谷也、平松金次郎芝をたゝき、八幡々々と云て鑓を入る、鳥居金次郎、平松よ、追手の鑓ハ鑓よ成ましきといふて、鳥居(許カ)をも鑓をする、今村桁之助見事成様子と思ひ、飛込て鑓脇の高名、永井善右衛門高名、先手よ首三ツ取、森庄藏鐵炮よ當るを見て、本多八藏飛込首を取、池田勝入ハ牀机よ腰を懸て居さるを、永井傳八(後號右近)突伏て首を捕、此合戰よ神君下知よて、横合よ鐵炮を急よ打さしむ、母衣懸武者貳拾人計折敷て居々るゟ、鐵炮よ打立られ、手〳〵よ鑓を投突ふして引込、池田庄九郎ハ唯一騎無(裏カ)返して來るを、安藤彦兵衛討捕、庄九郎ハ勝入討るゝを見て乘返すといふ其時城伊庵(景茂)申々るハ、寔早急よ爰を引取給ふへし、多分敵返し來らんと申、如案引取給ふ、追付大勢來る、其儘御座有さらハ、一人も生て歸る者ハ有ましきと也、平松金次郎一番鑓ニ而百石の加增、永井傳八千石の加增、安藤彦兵衛五百石の加增也、平松、鳥居後よ一番鑓乃爭あり、其後平松ハ秀次より一萬石ニ而呼申さるゝ也、了簡をるよ、壹萬石よて呼れさる故よ名高く成さる歟、

長久手役、高名ノ衆

内藤正成家康ニ進出ヲ進言ス

一長久手ニ而高名十三人(五カ)、平松金次郎、鳥居金次郎、永井傳八、森彦九郎、安藤彦兵衛、永見新右衛門、久永源兵衛、蜂谷七兵衛、保坂與三、向坂平七、三橋左吉、柴田孫藏、關金平、本多八藏、小田切加兵衛、

一昔ハ一番鑓、鑓脇の高名と云事也、今ハ一番鑓と云事ハ、貳番鑓といふ事ハ無キ事也と云傳、

一長久手よて本多豐後守手崩申の時、内藤四郎(正成)左衛門察候ハゝ、高木主水此由申上候ハゝ、合戰ハ御負と申上候、御腹をもゝ兎可申と存候て、四郎左衛門跡迄(よりカ)主水を馳拔候て、御前へ參り、今日必死の合戰遊ハさるへきと申上候、其時死を候よハ、人足よも御負被成間敷(マヽ)と被仰候、佐渡(本多正信)守承り、四郎左衛門ハ粗相の義申上候事ニ而候、四郎左衛門、いや〳〵合戰の事ハ此方へ御まかせ有るへし、是非御蒐候へと勸め奉りて、終よ御勝よ成る、

一池田勝入刀ハ、篠の雪と云、片桐小八郎と中込よ象眼あり、和泉守作脇差も添て、永井右近取れり、長久手よて小性共ニさるゝく敵へ付を下知すれハ、共よ軍法有、其儘置けと有て、其時神君引取給ふ、小性共跡うすくなる故、それ〳〵引取、

天正十二年四月九日

家康本多廣孝ヲシテ小幡ヲ守ラシム
家康ノ兵勝川ニ屯ス

家康櫟林ニ至ル
本多重次榊原康政等秀次ノ家ノ敗軍ヲ家康ニ報ズ

〔山中氏覺書〕一天正十二年申、尾州小牧御陣、三月上旬ゟ權現様ト常眞公ト小牧表御陣廻被成候節、公仰ゟ、今度拙者子飼の者ともゟ鑓爲致御目ゟ可懸候由被仰候、

一三月八日の暮ゟ、榊原式部大夫、大須賀五郎左衛門、水野和泉守、本多豐後守をめして、岩崎表の敵ゟ早く附可申候由、頓而御座候旨被仰のよし、本多豐後守ハ小幡ゟ被爲置候之由、御旗本之先手井伊兵部少輔、御旗本の御人數五千計可有之れよし、同日ゟ長久手へ御座も、夜深きとて勝川と申所の少たいらなる所ゟ皆々たり立御座候由、小幡城主本多豐後守所ゟて、一度狼烟（日の脱カ）ゟ差物を張、二度目の狼烟ゟ得道具可持、三度目ニ打立可申由御觸也、

一三月九日四ッ時分、くぬき林迄有御押、

一彼所へ本多作左衛門、榊原式部少輔手より被參、敵陳三好孫七郎殿其外人々敗軍之間、追討ニ可被成候、我等も高名仕候首をハ捨候と申され候、金の棒指ゟる御敵打取申候を、皆々見申候、其時丹羽六大夫を召て、敵ハ定而篠木、柏井へ退可申候、是ゟ彼所へ直路ハなきゆ、先を取切被成度之

直政ノ兵競ヒテ進ム

家康内藤信成ヲ迎ヘテ本多正信大久保忠泰等ト議ス

大久保忠佐
茶屋四郎次郎

城昌茂同意庵

旨御尋候刻、尤御座候とて、御馬の先を乘被申候、それより味方競申候間、鎭可申候由、相模守（大久保忠世）ゟ被仰付候を承候、其外の衆へも被仰付候哉覺不申候、

一井伊兵部少輔者とも競ゟゝり候故、軍法を亂候事、木俣（守勝）めハなきゆ、腹を切せ候ハんと、權現様殊外御腹立被成候、

一内藤四郎左衛門先より乘て被參、權現様御乘迎被成、本多佐渡守、大久保相模守只四騎ゟて御談合、其様子ハ不知、佐渡守、四郎左衛門挨拶と見へ申候、

一先より首を捕て被參候衆三四人見へ候中ゟ、大久保次右衛門（忠佐）計指物を見知候故覺へ申候、茶屋四郎次郎狸之皮ゟ頭巾を著、繻子ゟ羽織ゟて御側ゟ罷在、高名いゟされ候衆へ、手柄を被成候、切捨のよし尤之由申候、後ゟ承候得者、高名之衆渡邊忠右衛門、成瀨隼人、大久保次右衛門、一城織部（昌茂）申され候ハ、劍先むき申さすの由被申候處ゟ、親城伊庵（忠）申候ハ、御家人衆さへ不申上ゟ推參成申事ゟ候、今こそ劍先能御座候、早々可然候由被申候、

直政部下ノ鐵炮組
家康麾下ノ鐵炮組

森長可
直政ノ兵勝入ノ陣ヲ攻ム
忠泰進撃ス
家康麾下ノ戰功

天正十二年四月九日

一兵部少輔鐵炮の者共山よりおろし候、敵へ打ゝけ候半とて堤へ上り候所を、敵きひしく打申候故、一兩度も被押崩候と見へ申候、御旗本の鐵炮頭衆堤の上を眞直ゝ乘込候、眞先へ被參候ゝ加藤喜右衞門、御鐵炮の廿人頭衆と申候ゝ大久保次右衞門、渡邊忠右衞門、水野太郎作、渡邊彌之助、神谷彌五助、加藤喜右衞門抔ゝて候、合戰場ゝ少下ゝて候ゝ、右之衆の鐵炮の者横矢ゝ打ゝけ申候、

一敵山よりおろしゝけ候人數悉く黒母衣ゝて候、其内ゝ白母衣一騎下知をいゝし被參候、大將と見へ候、後ゝ迎(森カ)勝藏殿と云れ申候、池田勝入備ゝ、勝藏備より脇ゝて候、兵部少輔侍ともかゝり被申候、

一御旗本より相模守乘込候故、拙者も供仕候間、夫より後ゝ御旗本の事ゝ不存候、續之加々爪甚十郎、其外いつれも乘出候得共、闇數折節ゝて候故覺不申候、

一右の黒母衣衆とせり合の場へ被參候衆、松平助十郎殿、本田八藏殿蜂屋七兵衞殿、久永源兵衞殿、鳥井鶴之助殿、成瀨新太郎殿、布施孫兵衞殿、坂部又十郎殿、相模守内鳥遠(尾州小牧軍記ニハ、鳥部トアリ)ニ〇金九郎、此衆ゝ弓ゝて候、鑓ゝて

一番鑓平金松次郎
二番鑓鳥居金次郎

安藤直次
永井直勝

かゝり候衆ゝ永井善左衞門、平松金次郎、鳥井金次郎、大久保若之助、(尾州小牧軍記ニハ、荒之助トアリ、)鵜殿兵庫、關金平等を始として、此外多かゝり候得共失念申候、平松金次郎ゝ一番鑓、鳥井金次郎ゝ二番鑓之由、鑓を合候而より、兩方共ゝ少し場を退申候所、敵きおひ亦かゝり候處ゝ、御鐵炮廿人の頭衆能御うゝせ候故、敵方ゝ手負數多出來候而、敵崩候由也、然間いつれも取々ゝ高名被成候、本多八藏、永井善左衞門、今村次郎四郎高名之由、亦松平助十郎殿、鵜殿兵庫殿、大橋左馬之助殿抔ゝ、相模殿ゝ首を御見せ被成候、相模殿自身の高名二ツ供仕候、中間小助、勘六、佐助抔寄合首一ツ指上ル、一勝入手崩候故、相模守乘込候て、步武者と相突ニ突合、敵の鑓相模守甲れ內へ入候故、落馬いゝし候、其馬を敵取候而乘逃候、則敵の馬を宮地彦九郎とり候而、相模守をのせ申候、此時相模守乘候鞍を勝入內土肥權右衞門より贈り申され候、加賀守(大久保忠鎭)所ニ候をのこ鞍の事、

一後ゝ承候へゝ、勝入をゝ安藤彦四郎殿鑓付候而、永井傳八是を切伏首を御取候由、傳八郎手をゝ、味方の者切之由申候、(尾州小牧軍記ニハ、コノ次ニ、一安藤彦四郎ゝ卷レより先ゝ被來、池田勝九郎首を取被申候トアリ、)

天正十二年四月九日

天正十二年四月九日

家康追撃ヲ止ム

一御旗本より留候へと切々御觸候、大久保治右衛門殿抔も御越候て仰候、
御人數次第〳〵に歸申候、

山中市作

一相模守内の者、前田角助、手嶋善太郎、宮地庄左衛門、石川甚大夫、半田忠大夫、柴田才藏、いつれも首一ツ取、板倉權六首二ツ、生捕一人、山中市作首一ツ、合生捕共に拾三、

本多八藏

一御合戰過候て、小幡の本多越前殿の御座敷より、本多佐渡殿、本多越前殿、大久保相模守殿おこ御寄合、市作（後ち山中忠兵衛）を召候て、市作おのれ〻合戰場よりて〻、何方へ參候哉と御尋候間、敵敗軍之節、敵壹人退候故、捨さる鑓〻多候之間、是を取て突落し、首を取候よし申上候へ〻、其敵の具足甲を御尋候間、朱の具足黒甲よりて候由申上候へ〻、退出可致よし被仰候、後ち承候へ〻、味方の内甲州衆乘放候馬を、御走の傳平と申者是を乘候付、馬盜人之由申候を、傳平申〻、此馬主をい〻、新十郎内市作突落討申候、朱具足黒甲の由申に付而、市作を被召出候て御尋候、味方ゟ馬敵乘候て參候處、分明之由被仰候を承候、

一森勝藏殿首をい〻、本多八藏殿御取候由、脇差を御取候而御座候、鼻を御かき候て、去うと云れ不申候由、

家康首實檢ヲ行ハズ

一御合戰ゟ御勝候て、常眞公と小幡へ御座候時、少野の御座候所ゟて、常眞公へ被仰候を、殿ゟ首實檢被成候樣ゟいさすへきと被仰候時、大久保助左衛門被申候〻、敵の旗頭少々見へ候間、先々小幡へ御馬を被入候てゝ如何と、山本帶刀ゟ申候得〻、帶刀尤先御馬を被入候て可然之由、被申上候ゟ付て、實檢無之候、

石川康通小牧ヲ守ルトノ說

一權現樣小幡へ御引取候時、路次へ本多中務殿、石川長門（隆通）殿、權現樣御樣子無心許候て、小牧より御うけ付候、此節敵かゝり候〻ゝ、一番合戰〻此兩人ゟ候〻んとて、皆々競申候、

家康夜陰ニ小牧ニ歸ル

一小幡の城へ御座候時、七ツ時分彼地に而御合戰ゟ御勝、御通方々より城々へ被仰遣、小幡を御出被成候時分〻、未日少殘申候つる、半途ゟて日暮申候、小牧へ〻夜陰ゟ御著被成候、

一平松金次郎一番鑓、爲御加增三百石、永井右近殿千石、安藤帶刀殿五百石被下候、右近殿ゟ〻五千石被遣候て能候〻んと、常眞公被仰候時、我等もの〻ゟ左樣ゟ褒美遣候事〻、いまゟ無之由被仰候と承候、

天正十二年四月九日

天正十二年四月九日

来津康勝

一榎津〇尾州小牧軍記ニハ、来津トアリ、清右衛門敵を鑓付候時、味方參、是を切候而合討と申候處を、あひうちハ不似合候、其方一人の高名ゟ可致之由ニ而先へ參、敵と切合頸を取候由、被爲聞召、藤藏子ゟ似合候働のよし御褒美之由承候、

山中忠兵衛

一小牧へ被成御座候て、今度御合戰の手に合被申、品々一々穿鑿可仕候由、大久保次右衛門殿、渡邊忠右衛門殿ゟ被仰付、毎日御吟味御座候、一御合戰の時分、終不見衆拾人餘も御座候由申候事、

寛永廿年六月　日　山中忠兵衛

山中氏抄文化丙子（十三年）十二月寫、山中氏乃大久保相模守臣、觀書可見也、恭記、

〔渡邊重綱軍功記〕一長久手御合戰ゟ時、小牧ゟ夜明不申內ゟ、殿樣（家康）御出、勝川ニて御鎧を召候、三好孫七殿人數へ御先手水野惣兵衛、榊原小平太、大須賀五郎左衛門、本多豐後、丹羽勘介突てゟゝり、孫七殿人數敗軍追討候、森武藏、池田勝入、堀久太郎岩崎の城を攻取、首實檢仕罷有候處へ（誤傳アラン）、森武藏、池田勝入、堀久太郎追立ら㒵、追討ニ討れ、二十人頭衆見おさめぬ小旗見え候、御先手衆敗軍と見可申候、我も〳〵と乘出、加藤喜左衛門（右下同ジ）眞先ニ敵

直政部下ノ進出

守綱戰況ヲ清秀正成ニ報ズ

を討捕申候、渡部半藏馬上ニて參り、敵を突可申と仕處ニ、乘そらしゟけ申候、二騎目を突可申と追懸候へハ、溝を飛せゟけ申候、三騎目を突可申と仕候得ゟ、水野惣兵衛殿旗ざしの由申候、旗ざしあらハ、馬ニハ乘ましきと斷候へ共、それ馬を取乘申候、旗の紋を御覽し候へと申ニ付、見候得ハ、惣兵衛殿旗ニて御座候故、突不申、御旗本の先手井伊萬千代人數押出し候、半藏先を見きり、御旗本さして參候所ニ、高木主水、內藤四郎左衛門御旗本より先を見參候ニ逢申候、主水、四郎左衛門申、半藏先の樣子ハいかゝと問申候、御先手衆悉敗軍、敵味方を追討ゟいさし、人數をハ居申候、今日ハ御合戰御先手衆負申候、池田勝入、森武藏人數ハ討ハ申候、まゝ先候ハゝ、大軍ニて候間、成間敷候、まとめさる內ゟ、御旗本ニ而御合戰候ハゝ、勝ニも成可申ゟと殿樣へ申上候半ゟ存候て、御旗本へ參候由申候得ハ、御旗本ハまゟ程隔ゟて候、先大事の義ニ候間、先へ參下知被仕候得と、其通り殿樣へ可申上由、主水、四郎左衛門申候、左候ハゝ、早々御旗本の御人數を御よせ被成候樣被申上候得と斷、本ハ場へ急候所ゟ、城織部、丹羽六太夫ゟ逢、元ハ樣子相尋候得ハ、萬千代足輕共、宸前ハ田ぶちニて打合

天正十二年四月九日

天正十二年四月九日

大岡傳藏
同大藏

申候ゟ、山へ追上られ打合申候、(由脱カ)兩人申候、本の場へ行見候得ハ、兩人申こさくこて候、二十人衆の足輕五六十人居申候を引つゝき、本の田ふちへおゐさらり、横合ニ鐵炮をうゝさせ申候を、鐵炮山ニ居申候、(脱アラン)其あゝさゟり下り申候、鐵炮ハ下ニ居申候者ニなゝさり候、其時森武藏鐵炮こあゝさるよしニこ、(候カ)御旗本御人數押出す、敵色めき立候時、一度こゝゝり敵敗軍仕候、殿樣被成御座候方へ敵來り、金の團扇持たる者胴(引)勢をまゝき申候、御前無心元存、半藏足輕引俱し懸付鐵炮打せ候、大岡傳藏進て鐵炮打候、(大岡)大藏無(遠カ)違間弓ゝおし候得共、敵居しきこゝへ候、半藏申候、池田勝入勢敗軍ゟさるゟき、一人ものゝほましいと申々れハ、此詞こて武藏、勝入御勢崩候を見渡し、一度こゝつゝそ敗軍する所へかゝり、敵を突伏々れハ、家來山内喜左衞門足輕首を取、續て撞伏々れハ、神原小兵衞足輕首を取、以上七人つきふせ、七人目ゟ鑓の先をつきおゝり、其鑓を中間こて(終脱カ)惣介渡候へハ、惣助向ふ敵を突申候、鑓ハ先おれ候故、敵鑓をうゝいとりよくる、惣助追付不叶して、殿樣御馬廻り武藏孫左衞門こ、あれ御討被成、鑓取ゝへして可被下候、御取ゝへし不被成候ハゝ、ひけたるへしと斷こ付、孫左衞門追ゝけ討たをし、高名して鑓とゝり、惣助こ相渡ス、半藏ハ刀をぬき、追留ゟて一人切たをし申候、其時追留ゟて、關金平、半藏こ斷申候、

岡崎町人家康ニ秀吉ノ三河進出ノ計畫アル由ヲ報ズ

大須賀康高等先鋒トナリテ夜半小牧ヲ發シ小幡ニ入ル

一陣勝入
二陣長可
三陣秀政

〔小牧御陳長湫御合戰記〕

一四月三日四日ノ時分ト覺申候、三州岡崎ノ町人來テ、近日岡崎江敵中入可仕トテ騷動仕候、頓テ色モ替リ可申ト申候旨、小牧山江注進申上ル、家康公被聞召、能申上候、追付吉左右聞可申也、敵ニ取切レヌ内ニ、早ク歸リ候得ト被仰、彼町人御返被成、諸敵方江忍ヲ御入御聞候得者、勝入ヲ大將ニテ岡崎へ可働トノ企也、(此時家康公小牧ニテ日印ノ御旗ト申御手段御座候、口上ニ申含候、)四月八日之晩、樂田ニ當リ放火見候ニ付、明日可戰アル、夜半ニ打立候得ト被仰付、御先手大須賀五郎左衞門康高、榊原式部少輔康政、水野宗兵衞忠重、同六左衞門勝成、本多豐後守康重(康高)、丹羽勘助氏次、松平紀伊守家信、七頭其勢四千五百餘ニテ、〇(小牧御陣聞書ニ八、八千餘トアリ、)稻場口江被遣、其勢八日ノ夜半ニ小牧山ヲ出張仕リ、小畑著陣仕リ、龍泉寺表江士五十人撰ヒ遣シ、上方勢通リ申候者、注進可仕旨申付遣置候、上方軍勢不知之、一陣ニ池田勝入、同紀伊守恒興(元助)壹萬貳千、二陣森武藏守長可五千餘、三陣

天正十二年四月九日

四陣秀一　信雄ハ酒
五陣秀次　井忠次石
秀吉ノ兵　川數正同
長久手ヲ　康通本多
過ル　忠勝等ト
家康直政　小牧ヲ守
ト小牧ヲ　ルル
發ス　康高康政
等小幡ヲ
出ヅ

天正十二年四月九日

堀久太郎九千餘、四陣長谷川藤五郎秀一壹千餘、五陣三好孫七郎秀次卿一萬六千、何モ相備共ニ如此、都合四萬五千餘ニテ龍泉寺坂ヲ下リ、長久手原ヲ打過龍通候、此旨を小幡ヨリ付置ク者ヨリ注進仕候ト、七頭ノ御先衆上方勢ノ跡ヲ追テ發向仕候、家康公ハ井伊兵部少直政千八百餘（小牧御陣聞書ニ同夜戌ノ刻ハ、三千トアリ、）ヲ御先ニテ、御馬廻五千餘、（○小牧御陣聞書ニハ、五百餘トアリ、）ヲ御進發有テ、御先手ノ跡ニ進テ御急被遊候、一小牧山ニハ、信雄卿、酒井左衞門尉忠次、石川伯耆守數正、同長門守康通、本多平八郎忠勝御置被成候、（○小牧御陣聞書ニハ小牧山ヲ一明レハ卯月九日ノ辰刻、家康公御先手大須賀、榊原以下ノ七頭ノ兵共、小畑ノ城ヲ出、上方勢ノ跡ニ附キ押シ寄、秀次卿是御在知無ク、參河路江段々ニ人數ヲ被押候所、南ノ方小幡村ヨリ敵味方ノ分ハ不知、勢ノ程七八百ノ一備、浮雲山ノ端ヲ出ル様ニ出來ル、秀次卿御馬ヲ被留、小畑村ヨリ爲出勢ハ如何様用有皃（カホ）也、皆々如何思ヒ候ト被仰内ニ、繼テ亦一備出タリ、其間一里計リ有之故、遠見仕ル計成ルニ、穗留（當下同ジ）山城守、秀次卿ニ申上ルハ、唯今小幡村ヨリ出ヲハ備ハ、支ヲ爲持勢ヨリテ候、御覺悟可被成ト申上ル内ニ、小幡村ヨリ續テ、四備五備出來ル、始ノ二備ト續キ推來候ヲ、見内ニ跡モ先モ一ツヨ成リ、手先十町計リ廣コリ、勢子竝ヲ立候様ニ地足ニ成、平懸リニ掛リ、秀次卿ノ後陣小荷駄人夫ヲ追散シ候、追ひ付ニ隨テ旗先ヲ見ハニ、車の輪の紋、永樂錢也、偖ハ家康公の人數也トテ、騷動仕事成（（誤脫アラン））ヲハ、小牧の家康卿へ聞ル可申ヨ非ス、亦小幡ニ是程人數可有ニ非ス、兎角唯妻ニ有間敷也、備ヲ立置申ト下知被成候、村善右衞門、白井權太夫、岡本彦三郎張出シ、弓鐵炮にて付立防戰候得ドモ、家康公乃衆事ドモ仕モ、眞黒ヨ掛リ來リ候故、秀次卿の御先田中久兵衞長（吉ノ脫）正備ハ不及戰ニ見崩ニ崩ル故、秀次卿御旗本危ク見申候也、大須賀、榊原、本多等推立掛リ來リ候故、鐵炮サヘ討兼ハ程急成故、秀次卿ヲ助ケ可申トテ、長谷川備ヲ崩シ掛リ來候、丹羽、水野、射立付立懸リ候故、秀次卿モ長谷川モ前後一ニ成リ敗軍仕候テ、立足モ無ク敗北被仕候、家康公御先手衆七頭、勝ニ乘テ北ハヲ追進ミ申也、秀次卿ノ内木下助左衞門、同勘解由、穗留山城守踏止リ討死仕候、家康公ノ方水野六左衞門勝成一番功名被仕候、續テ久野三郎左衞門家臣本間忠三郎二番高名仕候、（是ハ三郎左衞門息佐太夫供而今度出陣仕候故也、）其外

秀次ノ先陣ヲ襲フ
秀次ノ後
秀次ノ先
鋒田中吉
政ノ備崩
ルル
秀一秀次
ヲ助ケン
トス
秀次秀一
敗ルル
水野勝成
本間忠三
郎

天正十二年四月九日

康高ト康政ト仲善ケレド家中ハモ仲悪シ

康重等秀次ノ兵ヲ長久手ノ方面ニ三里餘追撃ス

勝入岩崎城ヲ屠ル

秀政岩崎ノ北ニ陣ス

秀政後方ノ騒擾ヲ長可ニ報ズ

長可モ亦之ヲ勝入ニ報ズ

夏目彌三郎何モ追々功名仕候、勝ニ乘ル習、何國迄モ追掛申候、本多豊後守康高(重)馬ヲ横ニ立テ切リ、大敵ハ長追仕ラヌ物ソ、追留ヨト旆ヲ振テ下知被仕候得共、大須賀康高、榊原康政ト聟小舅ノ事ニテ、互ニ主人ハ中能候得とも、家中ノ面々ハ互ニ威爭ヒ、吟味合テ中悪シ、康政掛レハ、大須賀續テ遲シト先ヲ爭ヒ候故、丹羽氏次モ紀伊守家信モ制シ兼、共ニ追行申候、水野忠重(康重)、本多康高ハ、長久手ノ方江追行、二方江分追討申候、其追口三里餘ニテ候、

一池田勝入父子ハ是ヲハ不知、參州境丹羽勘助居城岩崎江取掛ケ、一時ニ乘取、首共實撿仕、殊ニ丹羽勘介弟次郎助ヲ家來土肥七郎右衞門討取候故、勝入機嫌克、三百餘之首共打ナラヘ、酒盛仕テ罷有候、

一堀秀政ハ三陣ニ備、岩崎ノ北ノ山寄ニ備ヲ立罷在候所ニ、四番備長谷川、五番備秀次卿、軍ニ打負ル由ヒソメキ候ヲ、秀政存候ハ、何様一揆起テ跡ヨリ取掛候ト覺ソ、此旨可申遣トテ、森長可ノ陣江告知スル、武藏守驚急勝入方江注進仕候、後陣ヨリ段々先江通往候、

一堀久太郎秀政ハ、山ノ尾崎ヲ片取立堅メ下知仕候ハ、敵不慮ニ跡ヨリ起

秀政敵ノ追撃ニ備フ

秀政反撃ス

家康ノ先鋒敗ルル

秀政追撃ス

穂坂君吉以下穴山衆ノ奮戰

勝入長可モ秀政ニ續キテ追

テ、後陣敗軍仕候間、軍大事也、皆々足輕大將共ヲ呼集、味方敗軍仕ト見タリ、敵唯今味方ヲ追可來、十間ヨリ内ニ引請、能タメテ可討、馬乘一人討落タル者ニハ、爲加增百石宛可出ト申渡故、弓鐵炮推靜メ、先手ヲ張テ待掛タリ、是ヲハ不知、家康公御先手衆ハ、秀次卿ノ敗軍ヲ討立〳〵長追仕ル所ニ、岩崎山ノ尾崎ニ堀秀政二段ニ備、其次ニ武藏守、其次ニ勝入段々ニ押續申候、是ヲ見テ、家康公御先衆追留扣罷有ヲ見、久太郎旆ヲ振テ、手勢五千一度ニトツト突掛リ候故、家康公ノ御先衆長追仕草臥果候間、一留リモ不仕追被返、敗軍仕候、堀秀政勝鬨ヲ作リ掛ケ追討申候、榊原式部モ馬上ニテ長刀ヲ持、返シ合〳〵防退申候、大須賀康高ハ大力ニテ候故、馬上ニテ長柄之鑓ヲ以テ拂退申候、五郎左衞門勢横須賀ノ者共返シ合々々防退ニ仕候、家康公ノ方能者貳百八十餘被討候、大須賀モ榊原モ危ク見申處ニ、穂坂常陸(君吉)、岡部五郎兵衞、有墨(衆)大學以下精兵五十騎計、悉甲ニテ身命ヲ捨、返シ合〳〵防戰申候故、康高モ康政モ漸々ニテ引退申候、本多豊後、水野宗兵衞ハ餘ノ道掛リ追行、久太郎ニ不逢候得共、榊原康政、大須賀康高敗軍ヲ聞キ、是モ追留引取申候、堀秀政勝チ乘(ニ聞カ)追行候故、武藏守、

勝入父子モ推續追掛申候、
一家康公長久手ノ内猪(子石)原ノ東南ノ山江、九日ノ晩(聴)寅ノ刻御著陣被成候
ニ、岩崎山城ノ方ニ當テ、鐵炮ノ音、城ヲ責聲夥敷聞候、隨分ト御急候所ニ、
勝川ト申所ニテ夜モ明離ル、御先手敵ニ取付候由聞召、御物具被成候、丹
羽六太輔御具足ヲ召セ申候、惣軍ノ掛ケ聲エイ〳〵ト云ハ惡敷候、エイ
トウ〳〵ト申能候間、皆々其分心得可申ト被仰付、御馬ニ被召、長久手指
シテ御急被成候處ニ、水野六左衞門勝成一番功名被仕、甲首持參候テ、今
朝ノ合戰ノ樣子被申上候、六左衞門鉢卷計ニテ甲ヲ著不申故、御尋候得
者、眼病故甲ヲ著不申由申上候得共(カ)、跡江久野三郎左衞門家老本間忠三
郎高名ノ首持參仕候、偖夫ヨリ功名ノ衆段々重リ候内ニ、御先手敗軍ノ
由注進有之候、則内藤四郎左衞門尉正成、高木主水清秀兩人ヲ御先江物
見ニ被遣候所ニ、七頭ノ御先衆ニ副被遣候渡邊半藏守綱、唯一騎乘來テ
御先手敗軍仕、敵是江追來候、此亂足ノ敵江御旗本ヲ以御懸リ被成候者、
必定御利運ト存候、先江參候由申ニ付、正成ハ半藏ト同道仕戻リ、御旗本
ヘ急申候、高木主水ハ踏ミ止リ、追來ル中ヘ馬ヲ入、能敵ト馬上ヨリ組テ

撃ス
家康寅刻猪子石原ニ著キ勝川ニテ夜明クトノ說
先鋒敗軍ノ報家康ノ麾下ニ達ス
家康内藤正成高木清秀ニ物見ヲ命ズ
渡邊守綱敵ノ追撃ヲ正成等ニ報ズ

落、首ヲ取、馬ヲアヲリテ馳歸リ申候、內藤正成乘歸リ申上ルハ、御先(手脱カ)勝軍
ニテ候間、唯直ニ岡崎江御馬ヲ被入御尤ト申上ル、家康公、兎角ノ御意モ
無ク御笑被成御座候所江、高木清秀討取タル首一ツ提テ乘來、御先手勝
軍ニテ候間、早々御掛リ可然ト申上ル、本多佐渡守正信、何トテ各ニハ無
十方支被申上候哉、是役御無勢ニテ御座候ニ、大敵江御掛リ被成候支如
何ト被申候得者、半藏、主水殊之外立腹仕候、如何佐渡、其方ハ御座敷ノ上
ニ而、出頭ト算用ト社被仕候共、加樣ノ武者支ハ不案內ニ可有、算用ト鷹
野支トハ違候也、御大將ノ御不承ニテ候間、早々御懸被成候樣ニト申上
ル、家康公尤ト思召候哉、左アラハ懸リ候得ト御下知有テ、十人ノ御鐵炮
頭、次ニ井伊兵部少直政千八百餘、御旗本御小姓衆、甲州衆少々御供被仕
候、御馬廻餘リ無人ニ候故、又若黨(テカ)ウモ御供仕セ申候、御旗竝助太夫奉行
ニテ押セ申候、敵モ早近々ニ見江申時、甲州浪人御中間頭萩原監物進出
申上候ハ、足輕ハ鑓ノ垣、鑓ハ侍ノ垣、侍ハ旗ノ垣、御旗ハ勝負ノ無之物成
レハ、御跡ニ被置、御馬ノ先ニハ、金ノ扇小纏計ト申上ル故、御旗ヲハ押サ
ケ參候、井伊直政計一色ノ赤備ノ武者三千餘旗指連テ、山陰ヨリ押出ス、

正成先鋒勝ツト報告ス
清秀家康ノ進出ヲ促ス
家康進撃ヲ令ス
萩原監物
井伊直政ノ赤備先ヅ進出ス

近藤秀用

家康直政ニ續ク

秀政北ノ山ニ南面シテ陣ス

家康ノ馬廻少シ

横田尹松（尹松）等後ニ備フ

直政十九歳ノ若武者故、イレテ從是眞直クニ掛ント被仕候ヲ、三科肥前守云、阿（向カ）ノ山ノ腰ヲ推シ廻シ掛リ給江ト諫メ申候得モ、承引不被致候所江、近藤石見守秀用掛付、是モ同前ニ諫メ、直政馬ノ口ヲ引向ケタヽキ立、山ノ腰ヲ廻シ掛テ（リカ）申候、家康公モ御馬ニ召、三町程ノ田ノ中ヲ兵部ニ追續キ、御懸被成候、直政勢ハ關東甲州ノ兵者故、山ノ腰ヲエイトウ〳〵ト申テ競ヒ掛リ候ヲ、堀秀政先手是ヲ見テ、早見崩ニシサリ、北ノ山江引揚リ、南向ニ押申候ニ付、初ノ場ハ直政勢ニテ取敷申候、兵部兵モ、京方ノ奴原物數ニテハ無ソ、手取ニ仕レト、色々ニヲメキサケフ、家康公御旗推立、指物サシ連テ、扇ノ小纏進テ掛リ申候、久太郎モ、武藏守モ、勝入父子モ、扇ノ印シ山陰ヨリ朝日ノ出ル如クニ押シ出スヲ見テ、偖ハタバカラレタリ、家康公ノ被向候ト聲々ニナシ、北ノ山江引揚申候、馬廻リニハ、鳥井金次郎、匂坂七平、安藤彦兵衛直次、蜂屋七兵衛、久永源六、平松金治郎、今村次郎四郎、以上十四五人ニ不過、御馬廻無人ニ候故、一定御ヲクレ可被成ト見テ、殘ル勢横田甚（尹松）右衛門ヲ始、大略迹ニ扣ヘ、御旗本ヲクレハ、是ニテ仕返サント待居申候、勝入父子、長可、秀政ハ、三萬餘ニテ向ノ山ニ扣ヘ、家康

家康小勢ニテ秀政等ト對陣ス

長可ノ奮戰

安藤直次

水野正重ノ足輕長可ヲ射撃ス

公ハ十六七人ニテ御立合、互ニニラミ合申、十人ノ鐵炮頭ハ、右ニ山ノ腰ヲ片取、白シナイノ御鐵炮ノ者五百人餘、揉ニモンテ討立申候、堀秀政、森長可、池田勝入父子、家康公ノ御馬印ヲ見、與ヲサヽマシ、大事ト思ヒ下知仕リ、已ニ懸ントト仕ル有様ヲ見、安藤直次被申候ハ、右ノ尾崎ヨリ鐵炮討セ候ヨリ、左ノ此尾崎ヨリ討立サセ候半ト申付、家康公最ト被仰、鐵炮此方ヘ分ケ越候得ト、一番ノ御使ニ鵜殿兵庫ヲ被遣候得共、十人ノ足輕頭モ、敵間近ク討合候故、御意ニ不隨、御立腹被成、二番ニ村越茂助、三番ニ加々爪民部、段々御使被遣候故、兩度ニ漸々鐵炮三四十挺來リ候ヲ、彦兵衛指圖ノ山江上ケ、筋違ニ討立候故敵殊之外痛申候、森武藏守長可ハ、白キ袖無キ羽織著テ、武羅武者四五十人歩立ニテ、馬廻ニ連テ、家康公ノ向ノ丸山ニ取揚リ候ヲ、水野太郎作正重下知而、透間ナク打立申候ニ付、長可旗本被討立ヲクレ色見ヘ候、セキ候テ、武藏守、アレ追立ヨト大音聲ヲ揚、下知仕候得共、討スクメラレ懸リ不得、長可大ニ立腹而キ（ヤ、）鑓ヲツ取、自身乘込ントスル所ヲ、水野正重カ足輕杉山源六手垂ニテタメ付討候、武藏守ミケンヲ被討、落馬仕候、馬廻リ走リ寄リ抱集、ヒタト騷敷成申候内ニ、勝

水野正重
大久保忠佐等長可ノ陣ニ乗入ル

平松金次郎勝入ノ備ニ乗入ル

直政長可ノ先陣ヲ破ル

入モ麾ヲ振、聲ヲ限リニ下知仕候得共、鐵炮烈ク難進見江候、乍去勝入ノ家來秋田加兵衛、片桐與三郎、梶浦兵七郎、竹村小平太等七八人競掛テ懸候、此方ヨリモ鳥井金次郎（第下同ジ）、關金次郎、關金兵衛、芝山孫作以下掛合追廻シ、一兩度追合候ニ、鳥井金次郎一人鑓付高名仕候、然ル互ニ同勢續キ不申故、兩方江引別レ、本ノ備江引シコリ、ニラミ合申候内ニ、山ノ尾崎ヨリ水野太郎作一騎乘下シ、長可備江乘込ミ申候、大久保次郎（忠佐）右衛門、渡邊彌之助下澤ヨリ乘込候トヒトシク、武藏守備亂立、群々ト成候時、榊原八兵衛鑓入ント進ミ候テ、渡邊六郎左衛門直綱引留、鑓ハ未タ早ヒソ、早リテ鑓ヲ入レハ、物際テ勢イヌケル物也、我次第ニ致ト引合候處ニ、家康公ハ水野、大久保江、一陣二陣ニ乘込、長可備ハ亂ル、勝入備ヲハ、何トテ若者ル追崩ス（ヌカ）ソト、御身ヲ揉ンテ御下知被成候トヒトシク、御馬ノ先ヨリ、平松金次郎茜ノ羽織著テ、十文字ノ鑓ヲ持、道筋ヲ掛リ行、勝入二萬餘ニテ爲扣眞中エ鑓ヲ入、大音聲ヲ揚相戰所江、鳥井金次郎續テ鑓ヲ入候ト、惣掛ニ成テ追崩ス、井伊直政ハ丸山ノ涯ニテ、武藏守ノ先手ト攻合居被申候カ、平松、鳥井カ鑓ヲ合スルヲ見テ、馬引寄打乘、旋ヲ振、掛候得ト下知仕、直政内三

勝入秀政敗軍ス

勝入ノ戰死

浦與右衛門手鑓提テ田ノ中ヲ直ニ走リ出、長可先陣ノ眞中江鑓ヲ入候、敵從三方鑓付、已ニ討死セント見ヘ候所ニ、中村與兵衛二番ニ鑓ヲ入突崩ス、與右衛門鑓ノ相手ヲハ、與右衛門若黨川口彦助走リ込、柄（カラ）スヂヲナキ伏、鑓下ノ功名仕候、夫ヨリ人數推續テ追崩ス、井伊直政モ自身乘込、馬上ヨリ組テ落、手柄成ル功名致サレ候、爰ニテモ、水野六郎左衛門亦高名被仕候、其外追付思々高名仕候、安藤彦兵衛モ掛ケ行ク、今村次郎四郎ハ刀ニテ押込、敵ノ鑓ノ柄ヲ切リ折、山ノ尾崎ヲ西江追崩ス、久松源六モ走リ續キ、手負ノ有ラハ踏ミ越、先ニテ切伏高名スル、渡邊半藏モ山ノ引廻ニテ、敵七八人突伏追崩ス、勝入ト秀政備三萬餘亂立、惣敗軍ニ罷成候、勝入ハ黒武羅ノ侍五十人計左右ニ置、勝入是ニ有、見捨テ何方ヘ引ナ、返セ〳〵ト聲ヲ限ニ呵リ候共、前陣後陣一ニ成リ敗軍仕候、左右ノ黒縅モ皆散々ニ逃退申候、勝入ハ小高キ所ニ上テ、乘馬ヲ呼ル、敗軍仕候故、不及是非ニ所江、上村傳右衛門、安藤彦兵衛、永井傳八蜂屋七兵衛以下四五人走リ來リ、勝入ヲハ安藤直次鑓付候ヲ、永井傳八落重リ首ヲ取處ヲ、蜂屋七兵衛以下四五人取付奪取トスル故、傳八指ヲ切落ス、乍去首ハ傳八取申

天正十二年四月九日

元助ノ戰死

砂川マデ追撃ス

秀吉家康ヲ反撃セントシテ長久手ニ向フ

本多忠勝犬山ヲ襲ハント言フ

天正十二年四月九日

也、森武藏守長可首ハ、本多八藏討取申候、池田紀伊守恒興ヲハ、安藤直次突落シ首ヲ取申候、夫ヨリ追討ニ仕候内ニ、信雄卿ニ御掛ケ付候、前陣後陣一所ニ成、平討ニ討行申候、勝入父子長可人數大將ヲ被討候故、堅崩ニ致シ、捨鞭打テ敗軍仕候事、蜘ノ子ヲ如(クカ)爲(レ)散、樂田ノ方江逃行候、家康公ノ御手前江討取候首都合一萬三千五百餘(イニ六千五百餘)也、皆々勝ニ乘追行候、龍泉寺ヨリ十町此方ニ砂川ト云所ニテ、武者奉行安藤(脱)四郎左衞門尉正成馬ヲ横ニ立塞(寒リカ)ニテ麾ヲ振リ、不可長追、寂早引取候得ト扣キ立テ、故ニ川限ニ追止リ、敵味方物離仕候、

一秀吉卿ハ、八日從朝樂田迄御出張候テ、勝入ノ一左右ヲ御待候所、九日ノ午ノ刻ニ、勝入父子、武藏守討死ニテ、先手大形討(ヒ脱カ)ホサレ、敗軍ノ由注進有之ニ付、早貝ヲ吹立、十六段ニ押テ、揉ニモンテ、長久手サシテ御出馬被成候、是ハ家康公ノ衆勝ニ乘テ追來リ候半儘、出合頭ニ亂足ヲ可擊トテ御急被成候、

一小牧ノ御留主ニ被指置候本多平八郎、酒井、石川江申候ハ、秀吉卿樂田エ御出馬、犬山無人ニ候間、爰ニテ仕掛、犬山ノ虛ノ處ヲ乘取可申候、上方勢

數正忠次贊成セズ

秀吉樂田ヲ發ス

忠勝家康ヲ救ハントシテ小牧ヲ發ス

秀吉ニ戰ヲ挑ム

秀吉長久手ヘ急グ

一悒モ不仕敗軍無疑旨達テ申候得共、石川伯州、酒井左衞門、秀吉卿ヨリ手入有之故、一圓承引不仕候故、平八郎ハ悒兼、如何可仕ト存候内ニ、樂田ノ方江當リ、早貝立テ、金ノ瓢簞ノ馬驗長久手ノ方江赴キ候ヲ見テ、本多忠勝、家康公ノ小勢ニテ御出馬候間、必定御討死無疑、人ハ兎モ有レ角モ有レ、我ハ長久手江押寄、御死骸ヲ枕ト可仕トテ、手勢僅ニ五百ニテ、小牧ヲ馳出、揉ニモンテ急申候、川ヲ阻テ秀吉卿御旗本ト同樣ニ長久手江馳申候、平八郎存候ハ、爰ニテ秀吉卿江スリ掛ケ、一戰可仕、吾討死ヲ仕程成ラハ、餘程手間可入也、有(テ)左秀吉卿長久手江著陣滯リ可申、然ハ長久手ノ御一戰御心靜可被成ト思案シ而、人數五百餘ニテ、物見足輕ヲ掛申候、一番ノ物見ニ、三浦九兵衞梶次郎兵衞、牧惣次郎(イ四)、二番ニ平八郎自身、松下勘左衞門(イ右)、小野田與四郎唯七騎ニテ、足輕ニ連テ罷出、八萬餘ノ秀吉卿ノ大軍江弓鐵炮ヲ討掛ケ挑掛申候、秀吉卿ハ一刻モ早ク長久手江ト思召候ニ付、御取合モ無御押候故、平八モ秀吉卿ト小川ヲ隔テ打連タテ、道々迫合テ長久手江急申候、龍泉寺江十町程ニ成候時、平八郎川端江乘下シ、馬ノ口ヲ洗セ候ヲ、秀吉卿御覽被成、唯今馬ノ口ヲ洗セ候(手勢五百ニテ)

天正十二年四月九日

忠勝ノ剛勇ヲ稱讃ス

龍泉寺ニ著ク
家康砂川ヲ敵マデ追撃シテ止ム
追撃ヲ繼セバ秀吉ノ爲メ破ラレンシナラン

天正十二年四月九日

武者、鹿ノ角ノ建物ノ甲ヲ爲(タル)著ハ大將ト見ル、偖勇士哉、家康能者ヲ澤山被持タリ、誰カ見知タルト御尋候ニ、稻葉伊豫守、先年姉川ニテ武者振リ見覺申候、家康卿ノ内本多平八ト申侍大將ニテ候ト申上ル、秀吉卿御泪ヲ被流、人數僅ニ五百餘ニテ、八萬ノ秀吉ニ向テ合戰ヲスリ掛候ハ、平八爰ニテ討死シ、我等旗本ヲ追留サセテ、長久手ノ一戰ヲ、主ノ家康ニ心ノ儘ニ可致ソトノ所存也、偖モ〳〵賴母敷侍哉、秀吉カ運强クハ、彼等百人家康ニ有(アル)ニ、終ニハ秀吉利運ニ可成候間、矢ノ一筋モ平八ニ不可射掛ト御下知故、平八モ無恙長久手原江參著ス、秀吉卿モ龍泉寺江向テ、道々落武者引(ヲカ)モ不切通リ候フ、押分〳〵龍泉寺江御著陣被成候、

一家康公ハ龍泉寺御近邊砂川迄、勝入父子、武藏守、久太郎人數ノ敗軍ヲ追撃ニ被成、夫ヨリ追留候ヲ、砂川ヨリ十町餘リ御引取被成候時、金ノ瓢簞ノ印龍泉寺ノ上ノ山江推出シ申候、今十町モ追過ハ、秀吉卿寄合テ合戰始リ、上方勢ハ新手ノ大軍也、味方ハ戰ヒ疲タル小勢成レハ、三河勢敗軍無疑所ニ、家康公良將故、長追不被成、早々御引取勝利ヲ全ク被成候トテ、敵味方モ感スル聲暫ク止ミ不申、家康公ハ途中ニ御馬御留、金ノ瓢簞ノ馬印ヲ遙ニ御遠見被成、先手ノ剛將三人迄吾等ニ被討取、筑前守セキタルト見タリトテ、御機嫌不斜候、榊原式部少罷出、筑前守大ニセキ候テ、馬廻リ計ニテ出候ト見申候、取掛擊取可申ト勇申候、家康公御笑被成、勝ニ勝ハ重ヌ物也、唯早々小畑江引取候得ト、殿ニ渡邊半藏守綱被仰付候テ、小幡江御入被成、其夜小牧江御歸陣被遊候、

一秀吉卿ハ龍泉寺之觀音堂ノ前迄御馬ヲ被早候處ニ、長久手合戰夏散シ、小畑ノ城江家康公、信雄卿ノ勢三萬モ可有之ト見江テ、眞丸ニ引入申候ヲ、秀吉卿從馬上御覽有テ、躍揚々々御立腹候テ、勝入、武藏守敵ヲ不可侮(ナル)、上方ノ敵ヲアヒシラヒ仕ト再三制詞申候ニ、不用越度取妻無念至極ニ候間、小幡江取掛、勝入父子、武藏守弔軍可致ト、御馬ヲ被出候ヲ、蒲生飛驒守氏鄕(賦秀)、稻葉伊豫守、日根野備中守(弘就)、各御馬轡ニ取付、最早日モ暮掛リ、家康モ勝テ甲ノ緒ヲシメテ、一向取合不申躰ニ候間、唯柏井迄御旗被納可然存候ト、達テ御諫申上候故ニ、殿ヲ堀尾茂助ニ被仰付、其夜柏井迄御馬入申候、茂助ハ龍泉寺ニ火ヲ掛ケ、閑々ト引取申候、

秀吉小幡ヲ攻メントス
蒲生賦秀等諫止ス

家康小幡ニ入ル

秀吉柏井ニ兵ヲ收ム

天正十二年四月九日

忠勝小幡ニ向フ
秀吉ハ柏井ニ宿陣シ賦秀等ハ龍泉寺ニ陣ス
家康小牧ニ歸ル

天正十二年四月九日

一本多平八郎忠勝ハ、路次中秀吉卿ト攻合、長久手江著候得者、合戦支終、敵ノ落武者濃々ト退來(リカ)ノ、味方ハ一人モ不見江、是如何可仕ト十方ニ暮家康公ノ御行衛無心元候テ罷在候所ニ、小道具ノ中間ノ一人見江申候故、殿様ノ御行衛如何ト尋被申候得之、御中間承リ、御軍ハ御勝、殿様ハ小幡ノ城江被爲入旨承候故、誰々モ皆小幡江馳參由申ニ付、平八力ヲ得テ、直ニ小畑江掛著申候、途中ニテ家康公ニ追付、御目見江仕リ、忠勝申上候ハ、我等ハ何ノ役ニ立間敷者ト思召、加様ノ大事ニ御召連不被成、サリトテハ御情無ク候トテ、落涙仕リ恨ミ申上ル、家康公御意ニハ、左様ニテハ無シ、其方事ハ吾等身爲分(ケ)ト思、丈夫存故ニ、小牧ニ殘置候テ社、此方ノ働思様ニ仕候ト御意被成候、平八郎ハ後陣ニ押セ、小畑江被爲入候、

一秀吉卿ハ、其夜柏井ニ御宿陣、蒲生飛驒守氏郷、細川忠興、其夜龍泉寺ニ陣取被申候、

一家康公其夜小牧江御歸城被成候、

一小牧ニテ酒井左衛門尉忠次、石川伯耆守數正、本多平八郎忠勝小牧ヲ罷出候迹ニテ、樂田、羽黒之小屋(イ上方勢ノ)千軒計燒拂申候、

渡邊宗綱
家康大須賀康高榊原康政等ヲ小牧ニ招キテ會議ス
康高等小幡ニ赴ク
水野忠重先登ス

一其後蟹江ノ城伊勢表ノ御働有之候得共、事長ク候故、老筆ニテ退屈仕候間、重テ可申上候也、秀吉卿尾張之御退治不罷成候ニ付、六月十六日ニ大坂表江御歸陣被成候、有增此通ニテ候、委細御使者口上ニ申含候、以上、

渡邊圖書(宗綱)頭

〔尾州表一戰記〕

一四月八日之九ツ時分ヨ、大須賀五郎左衛門、榊原式部、水野和泉守、其外人數衆、御先之衆何も小牧山へ御召被成、御内談被取(ママ)候由ニ候、

一關白樣其節ハ三善(好)孫七郎ト申候、池田勝入、森武藏、堀左衛門督、岩崎之城責落、夫より三河岡崎表へ働可申之由、相聞付、大須賀五郎左衛門、榊原式部、水野和泉守、丹羽勘介御添被成、早々小幡へ指出、合戰ヨ及可申旨被仰出候、

一四月八日之日入時分より、小牧山を小幡へ打出し、夜之九ツ時分ヨ、被著陳取申候、明九日之未明より人數罷出、日出時分より小幡を打出し、關白樣二備ヨ御立候處へかゝるヲ申候、常心(ママ)之者丹羽勘介、道之案内者のよし付而、先へ參、鐵炮打合申候、勘介居申所を右ニ申(ママ)、少もたはり不申、和泉守

天正十二年四月九日

秀次敗走ス

勝入等返シ來ル

忠重等後退ス
家康來援ス

二十人衆

天正十二年四月九日

懸申候、其次大須賀五郎左衛門、榊原式部無程かゝり申候、則關白樣ゟい
軍ゟて候、夫より右三人之家中之者高名心掛、一里半二里ほとも追打仕、
和泉守少高所へ乘上、敵あさを見申候、
一岩崎之城責取、右之人數押返し懸參候、ゝや敵合も近被成候所へ、式部家
中村上彌(勝忠)右衛門參、申樣ゟ、只今之所打死候て可有御座と申處、和泉守申
候ハ、彌右衛門物ゟ當り附候處ゟ、只今之打死所と申段いゝゟゝ可有哉、
其子細者、和泉側ゟ馬乘七八騎あらてハ無之、其上人數集り兼候所ゟ、五
騎拾騎打死仕ても、權現樣御存分ゟ御座候へゝ可然候、頓而權現樣當所
可被成御座候間、又一合戰致候て、御理軍(勝カ下同ジ)ニ可成分別專と和泉守、彌右衛
門ニ申所ゟ、彌右衛門申樣者、御尤至極ニ御座候、卒爾ある申樣仕候、此所
少御ひき取尤の由申內ゟ、敵合近罷成ゟ付て、一里半程も引取申所へ、無
程權現樣御旗本之先手井伊兵部、人數押させゟゝゟ候所、勝入、武藏備を
立候所へ懸り、權現樣御鐵炮頭衆其節ゝ貳拾人衆と申候、御旗本之左之
方より鐵炮打立申候所ニ、兵部人數ゟ引續、御旗本より、ときの聲上御懸
り候處ゟ、敵方崩、敗軍ゟ候、其時勝入打死ゟて候、權現樣御機嫌殘所無御

忠重小幡ニ引上ゲンコトヲ家康ニ進言ス

忠重更ニ小牧ニ引上ゲンコトヲ進言ス

座、少山之廣ゟ御馬立申所へ、和泉守參申上次第、
一大閤樣新手の大軍ゟて御指出候ハゝ、今日之御合戰御理軍無ゟ可罷成
哉、手負數多御座候、其上下々(ゲカ)共ゟ草臥申間、何とて此所ゟ緩々とハ御座
候哉、根城之ほしきあとゝゝハ、今樣之節之事ゟ候、急小幡へ御馬御入被爲
成候へと、和泉守被申上處ゟ、尤之申上樣と被仰、小幡へ御馬入申候、和泉
守ハ御次を可仕候旨申上候、小幡へ御馬入申處ゟ、大閤樣立專寺(泉下同ジ)川むう
いの山へ早御出候て御座候、和泉守前後之申上樣、少も違不申とのゝ御意
のよしゟ候、
一小幡へ和泉守人數うち入、家之上へあがり、立專寺山ニ大閤樣御座候方
を暫見申、家の上ゟのほり一本指之、町口へのほり立させ、張番鐵炮之を
の出申候、
一右之家より和泉守おり申、たゝさの城へ參申上樣ハ、急御本陣小牧へ御(ヘ)
馬(脫カ)御尤ゟ候、其子細ハ、大閤樣新手ゟて立專寺山へ御座候間、大軍ゟて小
幡へ御押ゟけ候ハゝ、搆惡敷、其上兵粮無之、今日之御合戰ゟ下々(上カ下カ)とも
くさぐさ申候間、是非小牧へ御馬御入候樣ゟと申上處ゟ、和泉守申所尤

天正十二年四月九日

之由御諚被爲成、九日之日入あひ時分より、小幡表御出被爲成、小牧御本陣へ夜之九ッ過より、惣御人數ともより御馬入申候、

一太閤様ハ立專寺山より九日之夜中より御本陣へ御引取候、夫より又御相陣より御座候、

戌刻家康小牧ヲ發ス

〔江崎庸三氏所藏文書〕　○尾張　小牧陣所之者之咄傳之覺

一同（四月）七日之申之刻ニ、兼而從家康公被付置候物見之注進ニ、大閤方ハ小松寺前より上末山通龍泉寺へ懸、愛知郡岩崎之城を責落、其ゟ三河地へ打立申評諚之由告來候付、小牧御陳所中へ御觸御座候ハ、今申之刻ゟ鄉人商人何者ニ不寄、陳取人數之外居申ニおゐてハ、御打捨之由御觸在之、（候カ）俵粮之御仕度被仰付、同夜戌之刻過ニ、家康公ハ小牧山を忍ひ御出、小針村之腰を南へ、青山村之中を御通り、春日井、上原、豐場村之東野合ニ、こかしハ（濱カ）と云窪之通を、（ゟ）女意村之東ニ而御問被成候ハ、先之黒ミハ何方と御尋被成候處、勝川村ニ而御座候（ハ脫カ）申上候、吉凶能所と御意被成、勝川村之東ニ而勢を御休、御具足を被召替候、（ゟ）于今勝川之東ニ、御具足塚と申所御座候、然所ニ龍泉寺之下、上條村之内田中と申所、のろし上り申候得ハ、大閤ハあ（ゟ）ニ御座候と思召、彌御進候處、（九）八日之日之出前より、鐵炮之音聞へ、時之聲聞へ申ニ付、勝川より平押ニ小幡原迄御打上り、大閤之先手森武藏、池田少（將）入、森（守）庄藏（カ）、岩崎之城へ進所ニ、長久手ニ而御出合、悉御打取被成候由、其ゟ家康公ハ勝ニ乘し不宜とて、靜ニ小幡之城へ御居付、其後小牧山へ御引取被成候、大閤ハ先手之衆打（ゟ）候由御聞、御身も不溜、上條村ゟ根本大原越ニ、濃劔兼山之城へ御引被成、御人數之内犬山へも引取申由、○下略、竹鼻攻圍ノコトニカ、ル、六月十日ノ條ニ收ム、

長可等ノ岩崎ニ向フ途中ヲ家康長久手ニ擊ツトノ說

〔古文書集〕　○八　京都帝國大學所藏文書所收

一（長久手）ながくて合戰よ（ゟ）前ニ、我等共ハ先へ參候所へ、敵拾七八騎逃參候、先ニ而我等弓を持かけ出申候處、右之拾七八騎之者引返し逃申候處ニ、壹人馬よ（ゟ）落候而、馬をたてつき居申候ゟ、我等之居申候處見へ不申候付、よらミあい居申候、我等可仕樣無御座候へハ、ほうとかふとの間、目ノ上へ矢を射付申候、それニ而も逃申候間、我等追付、甲乃ともち、太こ（刀）ゟきれゝゟ成やと切申候へハ、ころひ申候間、首を取申候處へ、（津田信政）侍從殿旗本の者